高山市埋蔵文化財調査報告書第20号

ENAKONUKAZUKA MUTEMUKANNOJO SITE

江名子糠塚・無手無冠農場遺跡
発掘調査報告書

1992

高山市教育委員会

序

現在、高山市内には周知の埋蔵文化財包蔵地が237箇所知られています。飛騨全体では1,085箇所ありますが、それは岐阜県遺跡台帳に記載されているもののみで、実際には未発見の遺跡が数多く存在することでしょう。遺跡の種類は、高山市内で縄文時代が86箇所と多く、しかも東西南北の縄文文化が交流しあうという飛騨独得の様相を示していて、全国の考古学研究者に注目されています。

このたび、江名子町・滝町地内において東部農地開発が計画されました。江名子町・江名子藤塚遺跡では、事前に発掘調査による記録保存、滝町・無手無冠農場遺跡では遺跡範囲確認のための発掘調査を行ない、多くの成果が得られました。

江名子藤塚遺跡では、縄文時代早期（約7,000年前）の遺物、中期後葉の埋甕が出土しました。また、無手無冠農場遺跡は標高840mという高地にあります。今回、縄文時代中期後半の住居址５基の分布を確認しましたが、台地上には大きな縄文集落が存在することが判明しました。

報告書刊行にあたり、東海農政局、飛騨土地改良事務所、地元町内会、土地所有者の中屋栄一郎氏、清水勉氏、祐成泰蔵氏、作業に従事・協力をしていただいた皆様に深く感謝するとともに、本書が研究資料として活かされ、文化財保護の一助になることを願うものであります。

平成４年３月

高山市長　日下部　尚

目　次

序
例 言 …… 1

—江名子藤塚遺跡—

第1章　地形と地質 …… 2
第2章　発掘調査の経過 …… 4
第3章　遺　構 …… 6
第4章　遺　物
　第1節　土　器 …… 18
　第2節　石　器 …… 25
第5章　総　括 …… 35

—無手無冠農場遺跡—

第6章　地形と地質 …… 36
第7章　発掘調査の経過 …… 38
第8章　遺　構
　第1節　遺跡の概要 …… 39
　第2節　遺跡の範囲 …… 40
　第3節　遺跡の遺存状況 …… 43
　第4節　第3号住居址 …… 46
第9章　遺　物
　第1節　土　器 …… 50
　第2節　石　器 …… 64
第10章　総　括 …… 76

例　言

1．本書は、平成３年７月23日～10月18日まで現地発掘調査をした江名子糠塚遺跡及び、平成３年６月26日～11月29日まで現地発掘調査をした無手無冠農場遺跡の発掘調査報告書である。江名子糠塚遺跡は岐阜県高山市江名子町字糠塚・1994番地ほかに位置し、無手無冠農場遺跡は岐阜県高山市滝町字乗越・604番地に位置する。

2．江名子糠塚遺跡は、岐阜県遺跡台帳に記載され、遺跡番号はG12T00612である。無手無冠農場遺跡は岐阜県遺跡台帳に「沢遺跡B地点（G12T00632）」と記載されているが、小字「沢」は東側に隣接する別地区であること、今回発掘調査により判明した遺跡範囲は土地所有者が無手無冠農場と呼称していること、遺跡該当地小字「乗越」地区は範囲が非常に広いことを勘案し、遺跡名を農場の名称とした方が適当と考えられたため、無手無冠農場遺跡と呼称する。

3．江名子糠塚遺跡は国営東部農地開発により、本遺跡の南側の一部が破壊されるため発掘調査をして記録保存を実施したものである。無手無冠農場遺跡は、東に隣接する山林で近時国営東部農地開発が計画され、遺跡の状況を確認するため発掘調査を実施したものである。本遺跡発掘調査は文化庁補助金（国宝重要文化財等保存整備費補助金・平成３年８月９日付委保第71号）、岐阜県補助金（岐阜県文化財保護費補助金・平成３年10月28日付教文第597号の21）の交付、岐阜県の委託（委託契約・平成３年８月１日付）を受けて実施した。

4．調査は下記の調査団によって実施した。

団　長	高山市長　日下部　尚		
副団長	高山市教育長　谷脇豊蔵		
指　導	岐阜県教育委員会文化課／高山市文化財審議会会長　大野政雄		
事務局	高山市教育委員会事務局長　坂上了英		
	文化課長　銅島大衍	課長補佐　桜野功一郎	
調査担当者	田中　彰		
調査員	石原哲彌、吉朝則富		
調査補助員	垣水富郎、生津恵子、西倉淳子		
作業従事者	清水マヤ、佐藤直美、藤本真裕美		

5．本編の執筆は、第１・６章　発掘調査の経過、第３・８章　遺構、第４・９章　遺物（土器）を田中彰が、第２・７章を石原哲彌が、第４・９章　遺物（石器）を吉朝則富が担当した。挿図は担当の章ごとに各執筆者が主に作製し、図版は田中彰が担当した。

6．調査にあたり、文化庁原田昌幸氏、大江命氏に御教示をいただいた。

7．調査には次のかたがたに多大なる御協力をいただいた。　中屋栄一郎、祐成泰蔵の各位

8．方位は磁北とし、住居址をSB、土壙をSK、ピットをP、写真をPLと略号で表した。

第１章　江名子糠塚遺跡の地形と地質

分水嶺の北側山麓の糠塚は、江戸時代まで江名子村、片野村、石浦村の草山入会地であったが、近代に広い畑作地として拓かれた。現在は、ほぼ中央を通る「牛方道」より西側が片野町で（少範囲の石浦町飛地が含まれている）、東側が江名子町の範囲である。

後背の急峻な分水嶺は、更新世になってからの江名子断層の活動によって隆起した山塊で、遺跡から山頂までの比高は約300ｍである。隆起活動によって供給された崖錐堆積物による扇状地形を呈している。北東側を江名子町矢林に通ずる谷が、南西側を石浦町坂口に出る谷が開析され、その間に拡がる約100haの緩傾斜地が糠塚地区である。

昭和57年の発掘調査区域の主体は片野町糠塚であった。明治23年（1890）に田中正太郎によって、飛騨では最初に報告された遺跡として知られ、その後も考古学研究史の上でも著名であり、先の発掘調査で縄文前期の住居址より完形で出土した列孔浅鉢２個は、国指定重要文化財となっている。

今回の発掘地点は扇状地形のほゞ扇頂部に位置している。江名子断層線の北側約200ｍの地点であり、その南側は崖錐性の緩傾斜地が馬の背のように断層まで続いている。発掘地点より扇端部までの距離は北西方向に約1.2kmで比高差は約40ｍである。

挿図１－１、１－２は、昭和57年に実施された土地改良総合整備事業によって、かっての扇状地の自然面は大きく姿を変えたので、工事の前後の地形比較の資料として載せた。

挿図２は、地質の概略図である。分水嶺の北側には鮮新世末から更新世にかけての地質がよく発達している。石浦町坂口のバイパス道路沿いに見られる凝灰質の節理を伴う崖は、鮮新世末に噴流した「丹生川火砕流」である。この岩石の浸食谷を埋める形で「江名子層」と呼ばれる礫層が堆積した。分水嶺を構成する中・古生層礫が殆んどで、厚さ約20ｍあり糠塚付近では長径10cm～20cmのチャート礫が多い。平和公園の東側崖にはシルト層や細粒砂層の互層が見られる。その上部を厚く火山灰層が覆っている。

近くの薬師野、向畑、畑殿屋敷、ひじ山、ツルネの各遺跡は、上記のような層からなる丘陵の頂部平担部に位置しているが、糠塚は丘陵谷部を崖錐性堆積物が埋め、引き続く供給によって形成された扇状地形に位置していることが他の遺跡と異なっている。江名子礫層の上部に黄褐色の火山灰質粘土を基質にした、チャートの角礫の目立つ堆積物がみられ、その上部を火山灰層が覆っている。

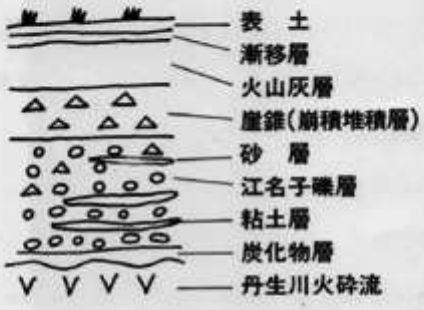
図３は、住居址の西側で土層を見るための試掘坑の断面図である。土質の定量的な観察ではＩは炭化物を多く含む表土である。細粒の軽石とやや汚れた火山ガラスが多く、紫蘇輝石が目

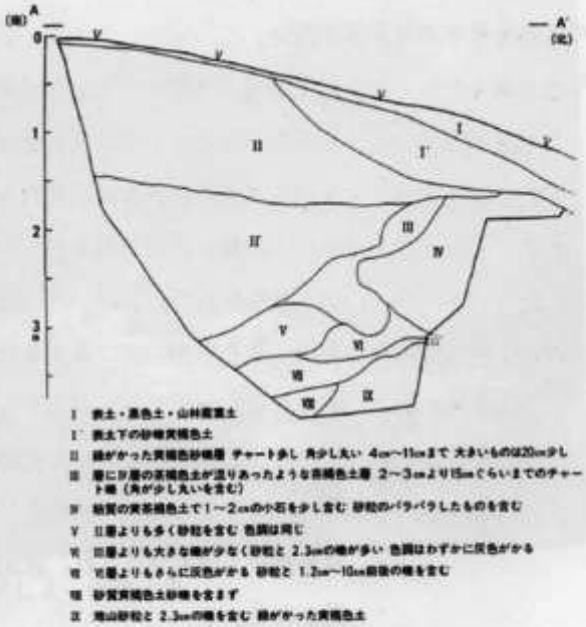
立つことから「アカホヤ火山灰　Ah」を含んでいるといえよう。Ⅳと Ⅸは降下堆積した火山灰層で、フレッシュな火山ガラスと細い針状の長さ0.5㎜程度の角閃石の単結晶が目立つことから、大山・倉吉軽石層（D・K・P）を含んでいると推定される。その他の層は崖錐性の堆積物で、特にⅡ、Ⅲはチャート角礫を粘土質の二次堆積火山灰層が充填している。Ⅳ層の下にもぐり込む形になっているのは、高い地点からの押し込みと谷に近い地点のためと考えられる。遺跡の南側の土層セクションはⅠ、Ⅰ′、Ⅳであった。

挿図１－１　様塚の地形

挿図１－２（25000分の1　地形図より）

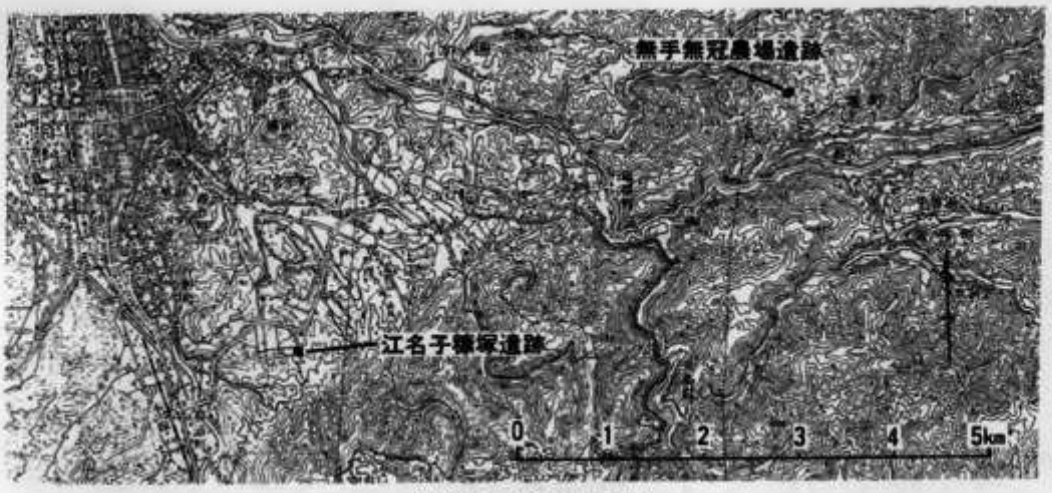
挿図２
様塚の地質概略（層厚は関係なし）





挿図３
試掘坑の土層断面図

第２章　発掘調査の経過



挿図４　遺跡位置図

昭和60年12月23日、国営飛騨東部農地開発事業に伴い埋蔵文化財の有無について、高山市農林部から協議があった。開発区域内に周知の埋蔵文化財包蔵地がある旨、通知をし、遺跡の保存及び記録保存について検討をした。昭和63年に表面採取による分布調査、土層調査を行ない、発掘調査が必要なことを確認した。平成２年11月、岐阜県文化課、東海農政局、飛騨土地改良事務所、地元土地改良組合、土地所有者、市農林部、市教育委員会など関係者と協議の上、平成３年度に江名子、滝町の両地区を発掘調査することになった。以下調査経過の概要を記する。

＜江名子糠塚遺跡発掘調査＞

平成３年５月　　市農林部、土地所有者の祐成泰蔵氏と調査計画打合せ。埋蔵文化財発掘調査の通知について、文化庁長官に書類を提出。

６月下旬　　事前写真撮影。表面採取を行ない、数点の縄文時代中期土器細片を発見。

７月上旬　　事務所設置、発掘用具を搬入し、調査を開始する。山林の刈払い、樹木の伐採を行なう。

７月中旬　　重機により樹木の根、表土を除去、住居址の存在が判明した。

７月下旬　　検出を開始し、ピット群と１基の住居址、土壙のプランを確認する。

８月　　第１号住居址を掘り進めたところ、縄文時代中期の土器片が出土した。床面に近くなると、住居構造材の炭化物が散乱していた。また、西側には埋甕が１箇所発見され、床面を検出していると、さらにもう１箇所発見された。

9月　　SB１と重複をしているSK６～８について検出を進めたところ、下層から繊維入り土器、野島式土器が出土した。SK２～５は、検出時には馬蹄形のプランを有し、樹木の根が抜かれた跡と思われたが、断ち割りをしたところ黄褐色ローム層が埋土になる土壙と判明した。

10月　　遺構の全体測量、細部測量、断面図作製、補足調査を行なった。

平成４年１月　　歴史民俗資料館高山市郷土館で遺物整理、報告書作製に着手。

PL１　遺跡遠景

PL２　遺跡近景

第3章　遺　　構

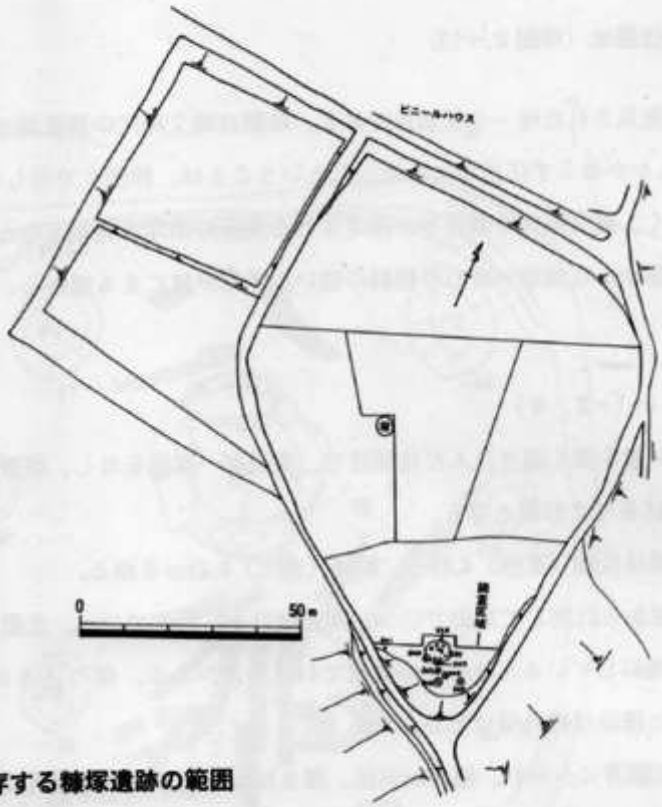
第1節　遺跡の概要（挿図5～7）

挿図5　調査区域位置図

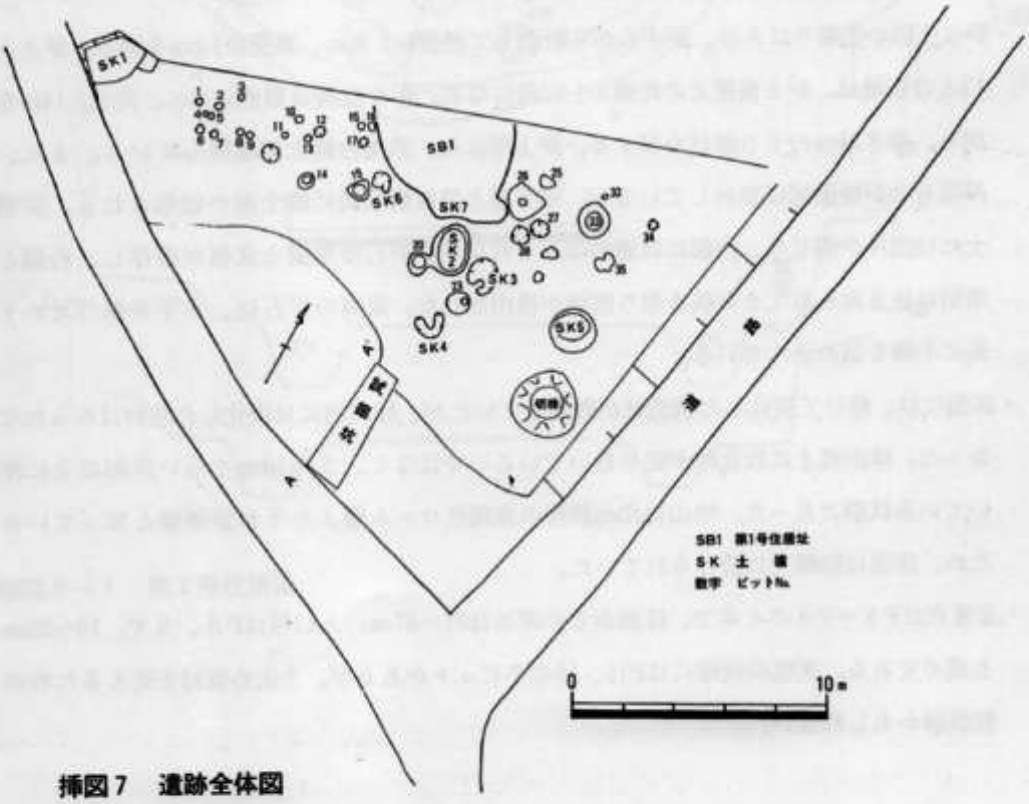
「江名子糠塚遺跡」は行政区画が江名子町であり、道路をはさんで隣接する片野町側の遺跡は「片野糠塚遺跡」として岐阜県遺跡台帳に記載されている。（挿図5）昭和57年に発掘調査した地点は、300m程西側にあって、そこからは二個体の列孔浅鉢が出土し、国の重要文化財に指定された。糠塚の地名、研究史は糠塚遺跡発掘調査報告書[註1]・第1章に記しているので参照されたい。扇状地は江名子町、片野町にまたがり、扇頂部にあたる部分は、山林となっていた。最頂部にあたる部分は底辺28m、高さ18mの三角形をなす区域が雑木林として取り残されていた。この部分が開発区域に含まれることになったため、調査することになった。昭和57年に発掘調査した際、楕円文、山形文、立野式の押型文土器や撚糸文、条痕文土器が出土していることと、扇頂部に近いことなどから調査の重要性を強く認識していたのである。

挿図5に糠塚遺跡全体の範囲を示しているが、ほ場整備により大部分が滅失した。現在遺存する遺跡の範囲は挿図6に示した畑地のみである。一帯からは縄文時代中期土器細片が散布している。

挿図7の遺構全体図はピット群のみ完掘し、土壙と第1号住居址のプランを検出した段階のもので、SB1とSK7の覆土が同一となる。SK3やSK4は、黒色土部分のみを掘ると、このような馬蹄形になり、当初、樹木の倒壊跡と予想されたが、断ち割りをしてみると土壙であることが判明した。また、試掘坑の断面図と説明は第1章（3頁）に記した。



挿図6　遺存する横塚遺跡の範囲



挿図7　遺跡全体図

第２節　第１号住居址（挿図８～13）

今回の調査で発見された唯一の住居址である。時期は縄文時代中期後葉である。調査範囲が228㎡と狭いにもかかわらず住居址にあたったということは、挿図６で示した遺跡範囲の遺存状況が極めて良く、縄文時代中期後半と推定される集落の南端を発掘したと推定される。

本住居址は、緩やかな畑地が終わり傾斜の強い山間部がはじまる境から、北西へ８ｍの位置にある。

(1) 特徴（挿図８－１・２，９）

・黄褐色ローム層を深く掘り込んだ住居址で、東辺が一直線をなし、埋甕のある入口部が尖り、五角形状をなす形態となる。

・住居址の規模は長軸（東西）4.85m、短軸（南北）4.45mを測る。

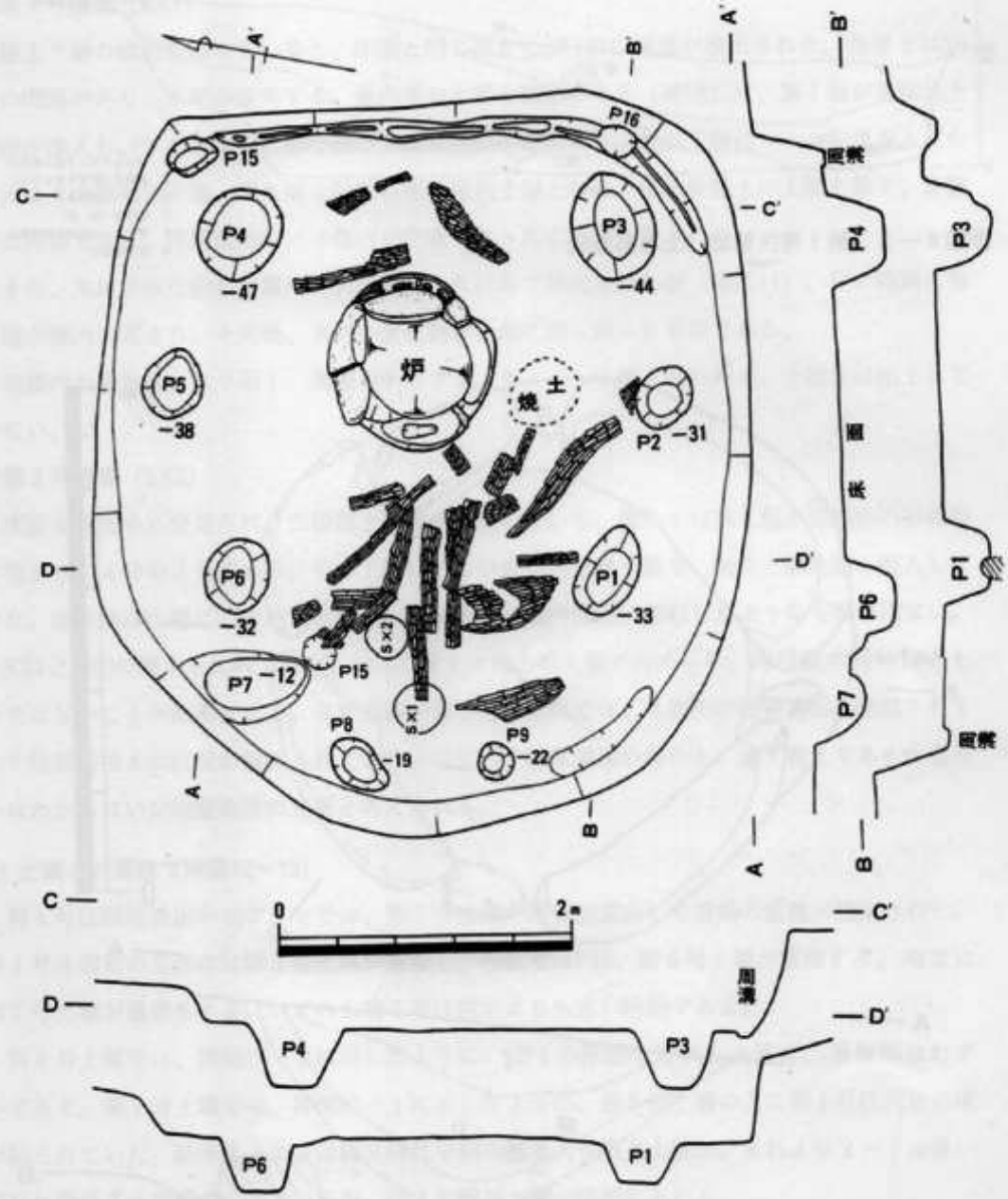
・周壁は検出面から計測して東側で59㎝、南側で71㎝、西側で42㎝、北側で27㎝を測る。地形が北方へ傾斜しているため南壁と北壁で44㎝の差がある。掘り込みが深く、雑木林であったために攪乱は案外受けていない。

・周溝は東壁で顕著にみられ、幅10㎝前後、深さ10㎝を測る。また西南に周溝の痕跡がわずかにみられたが、他の部分には検出されなかった。

・炉は住居の奥寄りにあり、炉中心から計測して西壁に2.95m、東壁に1.5mを測る。炉と入口との距離は、炉と奥壁との距離の1.97倍になる。炉の規模は東西1.16m、南北1.14mを測り、深さ31㎝のすり鉢状を呈する。炉上部には、赤褐色焼土が堆積している。また、挿図９の炉断面図に表わしているが、第Ⅱ層と第Ⅲ層の間に焼土面が観察される。炉埋土には炭片が混じり、内部には遺物はみられない。炉石は東側と北側が遺存し、西側と南側は抜き取られてその抜き取り痕跡が検出された。東側の炉石は、水平を保つため下部に小礫を詰め込んでいる。

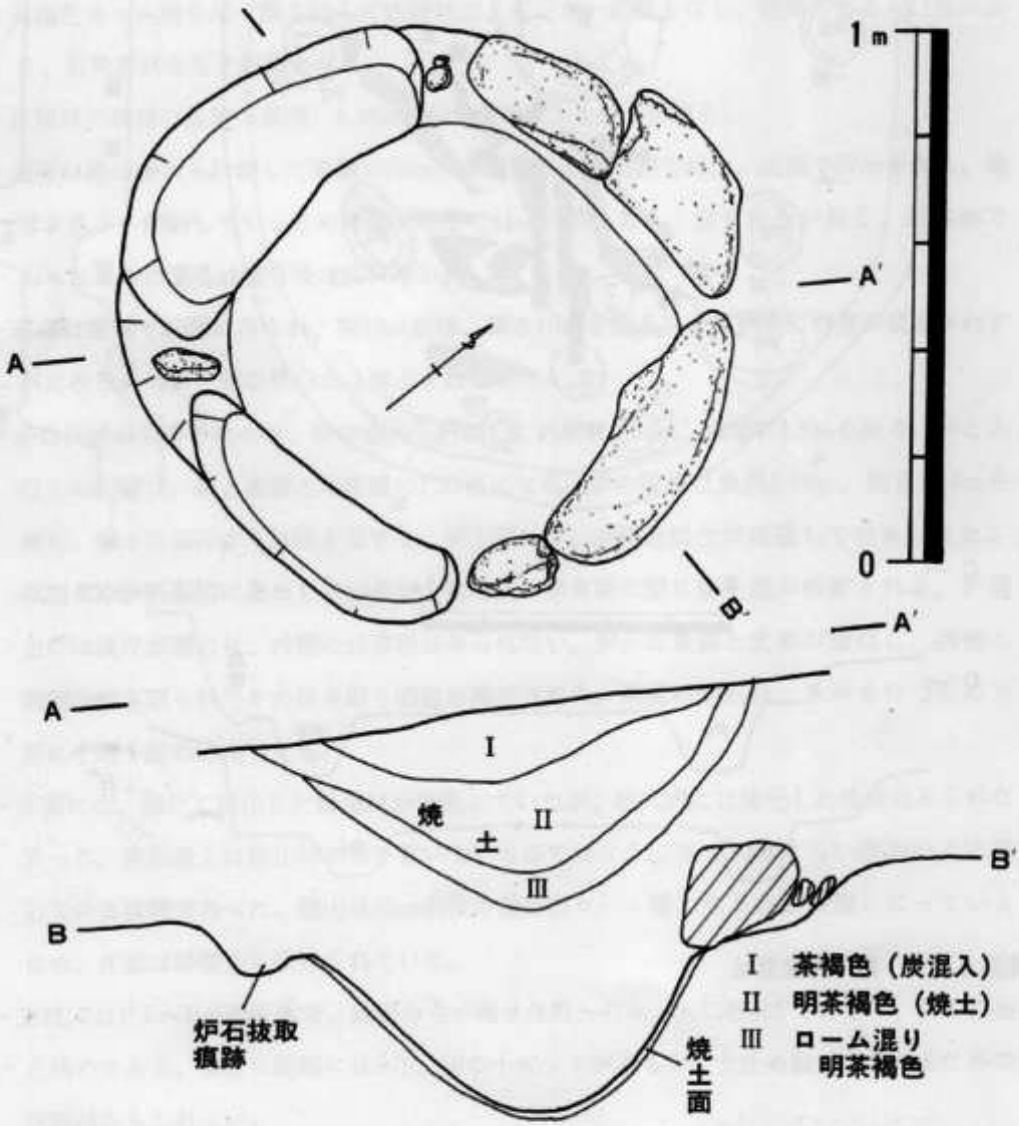
・床面には、焼けて炭化した構造材が散乱していたが、柱穴内には炭化した柱材はみられなかった。床面直上に炭化材が貼り着いているのではなく、５～10㎝ぐらい床面の上に浮いている状態であった。地山は40㎝前後の黄褐色ローム層より下が砂礫層となっているため、床面は砂礫上に設けられていた。

・主柱穴はＰ１～Ｐ６の６本で、床面からの深さは31～47㎝。入口柱はＰ８、９で、19～22㎝と浅めである。東壁の両端にはP15、16の小ピットがあるが、土止め板材を支えるための柱痕跡かもしれない。


A'
B'
P16
P15
C—
P4
-47
P3
-44
炉
焼土
P5
-38
P2
-31
D—
P6
-32
P1
-33
SX2
P7
-12
P15
SX1
P8
-19
P9
-22
A—
B—
C'
D'
0
2m
周溝
P4
P3
P6
P1
屋外
床面
P4
P3
P6
P7
P1
屋外

挿図8－1　第1号住居址

挿図8－2　第1号住居址　土層断面図



挿図9　第1号住居址　炉

(2) 埋甕（挿図10～11）

①第１号埋甕（SX1）

覆土下層の検出を進めていると、床面と同じ高さにSX1の口縁部が検出された。西壁とは70㎝の間隔があり、下部を欠失する。甕内部の土層を観察すると（挿図10）、第Ⅰ層が黒褐色土で炭が混入し、フカフカの状態で甕の上部４分の１を占める。その下層はローム粒が混入したフカフカの黒褐色土層、第Ⅲ層は粘質の明灰褐色土層となる。住居址覆土の土層と第Ⅰ、Ⅱ層とは同種であり、住居使用時には甕内が空虚であったことが予想される。

また、木材の炭化物が埋甕内に折れ曲がった状態で検出されたが（挿図11）、早い時期に第Ⅰ層が甕内に埋まり、その後、木材の炭化物が上部に乗っかったものである。

埋甕内の遺物は、スリ石１、黒曜石チップ１、チャート小礫６個のみで、土器片は出土していない。

②第２号埋甕（SX2）

床面を精査中に発見され、口縁部と下部を欠失している。甕の中は第Ⅰ層が黄褐色の砂礫層で埋まり、４分の３を占める。その下層は明るい黒褐色粘質土層で、炭片と赤色物が混入していた。赤色物は土層にバラバラと混入した状況で、甕内器面に塗彩したようなものではない。

SX1とSX2の埋土を比較すると、SX2の埋土は地山の土層で占められ、両埋甕が同時期のものではないことが推察される。寺東遺跡・第２号住居址[註２]では、４箇所の埋甕施設が発見されていて住居建替えの状況が確認されており、当江名子糠塚遺跡の場合も、建て替えであるかどうかはわからないが埋甕施設の更新と考えられる。

(3) 土壙との重複（挿図12～13）

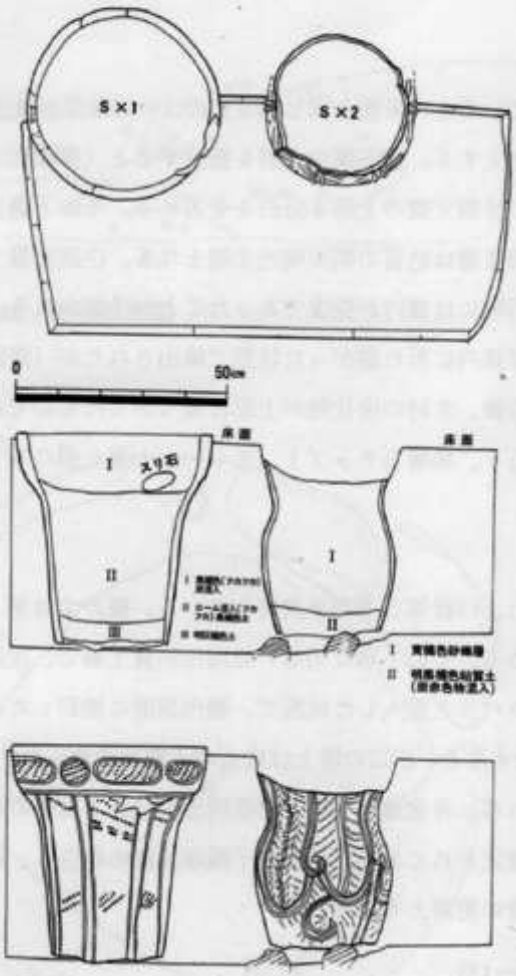
第１号住居址検出中のプランでは、第７号土壙の部分が突出して遺構の重複が想定された。第１号住居址の北側には第８号土壙が重複し、西側ではP12、第６号土壙が重複する。南では第７号土壙が重複をする。いずれも第１号住居址よりも古い時期である。

第６号土壙では、挿図13－２に示したように、SB１の床面の方が５㎝低く、重複部はわずかである。第７号土壙では、挿図13－１に示したように、第７号土壙の上に第１号住居址の床が貼られていた。貼床直下からは縄文時代早期の繊維入り縄文土器が、それより２～３㎝低い部分に野島式土器が出土しているが、出土位置は土壙の底部にあたる。

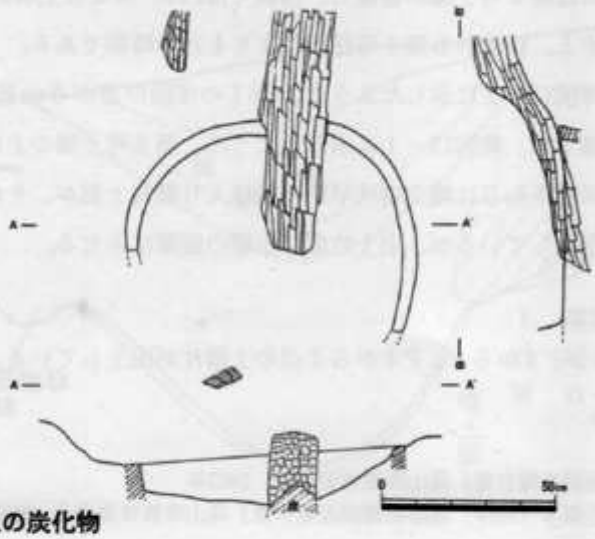
(4) 柱穴内の遺物

Ｐ１から土器細片１、Ｐ３から４、Ｐ４から２点の土器片が出土している。時期はいずれも中期後葉である。

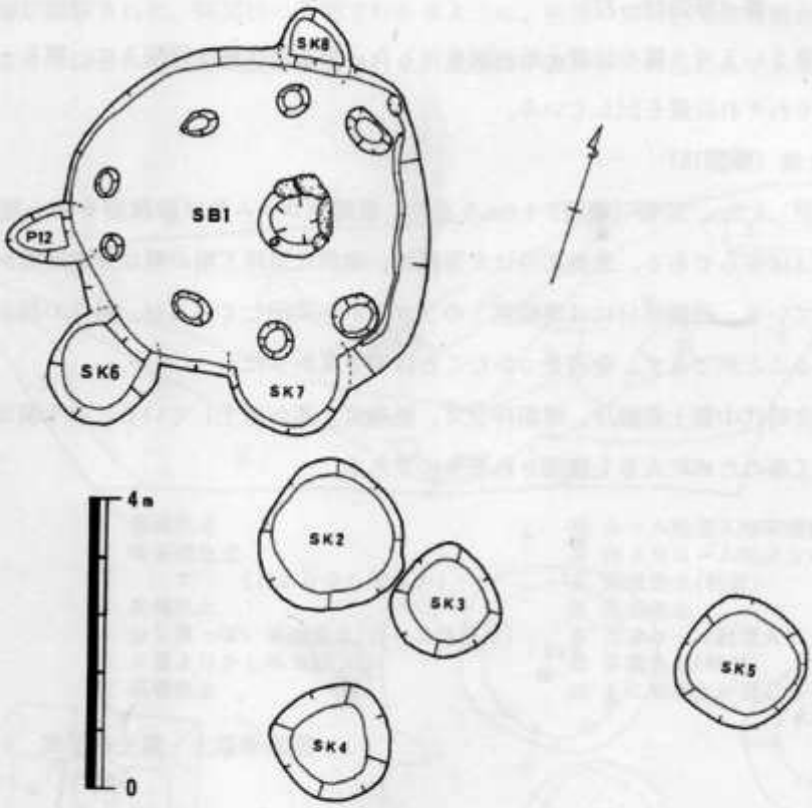
（註１）『糠塚遺跡発掘調査報告書』高山市教育委員会　1982年
（註２）『寺東遺跡、西保木（対岸）遺跡発掘調査報告書』高山市教育委員会　1988年



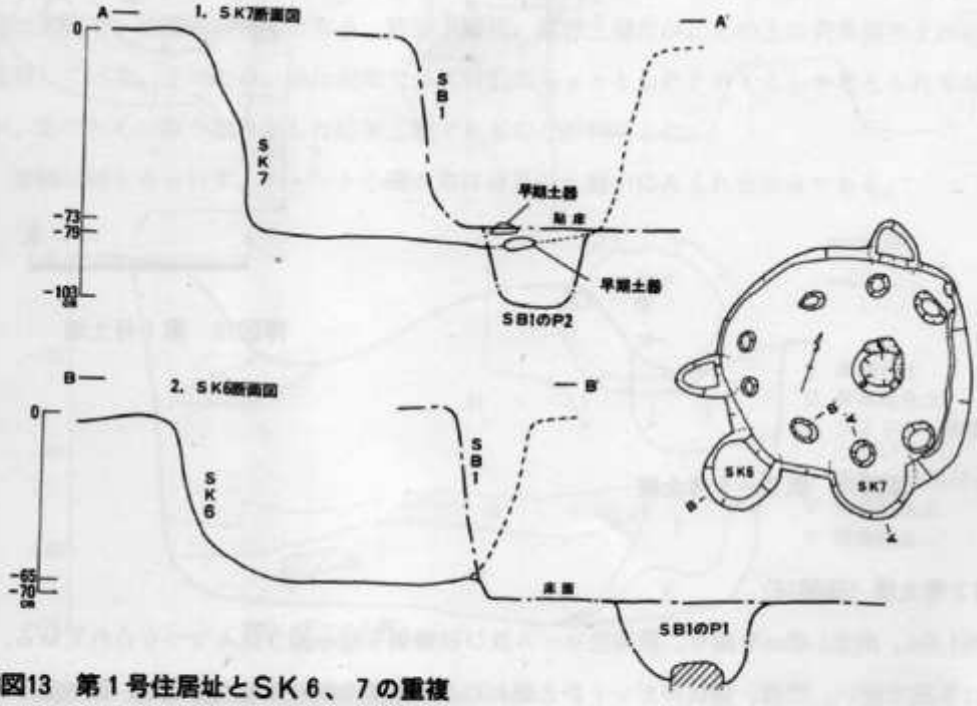
挿図10　第1，2号埋甕施設



挿図11　埋甕施設上の炭化物



挿図12　第１号住居址と土壙の重複



挿図13　第１号住居址とＳＫ６、７の重複

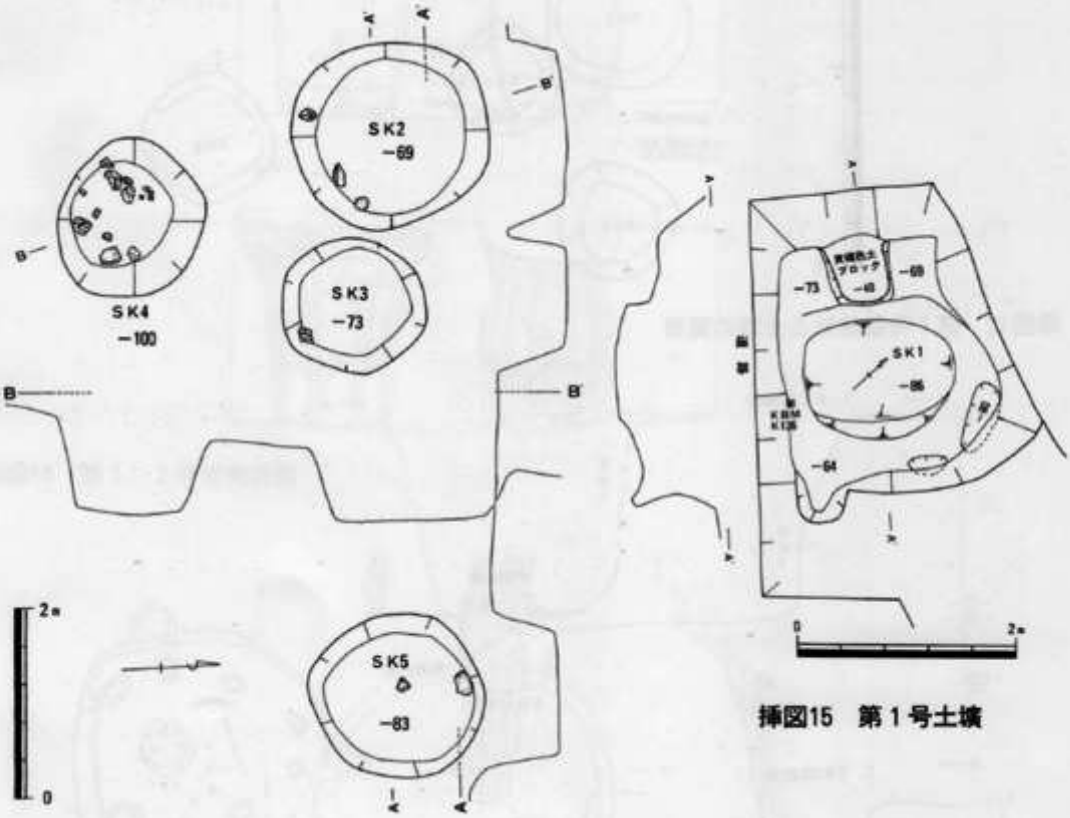
第3節　土　　壙（挿図12～22）

挿図14に第2～5号土壙の位置と断面図を示した。第1号土壙は挿図7に、第6～8号土壙は挿図12にそれぞれ位置を記している。

(1) 第1号土壙（挿図15）

長軸（南北）2.5m、短軸（東西）1.8mを測り、黄褐色ローム及び砂礫層を85cm掘り込んでいる。底はほぼ平らである。北側部分は未発掘で、南側は道路工事の際に大きく溝が掘られて攪乱を受けている。西側部分には黄褐色土のブロックが突出しているが、耕作の都合で調査範囲を拡大することができず、全容をつかむことはできなかった。

遺物は縄文時代中期土器細片、早期押型文、撚糸文土器が出土している。本土壙は、早期の土壙が道路工事のために大きく攪乱されたものである。



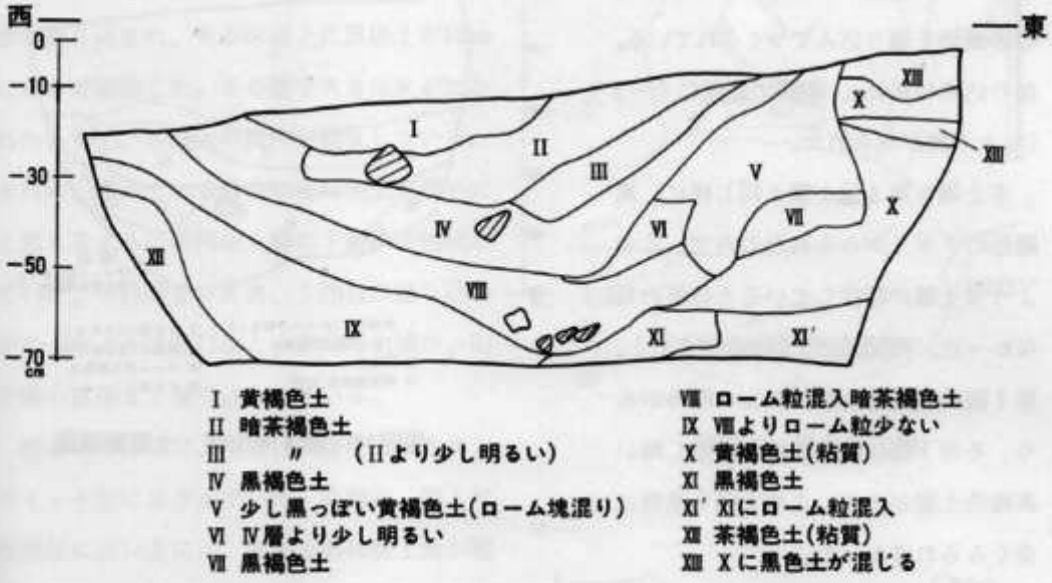
挿図15　第1号土壙

挿図14　第2～5号土壙

(2) 第2号土壙（挿図16）

東西1.8m、南北1.65mを測り、黄褐色ローム及び砂礫層を69cm掘り込んでつくられている。底面は平底で硬い。当初、袋状のピットかと思われたが、断ち割りをしたところ、掘り直した

ような土層が観察された。挿図16の断面でわかるように、粘質の黄褐色土第X層が2回目の掘り込みによって切られている状況が推察された。遺物は小礫がみられたのみである。

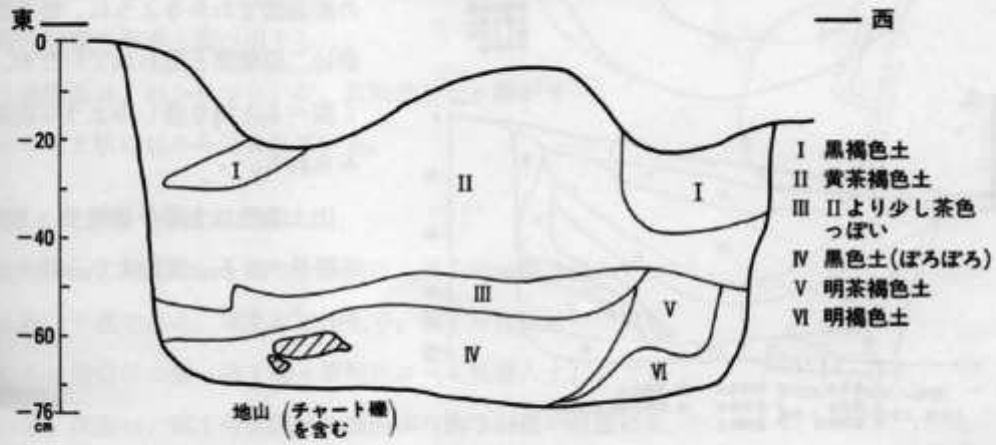


挿図16　第2号土壙　土層断面図

(3) 第3号土壙（挿図14、17）

東西1.42m、南北1.5mを測り、黄褐色ローム層及び砂礫層を73cm掘り込んでつくられている。底は平底で、砂礫層が底面となる。底面上層は、黒色土層だが、その上に黄茶褐色土が40cmも堆積している。そのため、検出段階では馬蹄形のちょっとしたクボミとしか考えられなかったが、念のために断ち割りをした結果土壙であることが判明した。

遺物は何もみられず、チャート小礫が第IV層黒色土層中にみられたのみである。

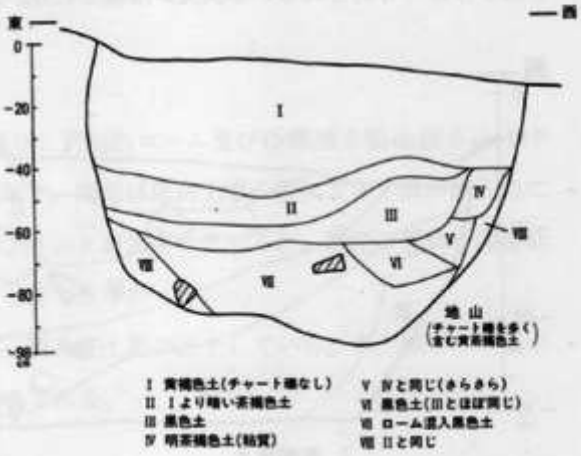


挿図17　第3号土壙　土層断面図

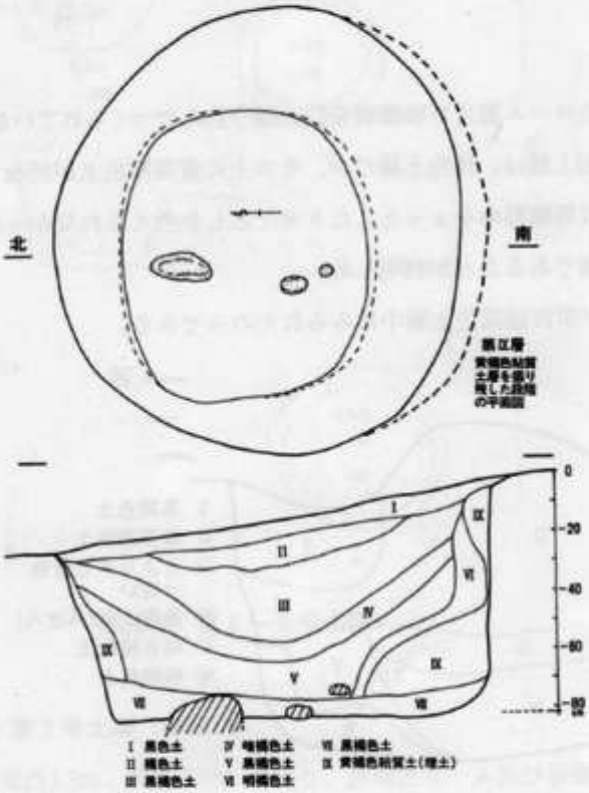
(4) 第４号土壙（挿図14、18）

東西1.65m、南北1.54mを測り、黄褐色ローム層及びチャート礫を多く含む砂礫層を掘り込んでつくられている。掘り込みは100cm、平底で底面に５～25cm大の礫がみられた。

本土壙も第３号土壙と同じ様に、馬蹄形のクボミがみられたのみで、このような土壙が存在しているとは思われなかった。挿図18の土層断面でみると、第Ｉ層の黄褐色土層は44cmの厚みがあり、その下層には第Ｉ層より少し暗い茶褐色土層がある。この土壙も遺物は全くみられなかった。



挿図18　第４号土壙　土層断面図



挿図19　第５号土壙

(5) 第５号土壙（挿図14、19）

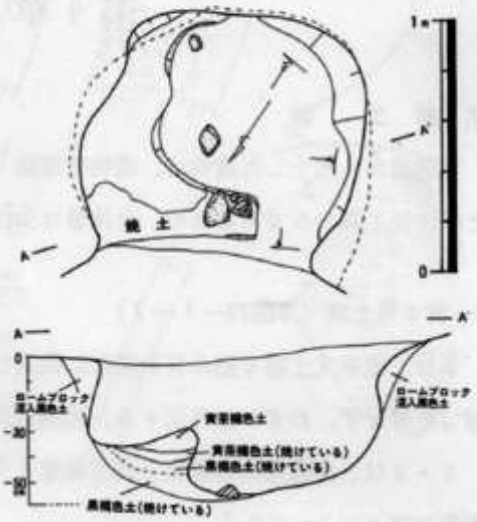
東西1.55m、南北1.50mを測り、黄褐色土及び砂礫層を83cm掘り込んでつくられる。底面は平担で28cm大の礫とスリ石が検出された。挿図19の断面図でわかるように、断ち割り前は二段構築と思われていたが、良く調べると掘り直しのような痕跡がみられる。

出土遺物は土器が皆無で、上層から特殊スリ石、床面上からはスリ石が出土した。

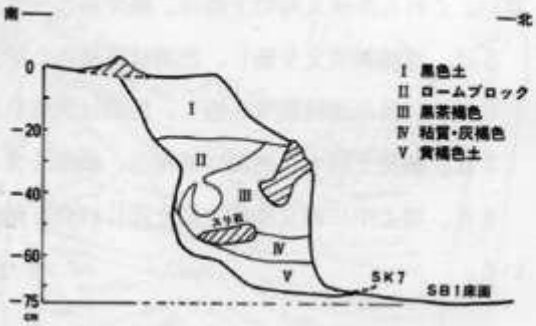
(6) 第6号土壙（挿図12、13、20）

東西1.08m、南北1m（遺存部分）を測り、黄褐色土層を46cm掘り込んでいる。当初、大きく掘り込まれ、その床面上に黒色土が12cmの厚みで堆積した。その面で大きな火がたかれたようで、6cm大の炭片が散乱している。さらに、燃えている最中に黄褐色土を埋めたと思えるように黄褐色土層の下層が赤色化していた。一旦埋まった後、2回目の掘り込みがあったようで径72cmと小さめの土壙が、旧土壙の底部まで掘り込まれている。

底はスリ鉢状で、土層は黄褐色土層をサンドイッチ状にはさんでいた。北側の、第1号住居址に近い方には、床面上層に焼土面が観察された。焼土面の下部・黒色土中に撚糸文土器が出土している。



挿図20　第6号土壙

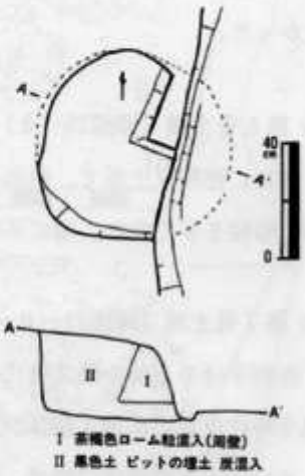


挿図21　第7号土壙　断面図

(7) 第7号土壙（挿図12、13、21）

東西1.45m（遺存する一部）、南北1.3m（遺存する一部）を測り、第1号住居址と重複をしている。底面は平らであった。本土壙廃棄後、第1号住居址がつくられたもので、本土壙北側部には貼り床がもうけられている。この貼り床直下に縄文時代早期の厚手土器が出土した。

土層断面は、わかりづらいが、黄褐色ローム層がサンドイッチ状にはさみ込まれている。



挿図22　第8号土壙

(8) 第8号土壙（挿図12、22）

東西67cm、南北68cmを測り、黄褐色土層を30cm掘り込んでつくられ、平底である。埋土は黒色土で、第1号住居址の壁構築のために周壁状の層（第I層・茶褐色ローム粒混入土）ができている。床面は、第1号住居址の床面より約3cm低い位置にある。遺物は、縄文時代早期の土器が下層から出土している。

第4章 遺　物

第1節 土　器

本遺跡から出土した遺物は、遺物整理箱（31×44×12cm）約30箱分である。遺構は土壙8基と住居址1基のみであるため、全体量は少ない。

(1) 第1号土壙（挿図23―1～7）

1は、撚糸文土器で撚糸Rを縦位に施文し、口唇上端にも撚糸Rを施文した痕跡がある。口縁は肥厚せず、わずかに外反する。色調は茶褐色で焼成は良く、厚さ8.6mm、石英粒を多く含む。

2・3は、条痕文系の無文土器で繊維を多く含む。色調は、2が茶褐色で厚さ12mm、3は赤褐色で厚さ10.5mmである。

4は、条痕文系土器の底部で無文部。繊維を少し含み、色調は茶褐色、厚さは7mmで焼成は良い。これら条痕文系の土器は、鵜ガ島台～茅山上層式期の間に位置づけられよう。

5は、連続刺突文を施し、色調は黒褐色、厚さ8mm。ネガティブな押型文にも似ている。

6は、三角の連続刺突を施し、色調は黒褐色、厚さ9mm。粗粒の砂を多く含む。

7は、無文土器で、色調は黒褐色、繊維を含み、厚さ11mmである。

また、埋土中に縄文時代中期土器片11点、後～晩期と思われる凹線文土器片1点が混入している。

(2) 第2～5号土壙

第2号土壙には判別不能の土器細片が2点のみである。第3～5号土壙には、土器はみられなかった。

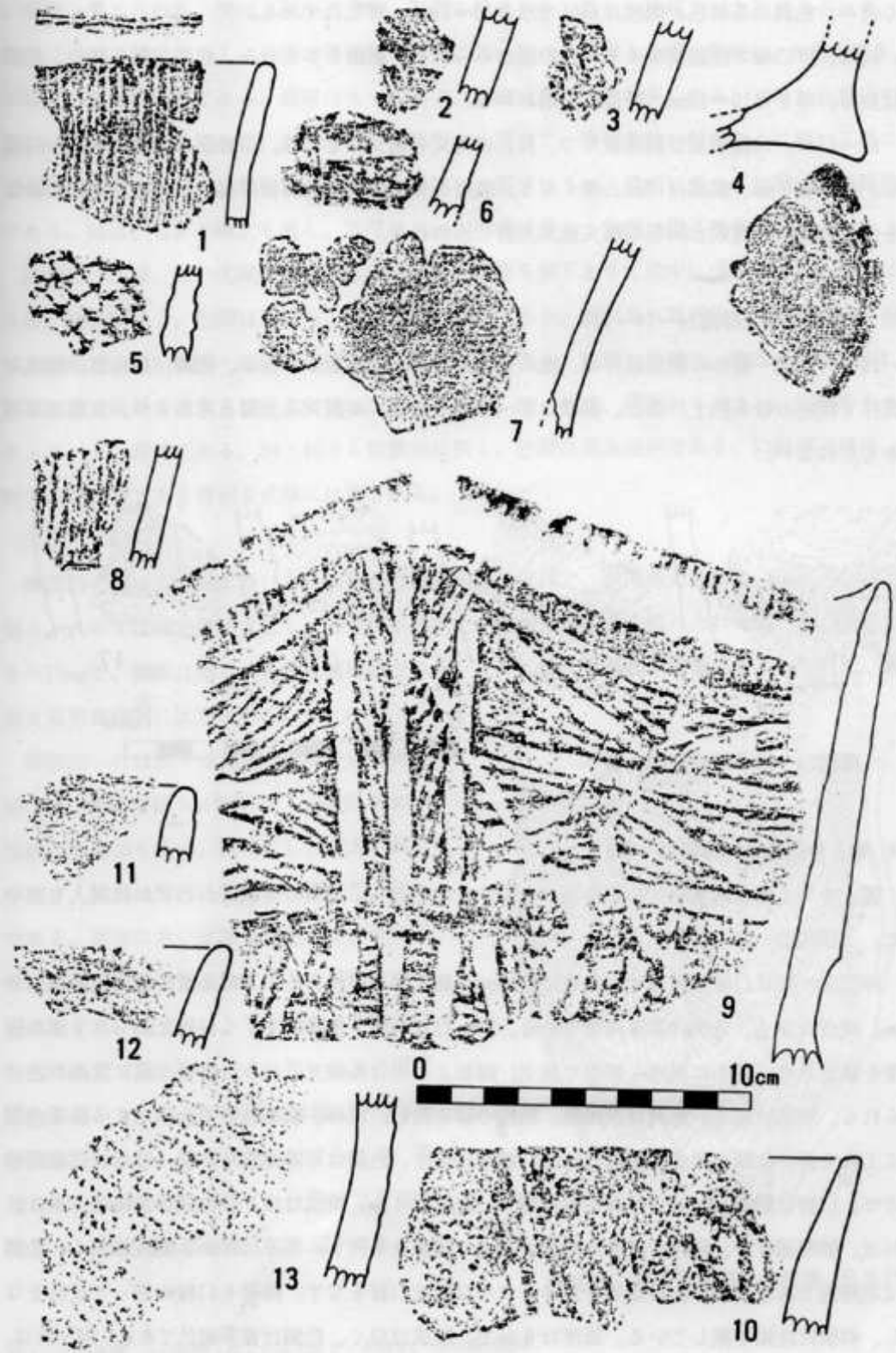
(3) 第6号土壙（挿図23―8）

8は、撚糸文土器で、撚糸Rを縦位に施文している。色調は茶褐色で、焼成は普通、厚さ8mm、砂粒を多く含む。他に不明土器細片が1点出土したのみで、出土土器は計2点である。

(4) 第7号土壙（挿図23―9～13）

西側半分の上部を縄文時代中期後葉の住居址に削られていたが、底の部分が貼床下に遺存し、縄文時代早期の土器4個体が出土した。

9は、大きな波状口縁で、頸部に弱い段をもつ。太い凹線状の沈線で幾何学文を描き、沈線間に細い棒状工具による沈線文と刺突文を施す。口縁内には削状の刻目がみられる。繊維を多



挿図23　第1～7号土壙の土器

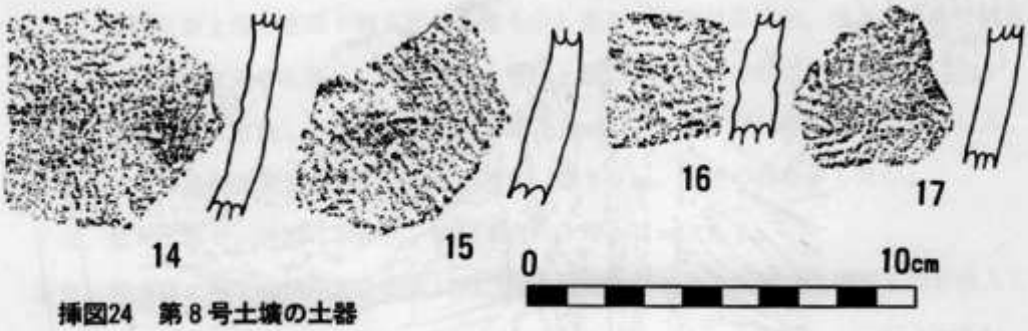
く含み、色調は茶褐色、焼成は良好で厚さ10～14㎜。野島式である。

10は、平口縁で沈線文のモチーフの端がみられる。繊維を多く含み、色調は黒茶褐色、焼成は良好、厚さは10～12㎜。野島式と思われる。

11～13は、口縁部及び胴部破片で、ＲＬの縄文を施文している。口縁部は焦げてススが付着し、口唇は７㎜、胴部は13㎜と厚くなる。繊維を多く含み、色調は茶褐色、焼成は良好で砂粒を少し含む。野島式と同期の縄文施文土器と思われる。

(5) 第８号土壙（挿図24―14～17）

14～17は同一個体の胴部破片で、撚糸を施文する。繊維を多く含み、色調は黄褐色、焼成は良好で粗粒の砂を胎土に含む。器厚は８～11㎜である。条痕文系土器と考えられ、丸底になるかもしれない。



挿図24　第８号土壙の土器

(6) 第１号住居址（挿図25～29）

覆土中の土器は縄文時代中期後葉の土器片を中心とし、早期の土器片がわずかに混入していた。（挿図29―42、43）

挿図26―19は口縁部破片で口縁部に幅13㎜の無文帯を設け、その下に条線を施す。器厚は８㎜、焼成は良く、色調は黄茶褐色である。20、21は台付土器脚部で、くびれた部分に２本の隆帯を横走させ、途中に渦巻を隆帯で施す。脚部より上は条線文となり、隆帯で縦に区画が設けられる。焼成は良く、色調は黄褐色、粗粒の砂を含む。22は、胴部破片で、横走する隆帯の間に工具で深い沈線を施す。器厚は12㎜、焼成は良く、色調は赤茶褐色である。23は、口縁部破片で、口唇は肥厚し、太い凹線を縦に施す。器厚は８㎜、焼成は良く、色調は黄褐色である。24は、胴部破片で、隆帯の区画内を櫛状工具で沈線文を施す。器厚は10㎜、焼成は良く、色調は黒褐色である。25は、口縁部で、ゆるやかな波状口縁をなす。隆帯も口縁に沿って波状をなし、斜状に沈線を施している。器厚は８㎜で、焼成は良く、色調は黄茶褐色である。26・27は、半截竹管で曲線を描き、器厚は９～12㎜、焼成は悪く、色調は黄褐色で、中期後半の中でも古

い時期と考えられる。28は、胴部破片で、凹線を横走させ、細かい沈線文が上部にみられる。器厚は11㎜、焼成は良く、色調は黄褐色である。29・30は、隆帯と沈線、刺突により渦を描き、29は、口縁部突起部である。器厚は8～10㎜で、焼成は良く砂粒を多く含み、30は、金雲母が多い。色調は黄褐色である。31～33は、口縁部の小突起で、隆帯を貼り付けた上に鋭い工具による刻目を施す。34は、条線により綾杉文を施し、器厚は9㎜、焼成は悪く、色調は黄茶褐色である。35は、LRの縄文を施し、器厚は9㎜、焼成は良く、色調は黒茶褐色である。

挿図27―36は、太い沈線で縦に綾杉文を描き、隆帯を垂下させて途中に渦を配する。器厚は8㎜、焼成は良く、色調は茶褐色、唐草文系の土器である。曽利Ⅱ～Ⅲ式期に比定される。37は、底部で、太い隆線・沈線文を描く。器厚は11㎜と厚く、色調は茶褐色、焼成は良い。38は、胴部破片で隆帯を横走させ縦、斜状に沈線文を施す。39・40は、床面から出土し、突起をもつキャリパーの深鉢である。39・40ともに焼成は良く、色調は黒茶褐色である。口縁部文様帯、把手の発達期である曽利Ⅱ式期に比定される。

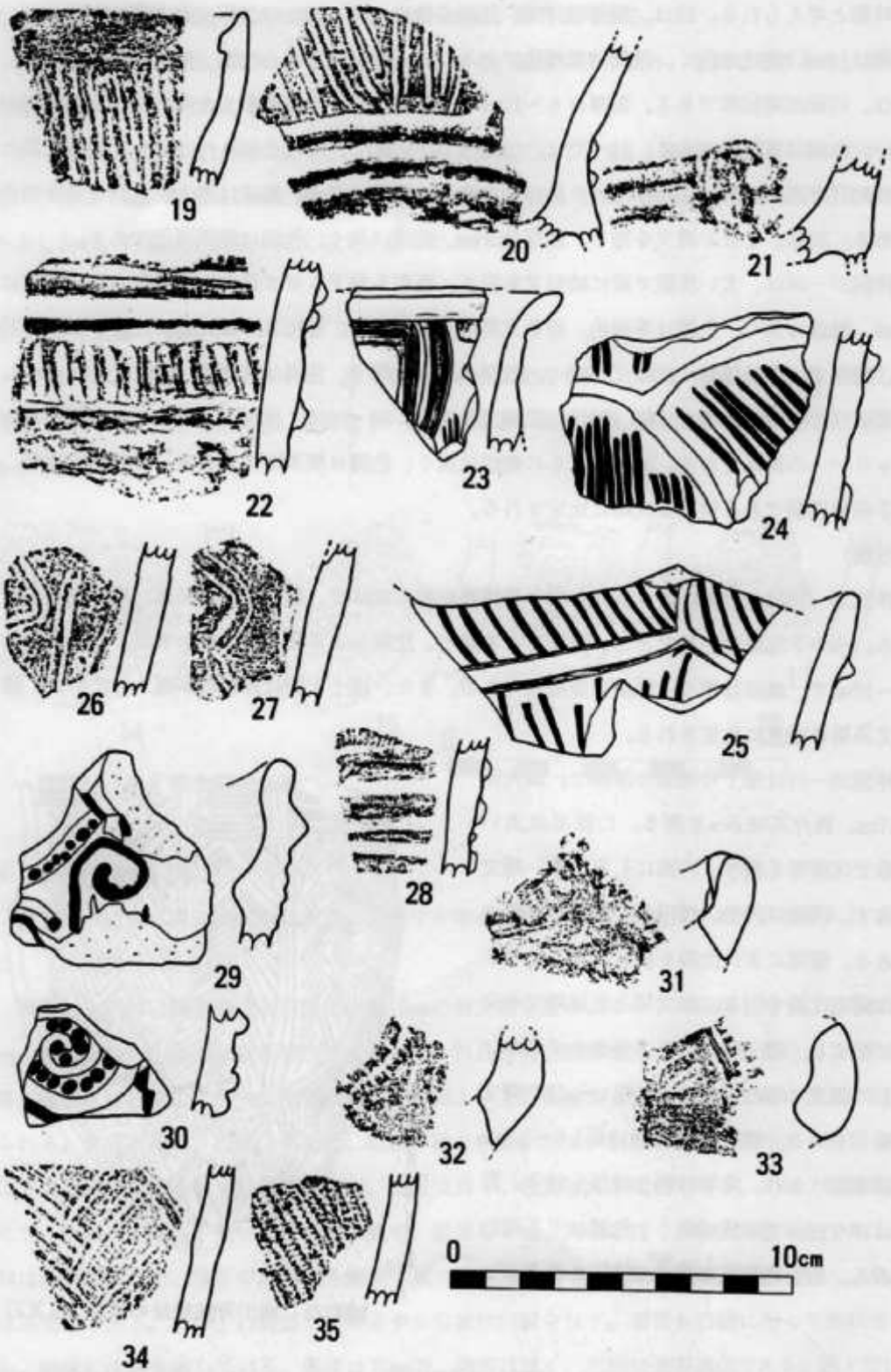
（埋甕）

挿図25―18は入口部に設けられた第2号埋甕施設の深鉢で、胴部最大径35㎝、既存高42㎝を測る。八の字沈線文を地文とし、隆帯による渦と、沈線による渦を組み合わせている。器厚は9～10㎜で、焼成は悪く、色調は黄褐色である。また、埋土下層に赤色物が混入していた。唐草文系第Ⅲ様式[註1]に比定される。

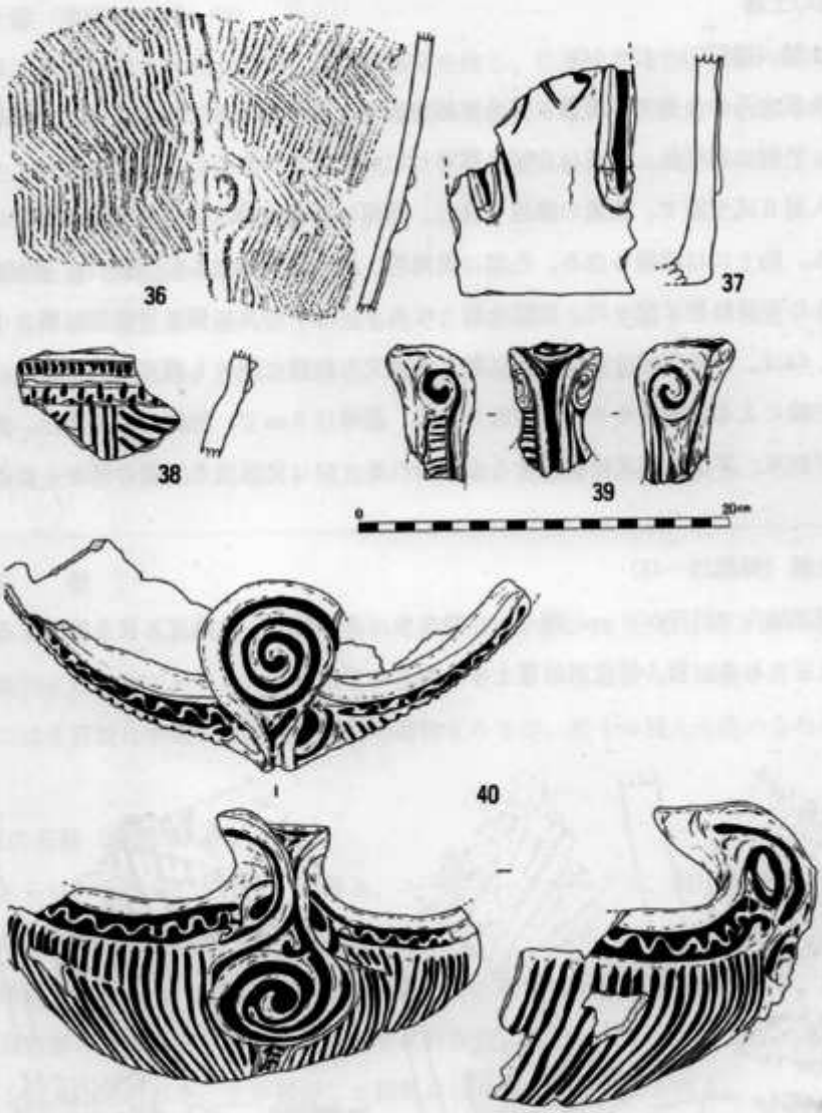
挿図28―41は第1号埋甕の深鉢で、最大径49.7㎝、既存高46.5㎝を測る。口縁部に太い沈線で区画帯を設け、内部にLRの太い縄文を施す。区画は円形、楕円形、眼鏡型と様々である。頸部に太い沈線を横走させ、その下部は縦の沈線を引き、無文帯と充填縄文を交互に配する。縄文地は、下半分をまず細かいRLの縄文で埋め、その上に粗いLRの縄文を施している。無文帯の区画は幅1.5～3.5㎝で10本設けられ、均等に割り付けられる。器厚は10～12㎜で焼成は悪く、色調は黒茶褐色である。加曽利E第Ⅲ様式[註2]に比定される。

挿図25　第1号住居址の埋甕（SX2）

註1　小林達雄、小川忠博『縄文土器大観3・中期Ⅱ』小学館1988年
註2　前掲註1同『縄文土器大観2・中期Ⅰ』



挿図26　第１号住居址の土器　1



挿図27　第１号住居址の土器　2

挿図28　第１号住居の埋甕（ＳＸ１）

(7) その他の土器

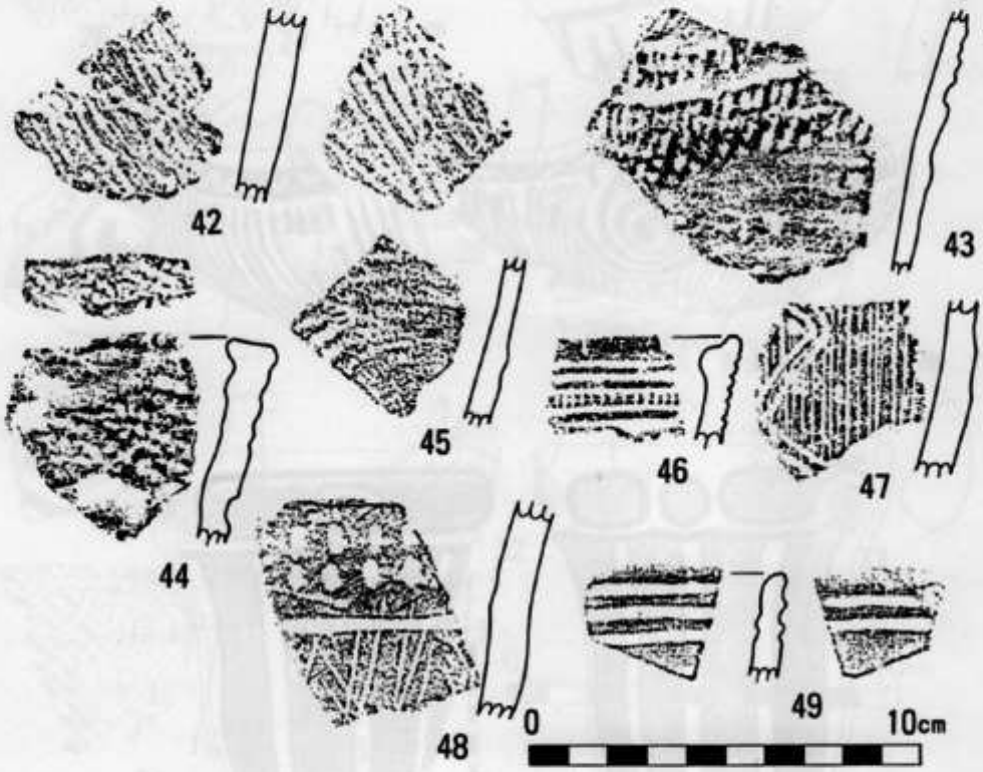
①早期の土器（挿図29―42～44）

42は、条痕文系の土器で、表裏に集合沈線を施す。胴部の破片である。多くの繊維と粗粒の砂を含み、色調は黄褐色、焼成は良好、器厚は11㎜と厚手である。

43は、入海Ⅱ式土器で、微量の繊維を含む。器厚は６㎜と薄く、低く幅広の隆帯に箆状の刻目を配する。胎土には繊維を含み、色調は黄褐色、焼成は良好である。器形は、波状口縁に沿って三条以上の刻目隆帯に配され、尖底土器となろう。42・43共に第１号住居址覆土中に混入していた。　44は、口縁部破片で、表面に縄文を施文し口唇上面にも縄文を施文する。口縁の下は、太い凹線による曲線状モチーフが施される。器厚は８㎜で、色調は暗茶褐色、焼成は良好である。早期末、茅山上層式に併行すると思われる。44は発掘地点西側の畑から表面採取された。

②前期の土器（挿図29―45）

45は、胴部破片で器厚が６㎜と薄く、０段３条（３本撚り）の縄文ＬＲを施文する。北白川下層式に比定される。第１号住居址覆土中に混入していた。



挿図29　その他の土器

③中期の土器（挿図29—46～48）

46～48は、表面採取された土器で、46は沈線文を施し、色調は黄褐色、口縁内部に段をもつ。中期後半の中でも古い時期と考えられる。47は縦の条線に２本の平行沈線で曲線を描く。色調は黄茶褐色で焼成は悪い。48は太い沈線で上下に区画を施し、上部に異形の棒状工具で連線刺突を施す。下部は綾杉状に細い沈線を施す。

④後～晩期の土器（挿図29—49）

49は第１号土壙の攪乱層に混入していたもので、口縁部に太い凹線を３本横走させる。裏面にも２本の凹線を横走させ、色調は黄褐色、器厚は８㎜、焼成は良い。

⑤歴史時代

発掘調査地点の西に隣接する畑に、須恵器片が５点、表面採取された。

第２節　石　　器

本遺跡から出土した石器類は、削片も含めて総数342点であり、分類は第１表において提示した。数量的には散発であるため、住居址、土壙、ピットの各遺構毎に解説を行った。

時代的には住居址に中期、土壙群に早期の遺物をみるが、若干の混入も認められる。

(1) 住居址の石器（挿図30）

住居址からは、石鏃６、石錐１、削器３、ユーズド・フレーク２、剥片７、磨石２、凹石１、削片70点が出土している。

石鏃（挿図30、１～６）は凹基鏃５、柳葉鏃１で、石質は下呂石３、黒曜石２、頁岩１である。１の頁岩製の長身長脚の石鏃は早期後半に特徴的にみられるタイプであり、土壙との切り合いによる混入と思われる。５の破損した脚部にはリタッチが認められる。

石錐は、棒状の両端に機能部があり、特に一端に磨痕が観察される。下呂石製。

削器は３点あり、８は砂岩製の粗製のもの、９・10はそれぞれチャート製・下呂石製の両面加工スクレイパーである。

ユーズド・フレークは２点で、ともに黒曜石を素材としている。（11・12）

磨石は流紋岩円礫を利用したものが２点あり、両者とも破損して約５分の１が残る。

凹石は埋甕の上部より出土し、半円形の砂岩自然礫の一面にわずかな敲打の凹みがある（15）。

剥片は７点でいずれも下呂石。13は埋甕下部より出土した。削片は下呂石が47点、黒曜石が23点である。

その他、凝灰岩の円礫（14. 卵大）と碁石大が各１点みられる。

住居址内の石器は、石鏃や削器類の割に石斧類が欠除しており、必要な道具を持ち去った住

第1表　江名子籔塚遺跡出土石器集計表

分類		出土区	SB1下層	SB1中層	SB1上層	SB1 SX1	SK1下層	SK1中層	SK1上層	SK5	SK6	SK7	P群P12	P19	P21	P22	P24	P群P27	P36	一括	表採	SB1西張表採	表採	計
狩猟具	石鏃	三角A						1																1
		凹基B	5					1													8	1		15
		有柄C																						
		柳葉D	1																					1
		その他・未製品等																						
	尖頭石器																							
農具・工具	石錐	棒状錐A		1																				1
		つまみ付錐B																						
	磨製石斧	小型6cm以下																						
		大型6cm以上																						
		乳棒状																						
		ノミ型																						
		不明・未製品																						
	打製石斧																			1				1
	石包丁																							
	砥石																							
	台石																						1	1
	石錘	打製A																						
		磨製B																						
	棒状礫														1									1
	掻器							1																1
	削器		3											1				1		1	1			7
	つまみ形石器																							
	粗製削器								1													1		2
	ピエス・エスキーユ																				1			1
	u・f		2										1											3
	剥片（フレーク）		5		1	1		3	4												7			21
調理具	石匙																							
	粗製石匙																							
	磨石			2				1	2	1		2							1				1	10
	凹石					1					1											1		2
	敲石																							
	石皿																						1	1
他	削片（チップ）		36	25	9		3	5	5		1									4	174	6		268
	石核							1													2			3
宗教的道具（呪術的）	石棒																							
	石剣																							
	石刀																							
	石冠																							
	玉類																							
その他					丸石1		焼石1		円礫1	特殊スリ石1	焼石1											円礫1		

居址廃棄の結果とも考えられる。

なお、石材的にはチャートが少なく、代わって黒曜石がかなりのウエイトを占めている点が特徴的といえよう。

(2) 土壙の石器（挿図31～32）

8基の土壙はいずれも早期に属すると考えられるが、石器の出土している土壙は第1・5・6・7号土壙である。

第1号土壙では、石鏃2、掻器1、磨石3、粗製削器1、剥片7、削片13、石核1及び円礫・焼石各1が検出された。

石鏃（16・17）は凹基鏃と三角鏃で、いずれも下呂石製、掻器（18）は下呂石製の円刃掻器である。粗製削器は玄武岩製で、信州系の素材である。磨石のうち1点は花崗岩製で半欠品であるが、巾1㎝程の浅い溝が巡り底面はよく使いこまれていて滑らかとなっている（25）。剥片7点はいずれも下呂石製で（20、21、22）、石核も下呂石の大形の剥片を素材とした剥片石核である（23）。削片は下呂石6、チャート4、黒曜石3である。

第5号土壙では、3面を使用した石鍬形のスリ石が1点出土している（26）。流紋岩製で火熱を受けた痕跡がある。また円礫の長軸の一端のみ使用した特殊スリ石も1点みられ（27）、やはり流紋岩製である。

第6号土壙は、凹石と削片が各1点ある。凹石（28）は凝灰岩質の軟質な石材を用い、表裏面に1ケ所ずつと1側面に2ケ所の敲打の凹みを有する。削片は下呂石で風化が進んでいる。

第7号土壙では流紋岩製磨石2点がみられ、1点（30）はほぼ三角形の自然礫の下端部に特殊スリ石的な使用痕が観察される。もう1点（31）は楕円形の礫で、全体的に滑らかとなっている。

(3) ピット群の石器（挿図33）

31ケ所のピット群のうち、石器の出土しているピットはP12、P19、P22、P27、P36の5ケ所である。

P12では下呂石製の大形剥片の一部に使用の痕跡がみられるもの1点（32）、P19では下呂石製削器が1点あり（33）、直角に近い刃部が2縁にみられる。

P22は流紋岩製棒状礫1点（34）、P27は下呂石製削器1点（35）、P36は安山岩製の円形磨石半欠品が1点出土している（36）。

(4) 表面採集の石器（挿図34）

表面採集された石器は、石鏃９、打製石斧１、削器２、粗製削器１、ピエス・エスキーユ１、磨石１、凹石１、石皿１、台石１、剥片７、削片184、石核２、その他円礫１である。

石鏃（38～46）は、いずれも凹基鏃に属し、早期の鍬形鏃が１点、肩にくびれをもつものが１点みられる。石材は黒曜石５、下呂石３、チャート１である。

削器はいずれも黒曜石製で、49は剥片を利用した薄手のもの、47は周辺を完全調整した小形のラウンド・スクレイパーである。

粗製削器（48）は砂岩の剥片の長軸の２縁に使用の痕跡を見る。ピエス・エスキーユ（51）は上下端から加撃が加えられている。下呂石製。

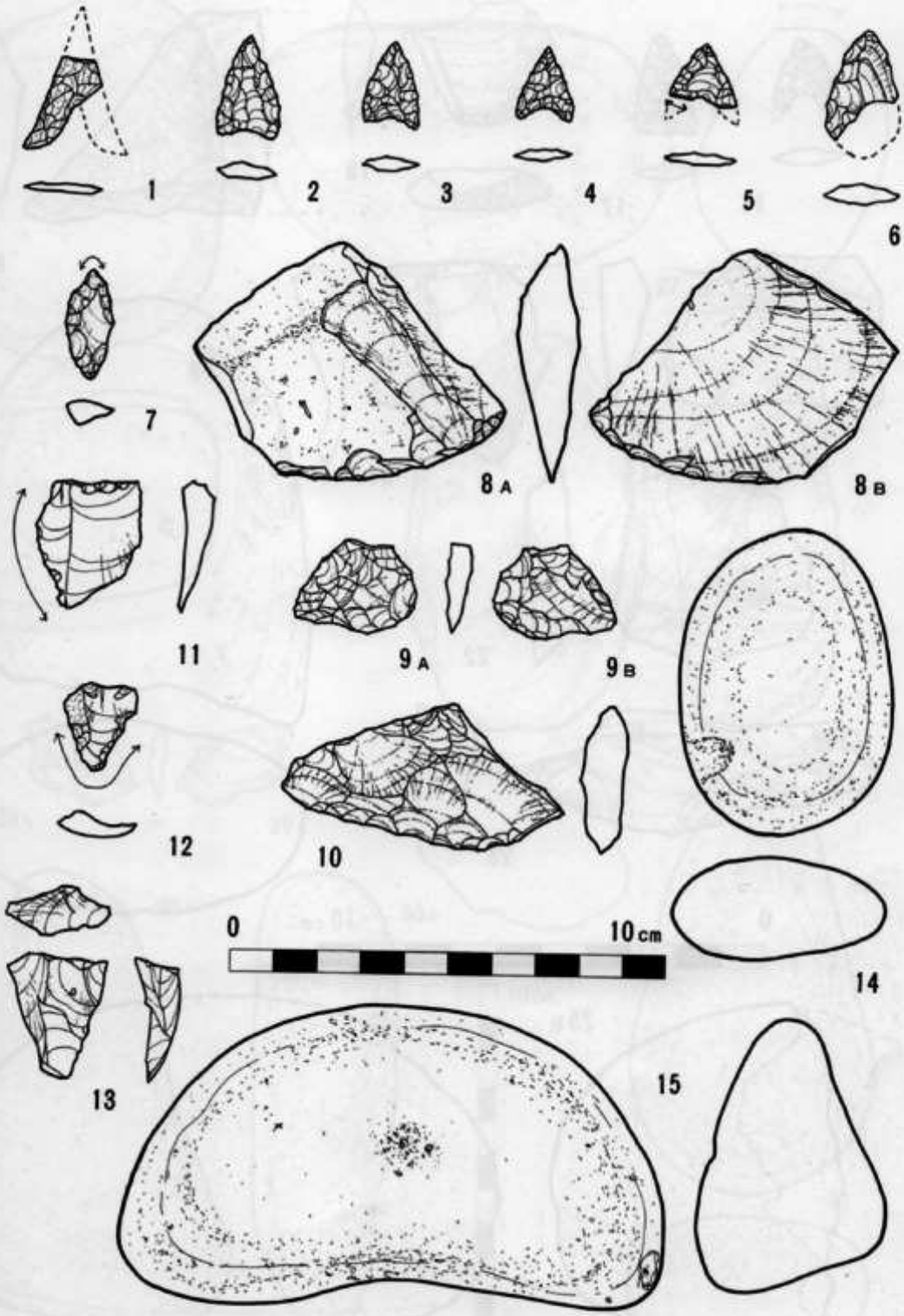
磨石は流紋岩製の石鹸形、凹石（52）も流紋岩製で一面にわずかな敲打の凹みがある。

打製石斧（53）は上半部のみの粗雑な作りで安山岩製、石皿（37）は砂岩製の３分の２破片で、一面全体がよく使用されており、縁はない。火熱を受けた様でひび割れが入っている。

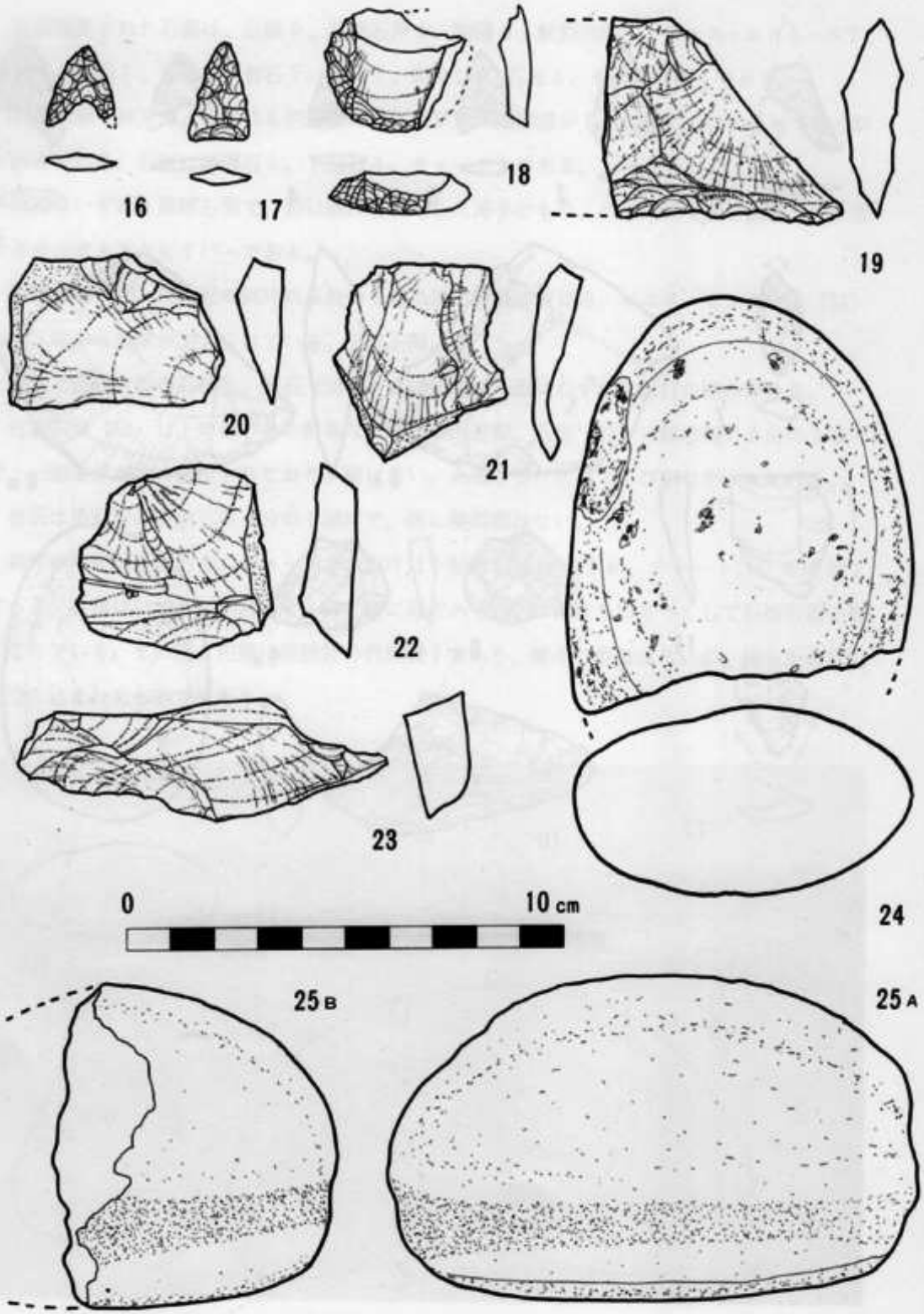
台石は流紋岩の自然石の４分の１破片で、特に使用痕はない。

剥片の内訳は下呂石５、チャート２、削片は下呂石131、黒曜石40、チャート11、その他２である。石核はいずれも下呂石で、50の様に周辺から完全に剥片を取りつくして石核石器の様になっている。その他、円礫は流紋岩の自然礫１であり、使用の痕跡はないが、何らかの目的で持ち込まれたものであろう。

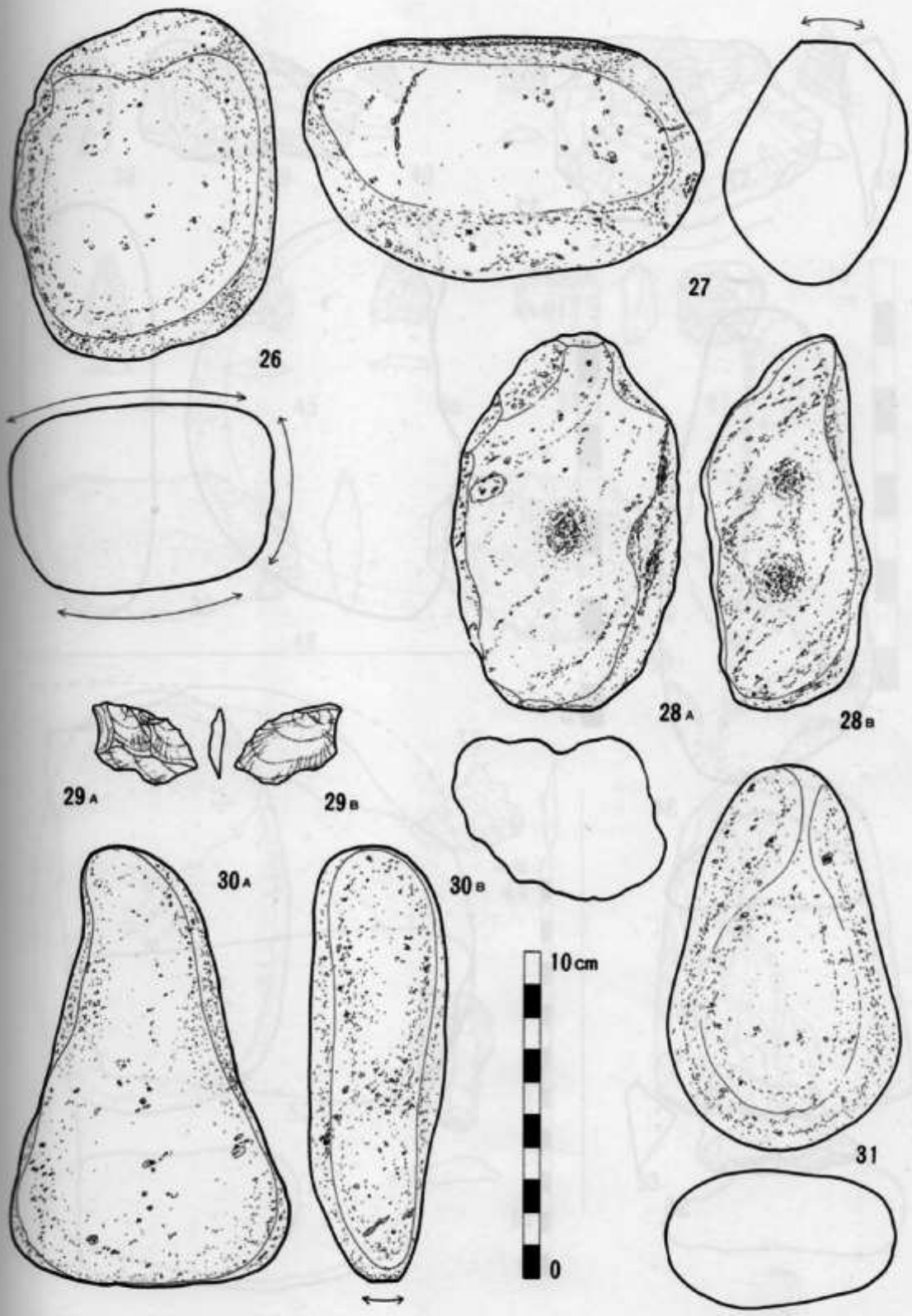
ＰＬ３　江名子藤塚遺跡全景



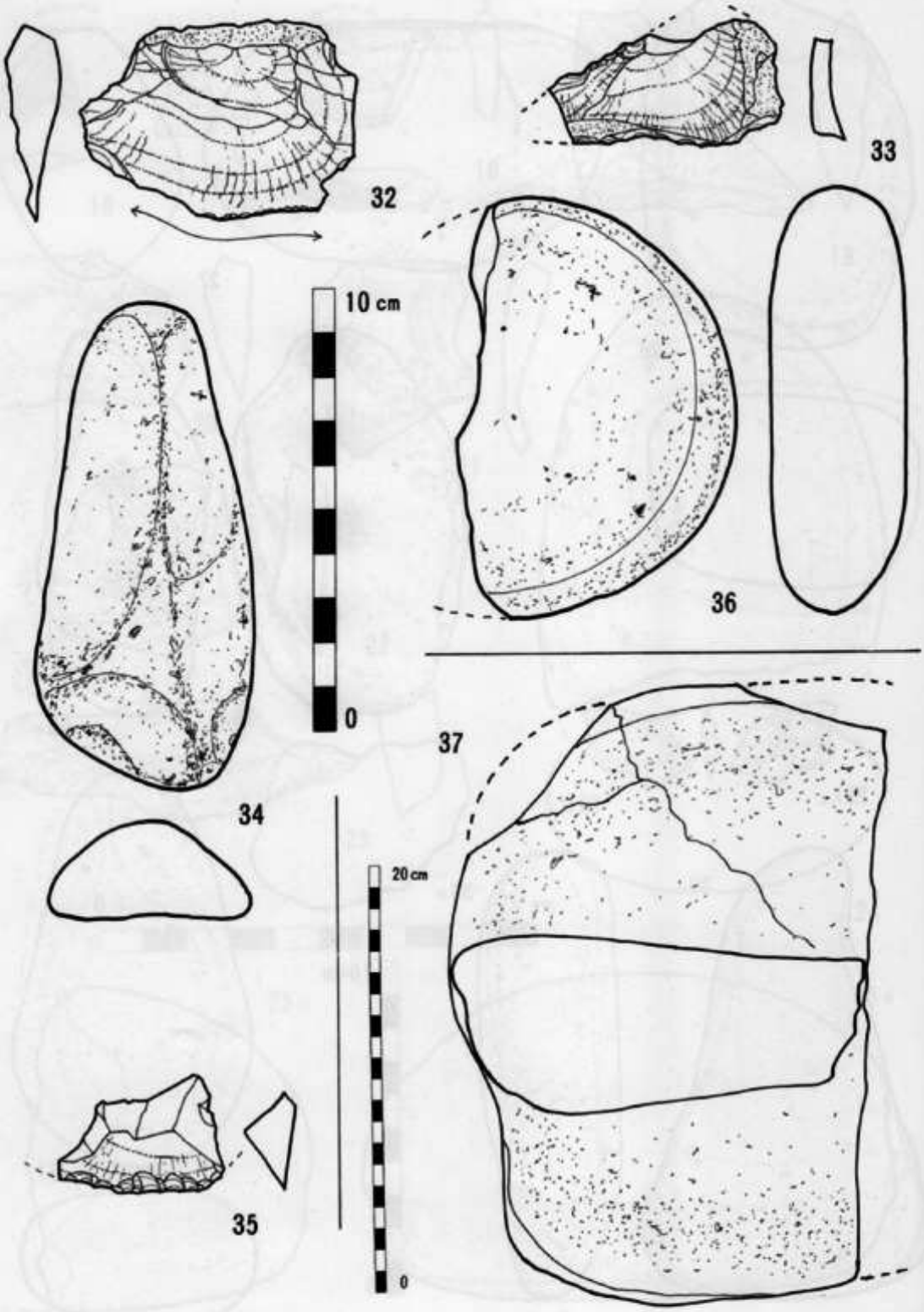
挿図30　住居址の石器



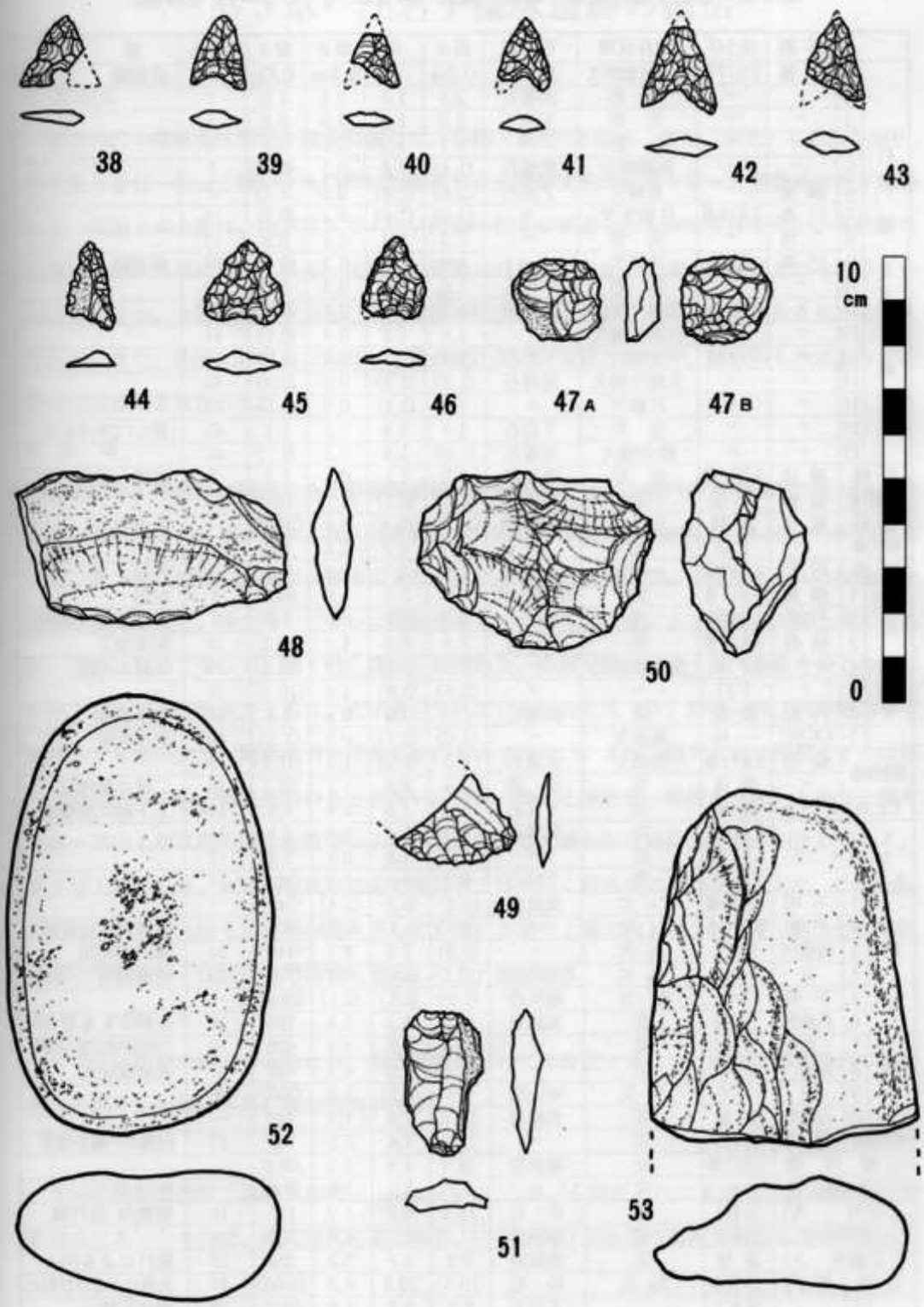
挿図31　土壌の石器



挿図32　土壙の遺物



挿図33　ピット群の石器



挿図34　表面採取された石器

第2表　江名子糠塚遺跡・石器一覧表（単位cm，g　カッコ内 現存値）

		形態	出土区	遺存状態	石質	長さ	巾	厚さ	重さ	挿図No.	備考
打製石鏃	1	凹基	SB1下層	先端片脚部欠	頁岩	(1.2)cm	—	0.2cm	(0.6)g	1	長脚鏃
	2	〃	〃	完形	黒曜石	2.3	1.5	0.4	1.0	2	
	3	〃	〃	完形	下呂石	2.0	1.3	0.3	0.6	3	
	4	〃	〃	完形	〃	1.7	1.3	0.2	0.4	4	
	5	〃	〃	両脚部欠	黒曜石	(1.4)	1.6	0.2	(0.4)	5	
	6	柳葉	〃	基部欠	下呂石	(2.6)	(1.8)	0.5	(1.3)	6	
	7	凹基	SK1中層	片脚先欠	〃	(1.8)	(1.6)	0.4	(0.7)	16	
	8	三角	〃	完形	〃	2.2	1.4	0.4	0.9	17	
	9	凹基	表採	片脚欠	チャート	1.6	(1.7)	0.2	(0.4)	38	鍬型鏃
	10	〃	〃	完形	下呂石	1.6	1.2	0.3	0.5	39	
	11	〃	〃	先端片脚欠	黒曜石	(1.2)	(1.4)	0.3	(0.3)	40	
	12	〃	〃	片脚先端欠	〃	1.6	1.2	0.4	(0.5)	41	
	13	〃	〃	先端欠	下呂石	(1.9)	1.7	0.4	(0.8)	42	
	14	〃	〃	先端片脚欠	黒曜石	(1.9)	(1.3)	0.5	(0.9)	43	
	15	〃	〃	片脚欠	〃	1.9	(1.1)	0.3	(0.5)	44	
	16	〃	〃	完形	下呂石	1.9	1.9	0.5	1.1	45	肩にくびれをもつ
	17	〃	〃	脚先端欠	黒曜石	(1.8)	1.5	0.3	(0.7)	46	
石錐		棒状	SB1中層	完形	下呂石	2.5	1.1	0.5	1.2	7	両端に錐部
打製石斧		短冊	一括	刃部欠	凝灰岩	(8.0)	(6.1)	(2.7)	(180)	53	
台石		板状	表採	¾が欠	流紋岩	(17.7)	(15.8)	6.4	(2900)	—	使用痕なし
棒状礫			P22	完	〃	11.0	4.9	2.4	150	34	
掻器		円形	SK1中層	一部欠	下呂石	2.6	2.7	0.8	7.7	18	円刃
削器	1	横長	SB1下層	完	凝灰質砂岩	5.4	7.2	1.6	54.0	8	粗製
	2	円形	SB1炉内	完	チャート	2.8	2.1	0.6	3.9	9	両面加工　円刃
	3	横長	SB1下層	完	下呂石	3.4	6.5	1.3	19.2	10	両面加工
	4	〃	P19	先端基部欠	〃	(2.9)	(5.2)	0.9	(13.5)	33	二縁に刃部
	5	〃	P27	〃	〃	(2.6)	(3.8)	1.6	(10.1)	35	
	6	円形	表採	完	黒曜石	1.9	2.0	0.9	3.4	47	完全調整
	7	(不明)	一括	基部欠	〃	(2.0)	(2.7)	0.3	(1.2)	49	剥片利用
粗製削器		横型	SK1上層	基部欠	玄武岩	4.5	(5.5)	1.5	37.7	19	
		〃	表採	完	砂岩	3.3	5.8	1.1	25.1	48	二縁に使用痕
ピエス・エスキーユ			表採	完	下呂石	3.3	1.8	0.9	4.7	51	上下端に加撃痕
u・f			SB1炉内	完	黒曜石	3.0	2.4	0.6	3.1	11	
			SB1下層	完	〃	2.0	1.8	0.5	1.4	12	
			P12	完	下呂石	6.2	4.5	1.3	28.8	32	
磨石	1	不明	SB1中層	⅘欠	流紋岩	(9.9)	(8.3)	(2.8)	(242)	—	
	2	不明	SB1中層	⅘欠	〃	(6.5)	(4.7)	(4.0)	(105)	—	火熱による変色
	3	長楕円	SK1	⅓欠	〃	(9.0)	7.9	4.5	(410)	24	楕円礫利用
	4	丸	〃	½欠	花崗閃緑岩	(12.0)	(6.4)	7.4	(775)	25	円礫利用
	5	不明	〃	⅘欠	凝灰岩	(7.0)	(2.1)	(3.1)	(50.0)	—	
	6	石鹸形	SK5	完	流紋岩	11.2	8.3	5.8	785	26	火熱による変色
	7	三角形	SK7	完	〃	13.4	8.6	4.3	620	30	三角形礫の底辺端のみ使用
	8	長楕円	SK7	完	〃	11.8	7.0	4.2	445	31	表裏面使用
	9	円	P36	½欠	安山岩	9.5	(6.2)	3.0	(250)	36	
	10	石鹸形	表採	完	流紋岩	11.5	7.4	4.4	540	—	
特殊磨石		楕円	SK5	完	〃	12.2	7.6	5.5	753	27	円礫の一端を使用
円石	楕円礫		SB1上層	完	凝灰岩	16.9	4.8	2.3	99.0	—	
	円板状		〃	完	〃	2.7	2.7	1.6	5.0	—	
凹石	半円	A1	SB1	完	砂岩	12.5	6.2	4.9	510	15	埋甕内 敲打痕
	不整楕円	A1B1C2	SK6	完	凝灰岩	11.7	6.7	4.8	300	28	
	石鹸形	A1	表採	完	流紋岩	9.9	6.1	3.2	253	52	敲打による凹み
石皿		楕円	SK6	⅓欠	砂岩	(19.5)	29.2	8.2	(6980)	37	火熱によるひび割れ
石核	1		SK1		下呂石	8.5	2.6	1.8	32.7	23	剥片石核
	2		表採		〃	5.1	3.8	2.9	51.1	50	
	3		〃		〃	2.5	2.9	1.7	9.3	—	

第５章　江名子糠塚遺跡の総括

(1) 住居址

縄文時代中期後葉住居址１基を発掘した。長軸（東西）4.85m、短軸（南北）4.45mを測り、掘り込みは42～59cmと深い。入口部に加曽利E式、唐草文系の深鉢を使った埋甕施設が２箇所ある。床面上の土器は、唐草文系でも古い時期の把手が発達したものが主体をなし、本住居の時期は曽利Ⅱ式期に比定される。住居址の形態は五角形をなし、６本の主柱穴と２本の小さい入口柱をもつ。土器全般でみると、垣内遺跡[註1]の住居址群よりわずかに古段階にあるものと考えられる。また、床面上にはおびただしい量の炭化部材が確認されたが、細めのものばかりで部位の特定はできなかった。

(2) 土　壙

昭和57年、本遺跡に隣接する片野糠塚遺跡の発掘調査[註2]では、土壙内から楕円押型文（高山寺）土器、条痕文系の早期土器が、B区包含層から立野式押型文土器が出土している。今回の調査では、縄文時代早期の土壙が８基確認された。埋土の状況は特殊で、黄褐色ロームの堆積が上層から厚く存在し、検出時のプランは馬蹄形を呈している。崖錐による堆積の影響と考えられる。遺物は極めて少なく、第１号土壙からは撚糸文、条痕文系の無文土器（繊維を多く含む）が出土した。この撚糸文土器は、近年着目されている稲荷台式（新）段階以降、東海地方を本拠地とする撚糸文で、関東地方の撚糸文そのものではない。また、無文土器は押型文または田戸上層並行くらいの無文土器かもしれない。他に、無文土器底部（繊維を含む）もあり、鵜ガ島台～茅山上層式期の間に位置づけられよう。第５号土壙からは特殊スリ石が出土している。第７号土壙からは、太い凹線状の沈線で幾何学文様を描く野島式の土器が出土した。そのほか、第１号住居址に入海Ⅱ式土器が混入をしていた。８基の土壙の内、第２、５号土壙はその規模、床面の平担さから住居址の可能性もある。

(3) ピット群

ピットは総数31箇所みられたが、掘立建物址としては確認できない。遺物は縄文時代中期後葉の土器片が少量、下呂石製削器等が出土した。

今回の発掘調査は、遺跡残存範囲10,000㎡の内、228㎡を調査したにすぎない。扇頂部の重要地点にあったもので、縄文時代早期土壙群、中期後葉住居址群の東端を発掘したのである。

註1　高山市教育委員会『垣内遺跡発掘調査報告書』 1991年
註2　高山市教育委員会『糠塚遺跡発掘調査報告書』 1982年

第6章　無手無冠農場遺跡の地形と地質

本遺跡は高山市の東部滝町字乗越に開発された農場に位置している。海抜高度843mというこの付近では最も高い場所にある縄文時代住居址である。散在する滝川沿いの集落からの比高は約140mである。

滝川と根方谷の分流地点の橋から約100m下流の地点より北方の尾根に通ずる自動車道で急峻な山道を約1.3km登ると農場に達する。

滝町の南に接しているのが岩井町で、この地域は岩滝地区と呼称されており、岩滝小学校は滝川の支流生井川沿いの位置から、数年前に岩井町との境界近くの高台に移転新築された。

岩滝地区は東部の日影平山（1599m）から西に延びる分水嶺と大尾根を通り丹生川村境となっている山陵の間にある山間部である。地区を流れる滝川、根方谷、生井川、中曽洞谷、大八賀本流（岩井谷）がいづれも西流しており、これらの谷沿いに集落が点在している。

大八賀川本流は丹生川村を西流する小八賀川と同じく深い峡谷となっているが、他の支流の浸食は新しいため山陵は丘陵性の地形を呈している。

全体に海抜高度は東部から西へ低くなり、日本アルプスの隆起による西への傾動運動によるものと考えられる。

この地域の地質については、基盤岩は中・古生層のチャートや玄武岩溶岩及び凝灰岩、一部に石灰岩の小岩体より成っている。かつて古生層二畳紀の地層とされていたが、微化石の研究により中生代ジュラ紀の地層も確認され、現在は中・古生層と呼んでいる。

これらの基盤岩の上部を鮮新世末から更新世にかけての火砕流が覆っている。挿図35は基盤岩類の上部に不整合にのる二つの火砕流の分布を示した。（註1）

丹生川火砕流は現在の乗鞍火山の活動よりもはるか以前、約250万年前頃にその付近から大規模な火砕流が噴流し、高根村、朝日村、高山市、丹生川村に広く分布している。日影平山では厚さ約100m、滝町付近で40～60m、高山盆地内で約30mで、丹生川村山口や高山市江名子町では、この岩石のよく溶結した部分が採石されていた。

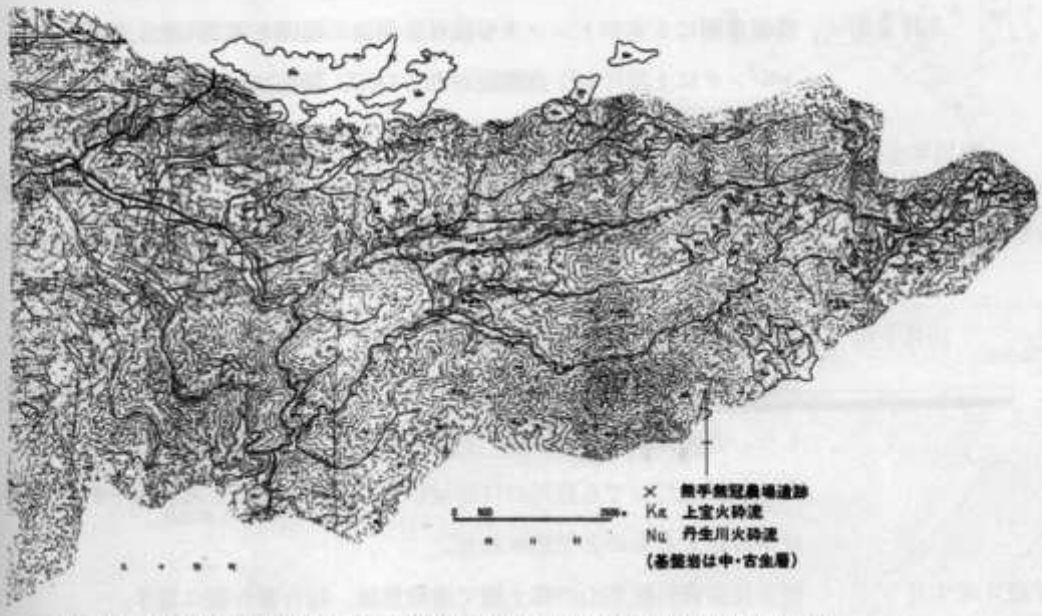
なお、日影平山から数河にかけては、約80万年前の火砕流の分布が見られる。この岩体は丹生川村から上宝村にかけて厚く広く分布しているので「上宝火砕流」と呼ばれている。生井川沿いの採石場に垂直の節理面がよく露出している。丹生川火砕流を覆っており、滝町付近で80～100mの厚さである。

挿図36は本遺跡付近の地質略図である。遺跡の北方約180m、高度差30mほどの地点に清水が湧いている。西、東方向にも同じような高度に湧水地があり、当時の人々が利用していたと

思われる。基盤岩と丹生川火砕流の不整合面の湧水である。

丹生川火砕流の上部は火山灰層が厚く堆積している。表土の黒色土の厚さは場所によって異なっている。火山灰層は、自形の角閃石や大山・倉吉パミス（D・K・P）特有の細い針棒状の角閃石が目立ち、少量の扁平なシソ輝石の結晶も含まれている。磁鉄鉱も多く、軽鉱物は溶融状の石英粒や軽石が多く、火山ガラスの量はやや少ない。降下性の火山灰堆積層である。

註1　山田直利外「高山地域の地質　地域地質研究報告　地質調査所　1981」
　　藤沢　彰　「高山市東方の第4系　岐阜大学教育学部卒業論文　1976」
　　石原哲彌　「高山市付近の第4系について　地質学論集 14　1977」



挿図35　高山市東部地域の火砕流分布図（註1の地質図をもとに修正も加えた）

挿図36　遺跡周辺の地層

第７章　発掘調査の経過

＜無手無冠農場遺跡＞

平成３年５月　市農林部、土地所有者の中屋栄一郎氏と調査計画の打合せをする。埋蔵文化財発掘調査の通知について、文化庁長官に書類を提出した。

６月下旬　事前に現況写真撮影、表面採取を行ない、土器片、石器類が農場内に多く散布していることが判明した。調査地区の山林刈り払い、樹木の伐採を行ない調査に着手。

７月上旬　農場東側に６本のトレンチを設け、遺跡の範囲を確認した。遺物は第４トレンチに土器片が１点発見されている。調査は一時休止し、９月から再開することとした。

９月上旬～10月上旬　農場の台地南端山林の刈り払いと樹木伐採を行ない、トレンチ６本を設けて遺跡の範囲を確認した。ピット３箇所を発掘し、縄文土器細片を検出した。

10月下旬　数年前に発見された炉跡（SB２）の周辺を検出中、深い掘り込みの住居址（SB３）を１基発見。他に３基の住居址掘り込み及び床面を確認した。表面採取できる土器・石器の量は相当多く、また、ところどころの土層調査だけでも数基の住居址にあたるということは、数十軒の住居址が存在するものと予想された。

平成４年１月　歴史民俗資料館高山市郷土館で遺物整理、報告書作製に着手。

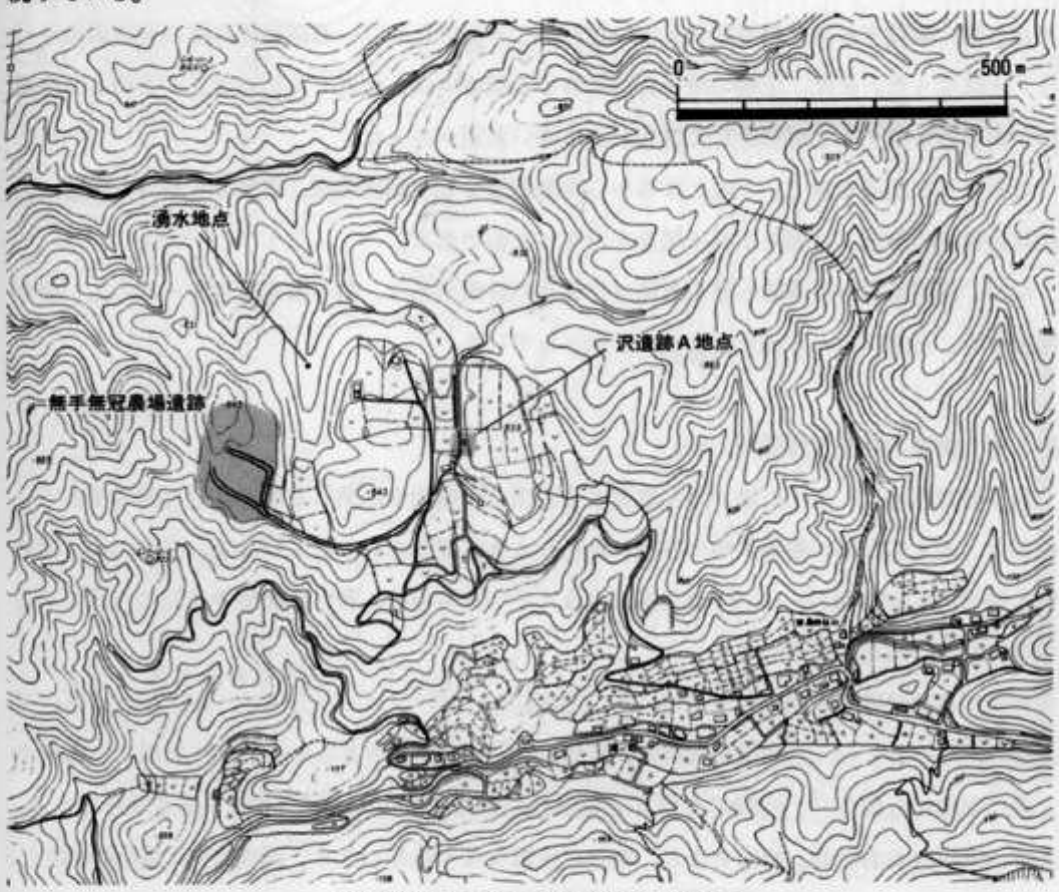
ＰＬ４　遺跡の現況

第8章　遺　　構

第1節　遺跡の概要（挿図37～38）

「無手無冠農場遺跡」は滝町小字乗越にあって（挿図37）、標高は843mと高所の台地にある。高山市街地から、国立乗鞍青年の家の方へ東に約6.7km程行くと落合橋がある。この橋の所で左に折れ約2km進むと滝町の集落がみえてくる。ここは、南北朝時代に和田氏という豪族がいて、その家から滝覚坊（ろうかくぼう）という高僧が出た。滝覚坊は三河の勧心寺の僧で、楠正成の幼年時代に学問を教えたといわれる。今も地元では滝覚坊ゆかりの地ということで「和田氏累代の墓」「塔洞」などの史跡を、大切に守り続けている。

挿図37　遺跡周辺小字区域



挿図38　無手無冠農場遺跡　位置図

本遺跡は、滝町津島神社の手前120mで左に大きく曲がって山間部に入いる（挿図２）。ツヅラ折れの山道を高低差120mほど上がると、小字「沢」地区に出る。谷の部分は桑畑となっているが上の方は平担な畑となっている。岐阜県遺跡台帳に記載されている「沢遺跡A地点」は、谷の桑畑と平担な畑との中間にあったが、既に自然地形が失なわれていて、出土した遺物も定かではない。

谷の桑畑を右手に見て、平担な畑の手前で左に曲がると無手無冠農場に着く。ここが、小字「乗越」地区である。この農場は10年ぐらい前に、滝町の中屋栄一郎氏が開墾をし、畑地に造成をしたところである。

その際、大量の土器片、石器が表面採取され、石組炉も発見された（SB２）。連絡を受けた市教育委員会では、石組炉にシートを掛け、保存をしてもらうよう依頼をしたが、遺物の量からして相当広い遺跡範囲が推定された。また、北側に小高い丘状の山林があり、どのあたりまで遺跡が伸びているのか解明をする必要があった。そんな折に、東部農地開発の計画が進み、本農場も計画区域に入っていたが遺跡の重要性、調査費用の問題等諸事情により、計画からは除外する方針を決めた。しかし、遺跡の範囲がどこまで伸びているのか、全くわからない状況では、東に隣接する東部農地開発区域の設計ができないために、遺跡範囲確認の発掘調査を行うことになった。また、土地の所有者は所有する畑の中に、どれぐらいの深さにどのような遺跡があるのかキチンと解明をしてほしいとの強い希望があった。

このような経過を経て、平成３年春から発掘調査をして範囲確認、住居址５基分を確認、表面採取遺物の整理、住居址１基の調査を行なったのである。

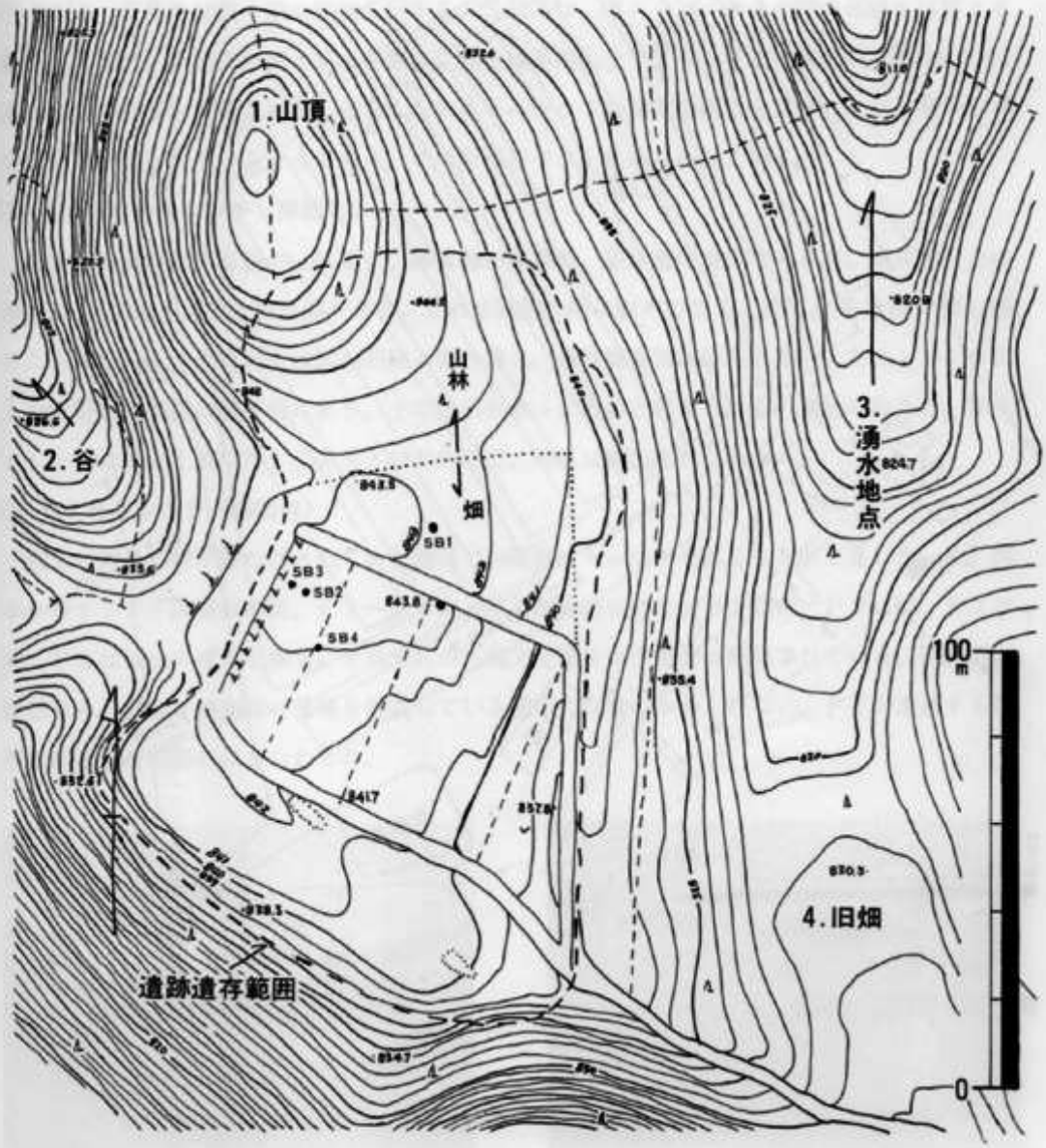
なお、滝町集落から遺跡へ至る道路は付替えの計画があり、数年後には別ルートの広い道が布設され、丹生川村へと通ずるように計画されている。

第２節　遺跡の範囲（挿図39、40）

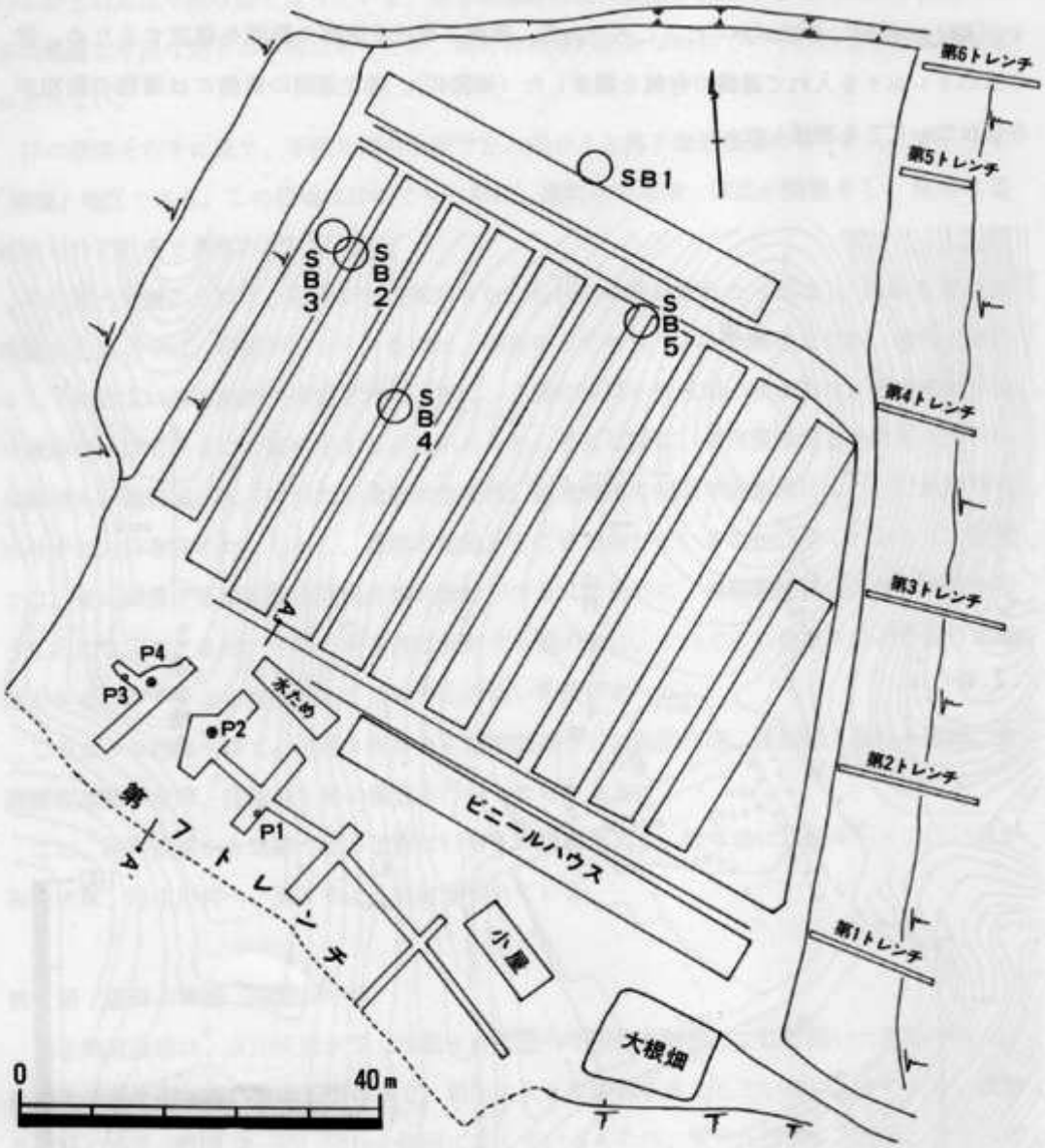
無手無冠農場は、火山灰層が厚く堆積する山頂の平担部を開墾して切り開いた農場である。抜根と、表土面の軽い整地工事のみで、地形に大きな変容をきたしていない。そのため、遺物包含層の攪乱が深さ20～40、50cmの範囲に及んでいるものの、竪穴住居址の床面は、ほとんどが遺存していると推察される。

挿図39は遺跡周辺の地形図である。１.「山頂」は、標高851mの山林で、遺跡との比高は８m高い。今のところ、山林部の開発の計画がなく、また山林であるため試掘は無理で、遺跡の北限は明確にし得ない。西側の２.「谷」部分は急傾斜になって漆垣内方面へ下る地形である。遺跡の西限はおおむね、特定できた。南側は直線をなす崖部になり、西南方向に急傾斜が続く。この南側部は第７トレンチ（挿図40）を入れて遺構の有無を確認した。

東側は緩斜面が続き、浅い谷状地形が続く。この谷を北側へ100m行ったところには、清涼な湧水があり、当遺跡の水源地であったことが知られる。この3.「湧水地点」は遺跡から約180mの距離、高低差は約30mの位置にあり、夏でも非常に冷たく、おいしい水である。また、4.「畑」の位置は昔畑があったところである。東側における遺跡の範囲を確認するため、計6本のトレンチを入れて遺構の有無を調査した（挿図40）。南北道路の東側には遺物の散布がみられないことを確認した。



挿図39　無手無冠農場遺跡　地形図


第6トレンチ
第5トレンチ
第4トレンチ
第3トレンチ
第2トレンチ
第1トレンチ
SB1
SB2
SB3
SB4
SB5
P1
P2
P3
P4
水ため
ビニールハウス
小屋
大根畑
第7トレンチ
0
40m

挿図40　調査区全体図

第３節　遺構の遺存状況（挿図40～42）

挿図40に、発見された住居址SB１～SB５の位置、第１～７トレンチの位置、挿図41に第１～７トレンチの断面図をあらわした。また挿図42には、地山までの遺物包含層の深さを記した。

(1) ＳＢ１～ＳＢ５（挿図40）

ＳＢ１発見地点では、床面まで34～36cmの深さを測り、周辺は黒色土の大根畑で、大量の土器片が散布している。ＳＢ２は、前述したように一番最初に発見された石組炉の住居址である（ＰＬ31）。炉は55×71cmと小型で、南北のプランが3.3m、東西は西側半分が削り取られて不明である。ＳＢ３は第４節に詳細を記する。ＳＢ４は、ビニールハウスの間の通路を試掘する際に発見され、床面まで深さ55cmを測る。埋土は茶褐色土で、ちょうど住居址の西壁にあたり、深さ12cmの周溝も発見された。ＳＢ５もビニールハウスの間の通路に発見されたが、東側の半分以上が削平されているようである。その断面がボタ上にあらわれている。

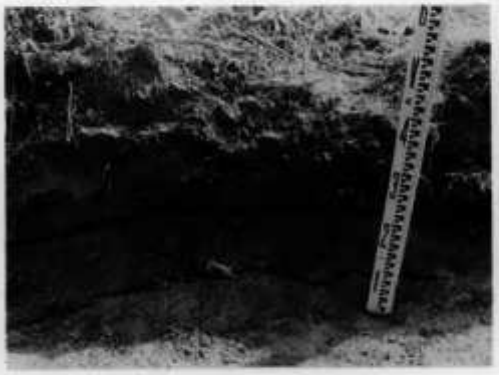
(2) 第１～６号トレンチ（挿図41）

基本的な層序は第Ⅱ層の山林表土、第Ⅲ層の漸移層、第Ⅳ層の地山であるが、第Ⅱ層の上に厚さ50～120cmの黒色土攪乱層がある。これは開墾の際に樹木の根や不要な土を重機で押し寄せたものである。山林表土は20cm前後と案外薄く、漸移層も20cm以内と薄い。このトレンチを入れた場所は東側の緩斜面にあり、土の流出があったものと考えられる。遺物の散布は、第４トレンチに縄文土器片が１点発見されたのみで、他には検出されなかった。

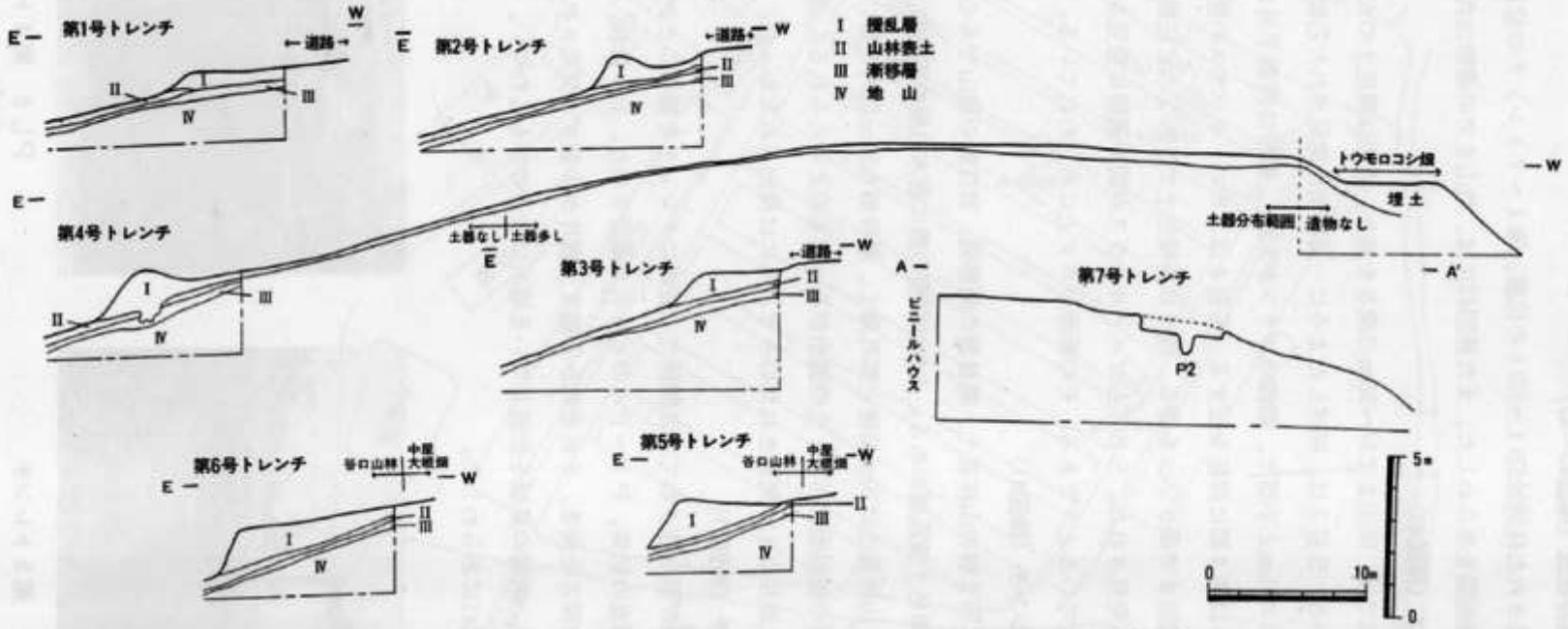
(3) 第７号トレンチ（挿図41）

樹木の大きな根が取り残されていた関係で一直線にトレンチを掘ることができなかった。何本かのトレンチ調査の結果、Ｐ１～Ｐ４のピットが確認された。Ｐ１は40、Ｐ２は62、Ｐ３は39、Ｐ４は50cmの深さを測る。それぞれから縄文土器片が少量ずつ発見されている。住居址の痕跡はみられない。南端の墓域を形成している場所になるのかもしれない。Ｐ２を通過する地形の断面図を挿図41にあらわした。

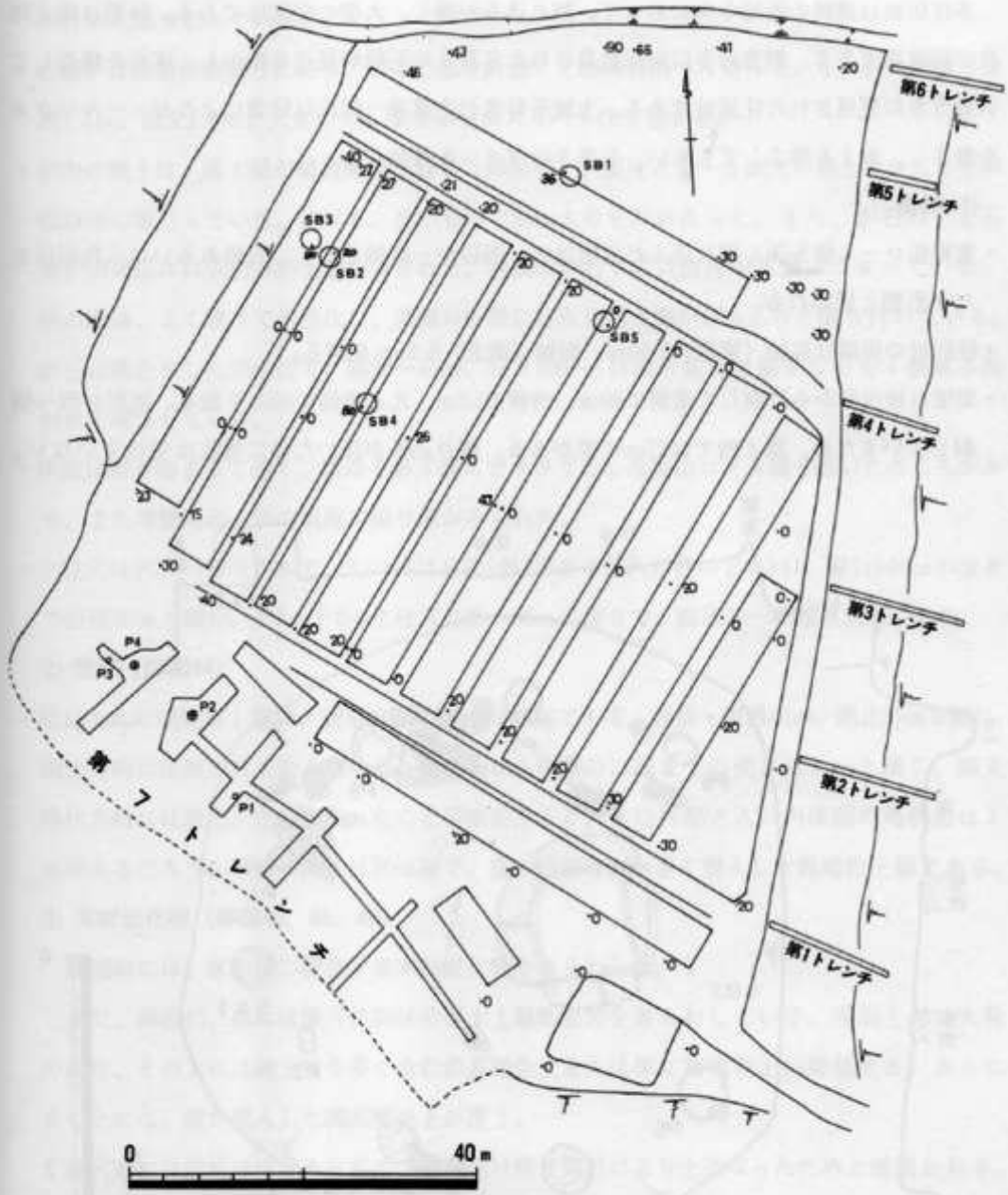
ＰＬ５　第５トレンチ



ＰＬ６　第４トレンチ



挿図41　第1～7号トレンチ断面図



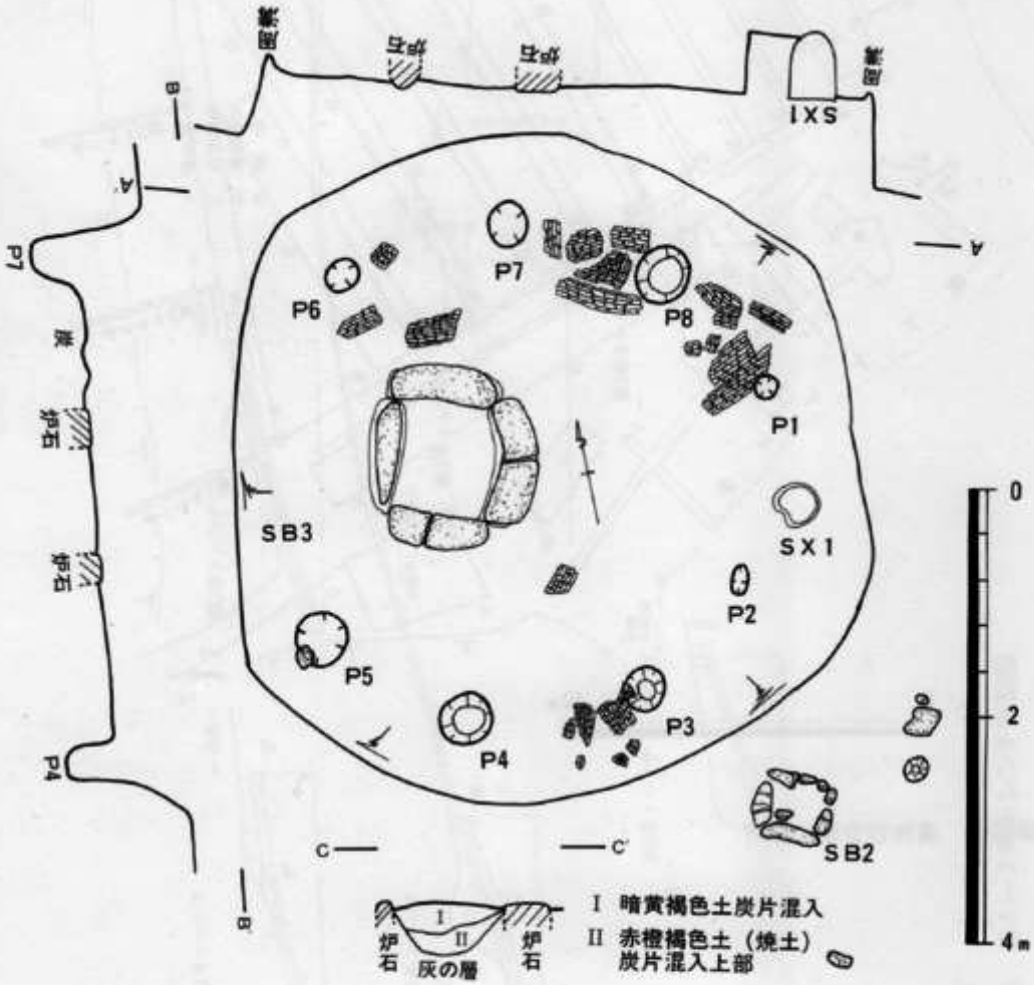
挿図42　遺物包含層の深さ

第４節　第３号住居址（挿図43）

本住居址は遺跡の西端中央にあって、掘り込みが深く、大型の住居址である。時期は縄文時代中期後葉である。調査着手以前に発見されたＳＢ２の石組炉周辺を検出し、床面を精査しているうちに発見された住居址である。土地所有者の中屋栄一郎氏は好意によりビニールハウスを徴去し、表土を除去してもらい、ＳＢ３のプランを確認した。

(1) 特徴

- 黄褐色ローム層を深く掘り込んだ住居址で、西辺が一直線をなし、五角あるいは六角形状をなす形態と思われる。
- 住居址の規模は長軸（東西）5.50ｍ、短軸（南北）5.35ｍを測る。
- 周壁は検出面から計測して東側で80㎝、西側で53㎝、北と南側で60㎝を測る。地形が西へ傾斜しているため、東と西では27㎝の差がある。掘り込みが深いために攪乱は受けていない。



挿図43　第３号住居址

・周溝は明瞭にみられ、東及び西壁で幅４～10cm、深さ８～13cmを測る。北と南壁は遺構保存のために掘り切っていない。

・石組炉は住居の奥寄りにあり、炉中心部で計測して85cm程西へ片寄っている。炉の規模は東西1.5m、南北1.6mと大きめで、深さ46cmのスリバチ状を呈する。

・炉内の埋土は、第Ⅰ層が暗黄褐色土層で（挿図43）、炭片と２～３cm大の焼土のかたまりが顆粒状に混じっていた。炭片も、長いもので20cm大のものがあった。また、炉石の下と石組炉の周辺には灰色の粘土層がみられた。西側の炉石下には炭片が多量につまっている。炉の底は、よく焼けて赤色化し、南側の炉壁には灰色粘土層がびっしりと張り付いている。炉石は桃色をした安山岩で、幅20～40cm、長さ100～112cmの長形で偏平な石を４個組み合わせて構築している。

・床面は引き締まって硬く、雲母を多く含んでサラリとした高山ローム層を敷いたところがあり、また埋甕周辺、炉の周囲に張り床がみられた。

・主柱穴はP3～P8の６本で、入口柱はP1、P2である。入口柱のP1は41、P2は40cmの深さで直径20cmと細い。P3～P8の主柱穴は26～36cmの深さで、直径30～40cmと太めである。

(2) 埋甕（挿図44）

・発見された埋甕は１個で、唐草文系の大きな深鉢である。直径・東西42cm、南北37cmを測り、南北方向に圧縮されて歪んでいる。検出面から埋甕の口縁までの深さは80cmと深く、縄文時代当時には表土、土盛があったこと等推定すると、入口外部と入口内床面の高低差は１mはあるだろう。埋甕の深さは70cm程で、甕の内部は炭が多く混入した黄褐色土層である。

(3) 木材炭化物（挿図43、45、46）

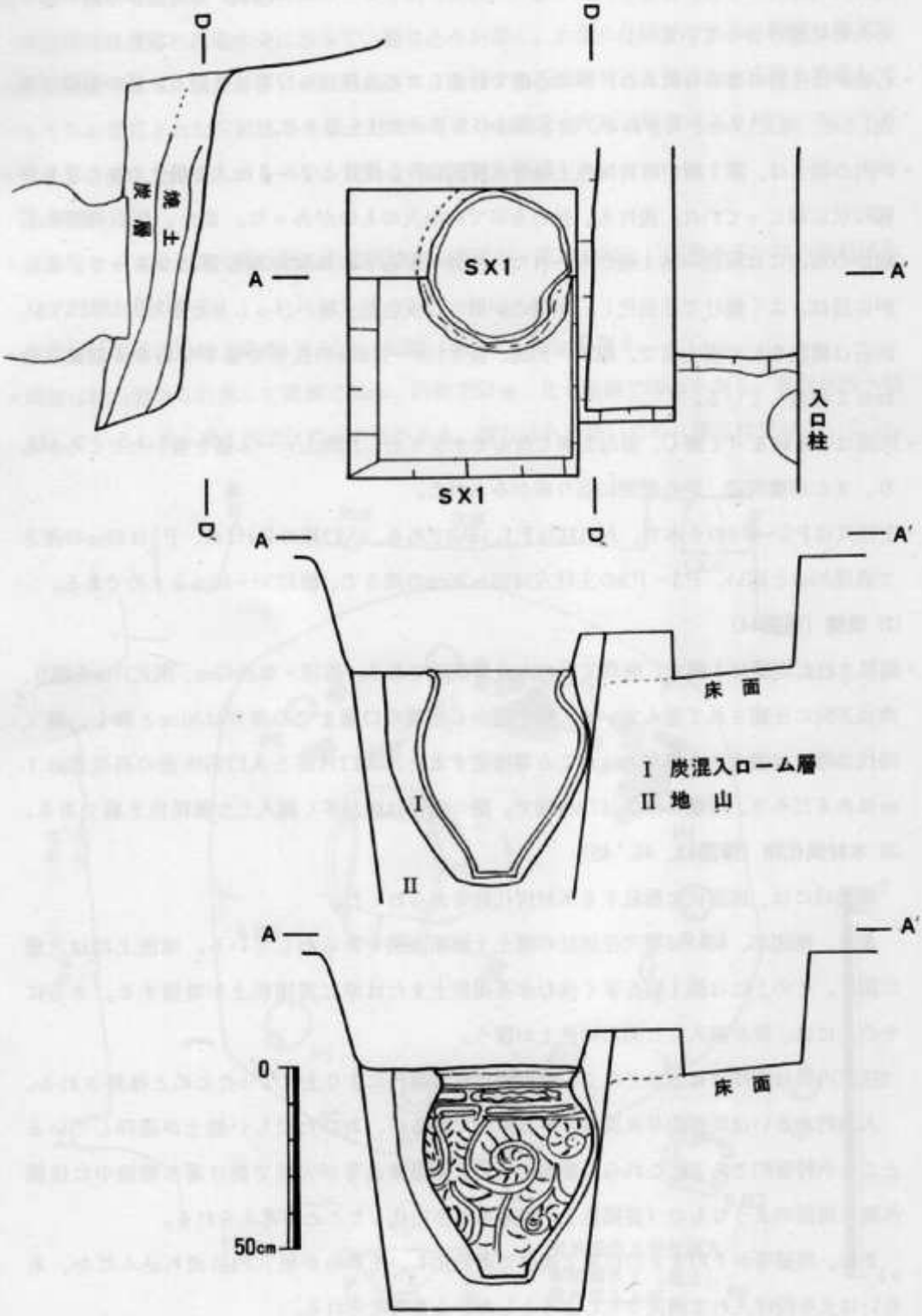
挿図43には、床面状に散乱する木材炭化物をあらわした。

また、挿図45、46には竪穴住居址の埋土土層断面図をあらわしている。床面上には大量の炭片、その上には焼土粒を多く含む赤茶褐色土または単に黄褐色土が堆積する。さらにその上には、炭が混入した黒茶褐色土が覆う。

柱穴内には炭片はほとんどなく、柱が焼け残り腐朽により土になったためと推察される。

人為的あるいは災害的な火災なのかは不明であるが、おびただしい焼土が遺存しているところが特徴的である。これらの要因として、屋根構造等が火災で焼け落ち燃焼中に住居外側の周提のようなもの（黄褐色土）が落ちて赤色化したことが考えられる。

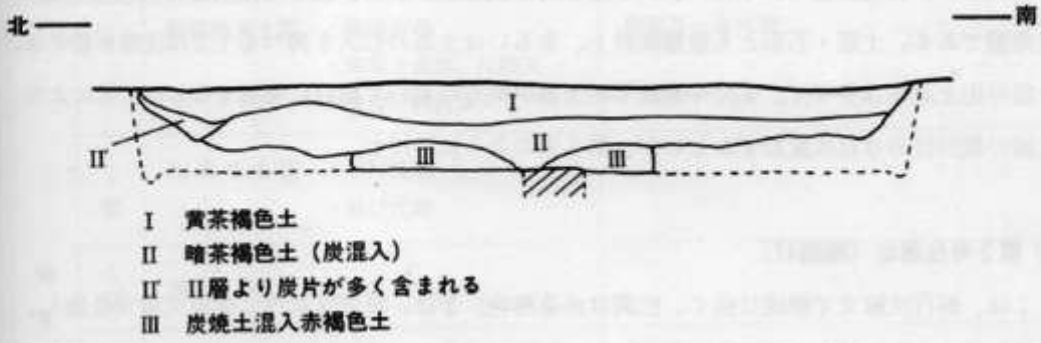
また、周提等がそのままの状態で焼けて赤色化し、それらが竪穴内に流れ込んだか、あるいは土を投げ入れて消火でもしようとしたかとも考えられる。



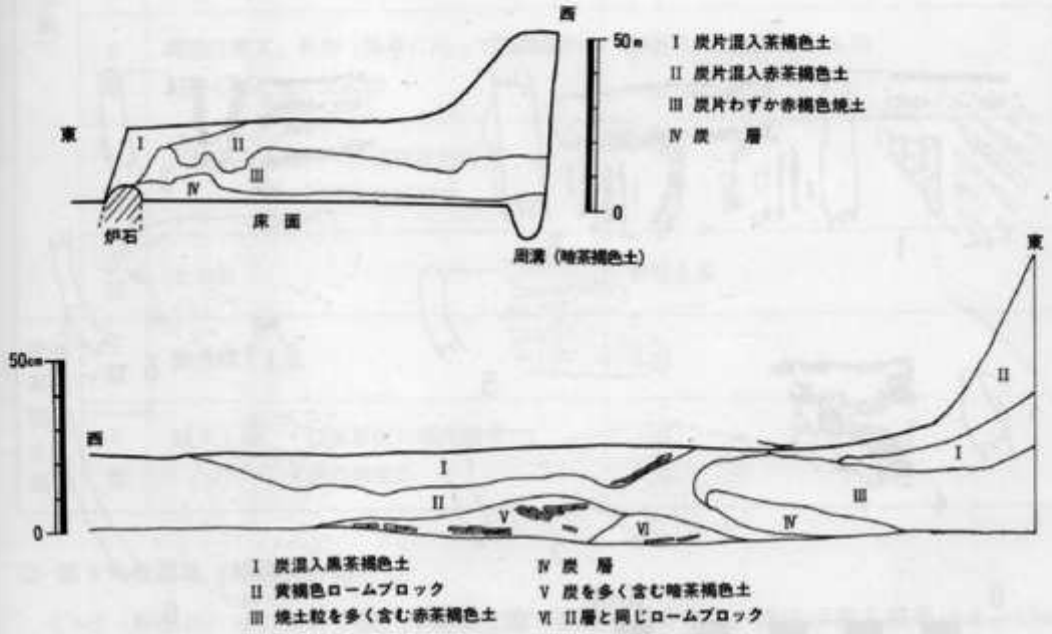
挿図44　第3号住居址埋甕

(4) 出土遺物

埋甕周辺には大量の石剥片がみられた。また、大形の偏平平石が出土。住居址中央部からは、黒曜石大石核、土偶頭部1、足破片1、ミニチュア土器1点が検出されている。



挿図45　第3号住居址　断面図



挿図46　覆土土層断面図

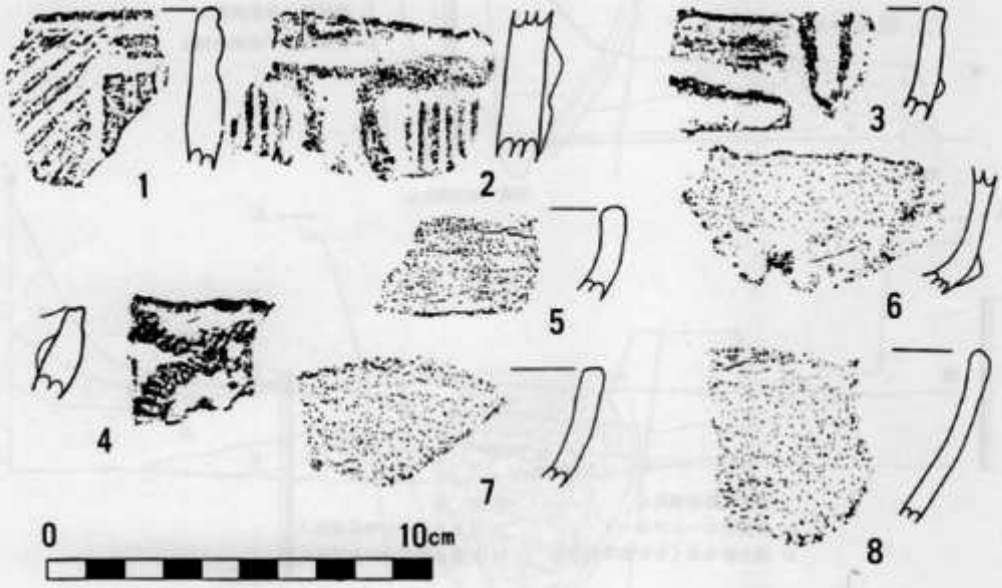
第9章　遺　物

第1節　土　器

本遺跡から出土した遺物は、遺物整理箱（31×44×12cm）59個がある。遺跡範囲の確認を主な目的とした発掘調査であるため、第2号住居址は覆土の半分、第3号住居址は周壁部付近が未発掘である。土器・石器とも数量統計上、あるいは土器の形式を調べる上では注意を要する。土器の出土点数は少なく、また中期後半の土器が地方において独自に発展をなしたことにより、土器の類別仕分けは大変むずかしいが、第3表のように分けた。

(1) 第2号住居址（挿図47）

1は、斜行沈線文で焼成は良く、色調は赤茶褐色。2は、隆帯区画内に櫛描沈線文を施し、粗粒の砂を含み焼成は良い。3は、細い隆帯を直交して貼り付け、焼成は良い。5～8は無文の浅鉢形土器と思われ、器厚は6mmと薄い。6には、隆帯による小突起がつく。焼成は悪く、色調は黄茶褐色である。4は、Ⅱ群7類で太い隆帯に貝殻状工具による刺突を加え、円孔がある突起部である。土器はほとんどが曽利Ⅲ式に比定される。



挿図47　第2号住居址の土器

第3表　無手無冠農場遺跡土器分類表

群	類	種　　類	備　　考
第Ⅰ群土器（縄文時代早期）	1類	条痕文系　無文土器	第3号住居址に混入6点 表面採取1点
第Ⅱ群土器（縄文時代中期）	1類	隆帯施文土器　・隆帯のみ ・隆帯と条線、沈線文 ・隆帯に刻目が入る	曽利Ⅱ～Ⅲ式期
	2類	沈線文土器　・平行沈線 ・斜行沈線	
	3類	無文土器	
	4類	縄文を地文とした土器　・縄文、撚糸文 ・隆帯施文 ・沈線文	加曽利E式比定
	5類	圧痕突帯を有する土器　・縄文を地文 ・条線を地文 ・無文	
	6類	櫛描沈線文、角押（隆帯に沿って四角状の刺突を加える）文土器	勝坂式に比定されるもの
	7類	北陸系の土器　・貝殻腹縁刺突文 ・半隆起線文	
	8類	その他	台付土器
第Ⅲ群土器（縄文時代後・晩期）	1類	磨消縄文土器	2点
	2類	無文土器　・口縁裏面に縄文施文 ・赤色物塗彩	1点 1点

(2) 第3号住居址（挿図48～53）

1～5（挿図48）は、Ⅰ群1類、早期の土器で繊維を多く含み、焼成は良く器厚は8～10mmで色調は黄褐色である。1は口縁に粗い刻目を有する。2は表裏面に条痕が、5は表が無文で裏面に条痕文がみられる。3は波状口縁、4は平口縁である。住居址覆土に混入したもので、これ以外はすべて中期、後期の土器である。以下、中、後期の土器について記述する。

6～16（挿図49）は、Ⅱ群1類、隆帯施文するもので、条線、刺突が加えられる。6は口縁部に隆帯区画を並べて条線で埋め、縦を基調とした文様構成で類例はあまりない。7～12は唐草文系の土器である。13は渦巻隆帯に沿って一部刺突がみられる。14は外反する口縁上端に深い刺突列が巡り、裏面には太い沈線2本を横走させる。15は外反する口縁部無文帯があり、頸部に渦巻隆帯が付く小型の深鉢。16は渦巻隆帯の波状口縁部である。

17～30（挿図50）は、貼付隆帯と隆帯に刻目を有するもの（Ⅱ群1類）、沈線文（Ⅱ群2類）、無文土器（Ⅱ群3類）である。17、18は口縁部に隆帯を縦位に貼り付け、その上に横位に短い隆帯を押し付けて貼り付ける。19は太い隆帯を不規則に施し、異形の工具で深い刺突を加える。20は沈線文、21、22は横走する刻目隆帯間に櫛描沈線が施される。23～26は沈線文、27は口縁に刻目を有する。28は無文土器で浅鉢の器形になると思われる。29は口縁部の無文部で、30は条線文深鉢の底部である。

31～34、36（挿図51）は縄文を地文とした加曽利E式系の土器（Ⅱ群4類）で、32、33はRLの縄文を施す。34はRLの縄文地に隆帯を貼り付ける。35は渦巻隆帯上に貝殻状工具で刺突を加える。北陸系の土器である。37、38（挿図51）は圧痕突帯をもつもの（Ⅱ群5類）で、38は圧痕突帯が太くLRの縄文を地文とする。

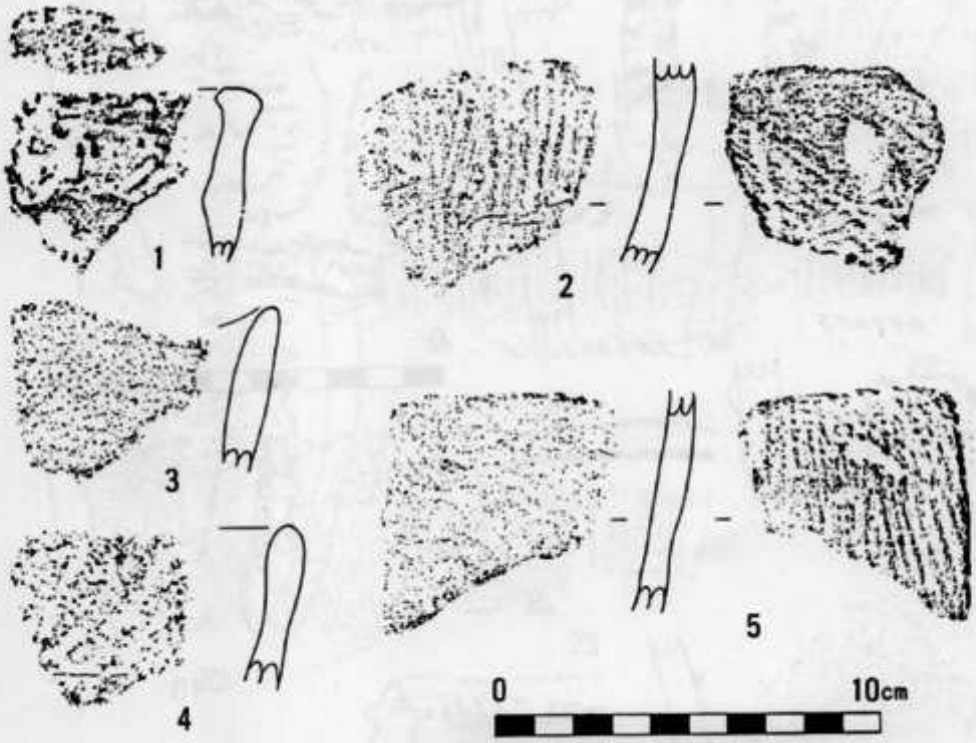
39～41はⅡ群4類で、39、40は縄文地を指でなでて渦と曲線を描く。41はキャリパーの深鉢で加曽利E式系、焼成は良く色調は灰黄色で胎土が他とは異なる。

42（挿図52）は入口に設けられた埋甕（Ⅱ群1類）で、口径33、胴部最大径36、底部径7、器高46cmを測る。器厚は7～9mmで、焼成は悪く、色調は赤茶褐色である。口縁部無文帯の下に楕円形の区画が横位に並ぶ。その下へ渦を連接して唐草文を表わす、大変出来の良い土器である。

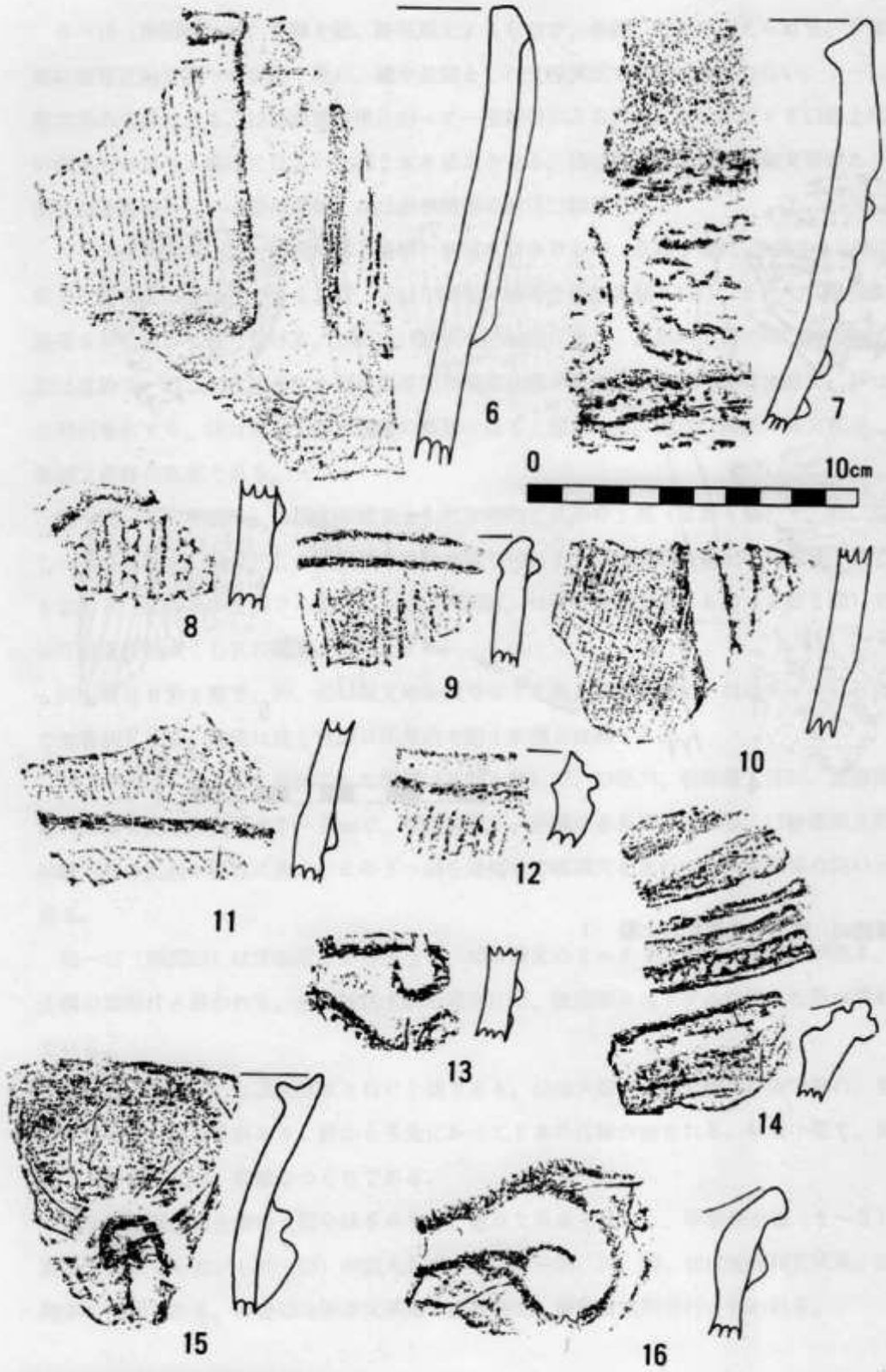
45～47（挿図53）は床面近くから出土し、45は無文のミニチュア土器で指痕跡が残る。46は土偶の脚部片と思われる。47は柱状土偶の頭部片で、後頭部にはリアルに結った形が表わされている。

43、44（挿図53）は表面採取された土偶である。43は大型の土偶で胸部中央で割れ、手の部分に径8mmの貫通孔があり、肩から手先にかけて2本の沈線が施される。44は小型で、乳房部はよくわからない。粗雑なつくりである。

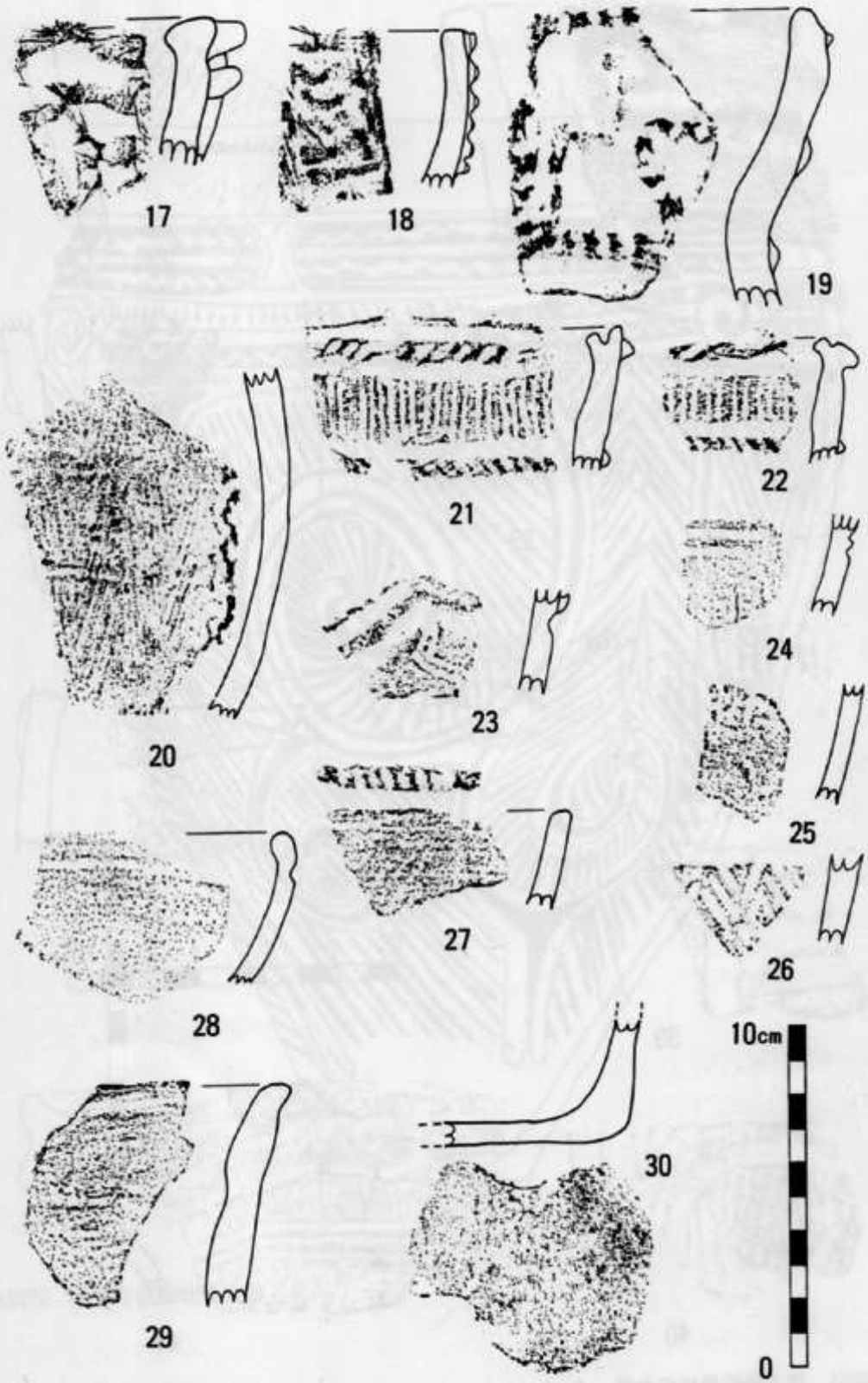
第3号住居址覆土中の土器全体をみると、唐草文系を主体とし、早期の土器（1～5）や中期後半の中でも古いもの（13）が混入している。31～34、36、39、40は加曽利E式系、35は北陸系の土器である。埋甕42は唐草文系第Ⅱ期段階で、曽利Ⅲ式期並行と思われる。



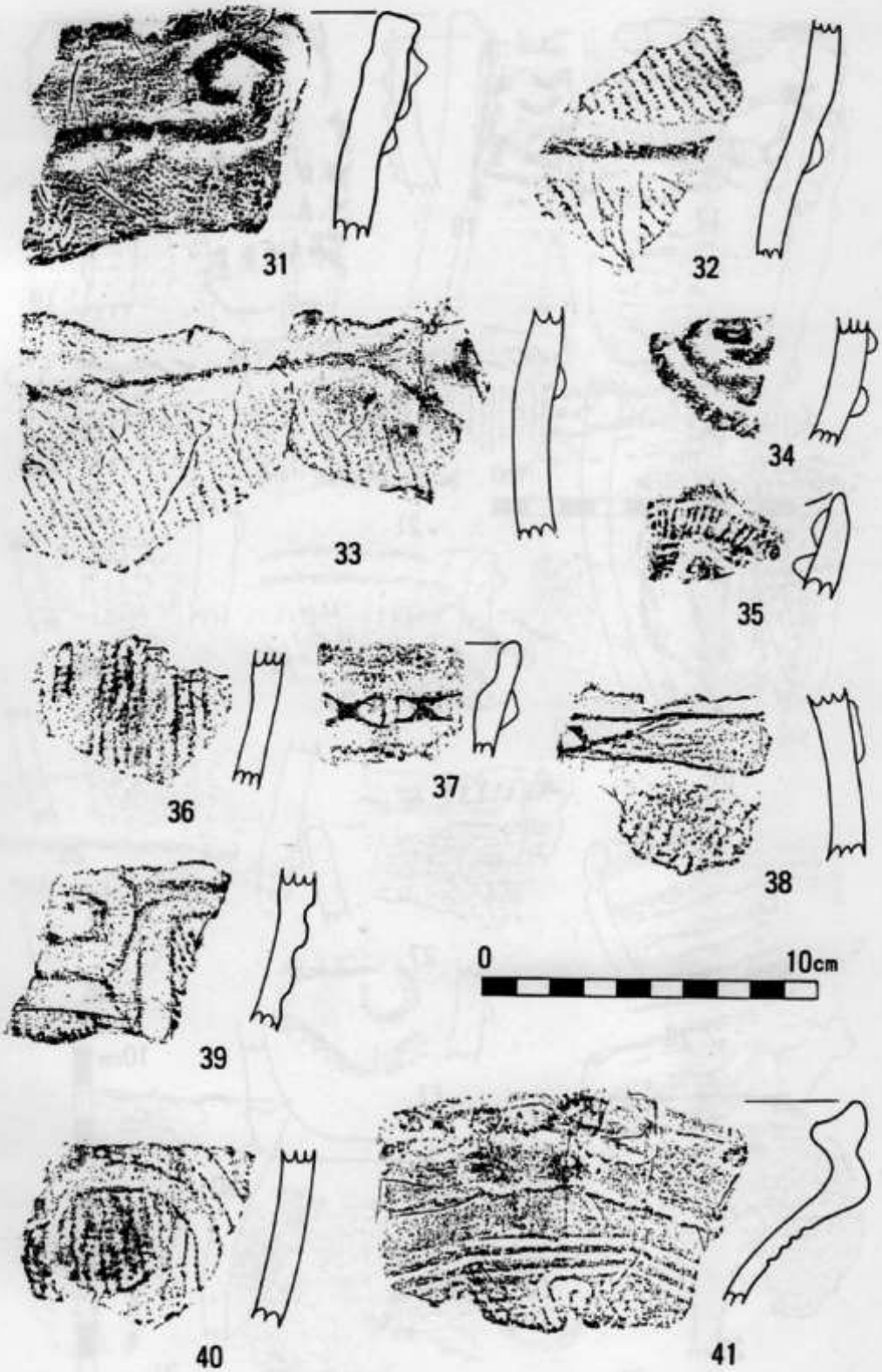
挿図48　第３号住居址の土器　1



挿図49　第３号住居址の土器　2

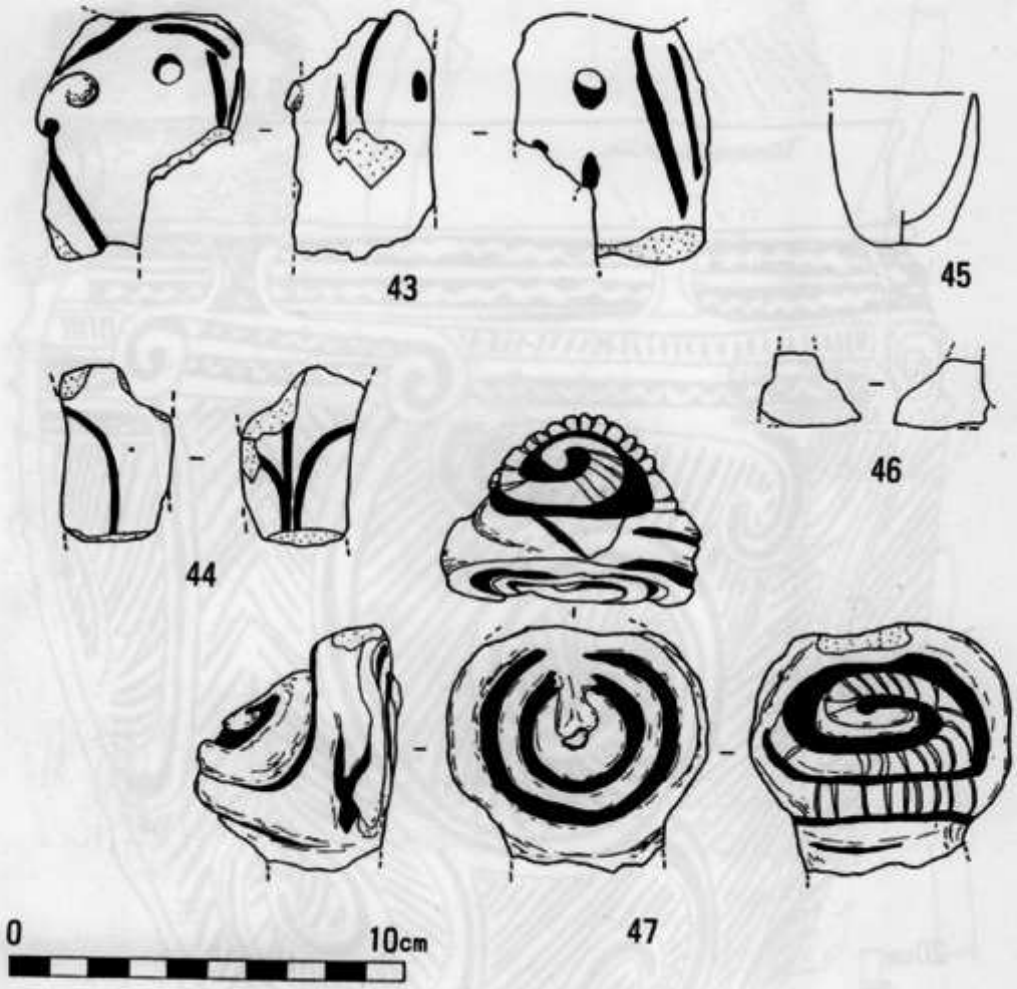


挿図50　第３号住居址の土器　３



挿図51　第３号住居址の土器　4

挿図52　第３号住居址の土器　5



挿図53　43、44　表面採集　　45～47　第３号住居址出土

(3) 遺構外出土の土器（挿図54～57）

１（挿図54）は早期の土器でⅠ群１類、繊維を多く含み、表裏に繊維の痕跡が顕徴にみられる。焼成は良く、色調は灰褐色、条痕文系の無文土器である。２は胎土に10×16㎜の炭化物塊が含まれ、故意に混入させたのかもしれない。繊維がわずかに見られ、早期の可能性がある。早期の土器はこの２点のみで、以下中期の土器について記述する。

３～９はⅡ群１類、隆帯で施文するもので、３は突起がつく。４は口縁部に近い重弧文隆帯、５は口縁上端が23㎜と異常に厚く、刺突が不規則に施される。６～９は隆帯区画内に櫛描沈線を施すもので、９には隆帯に刺突が加わる。10は条線を地文とする厚手の土器で、11～14はⅡ群２類、沈線文を施す。12は焼成が良く色調は黄褐色を呈している。15～17はⅡ群１類、幅６～７㎜、高さ３～４㎜の太い隆帯を縦位、横位に貼り付けたものである。

18～25（挿図55）は圧痕突帯をもつもの、Ⅱ群５類である。18～20は縄文を地文とし、21は条線を地文としている。19は突帯上にも縄文が施される。26は第３号住居址からも出土したが、貼り付け隆帯である。

27～32は隆帯、角押、櫛描文を施す信州系の土器（Ⅱ群６類）で中期後半の中でも古い方に属する。焼成は良く、色調は他と違いややピンクがかった灰黄色である。27、28は隆帯に沿って角押が施される。30、31は櫛描沈線文を施す。いずれも勝坂式に比定される。

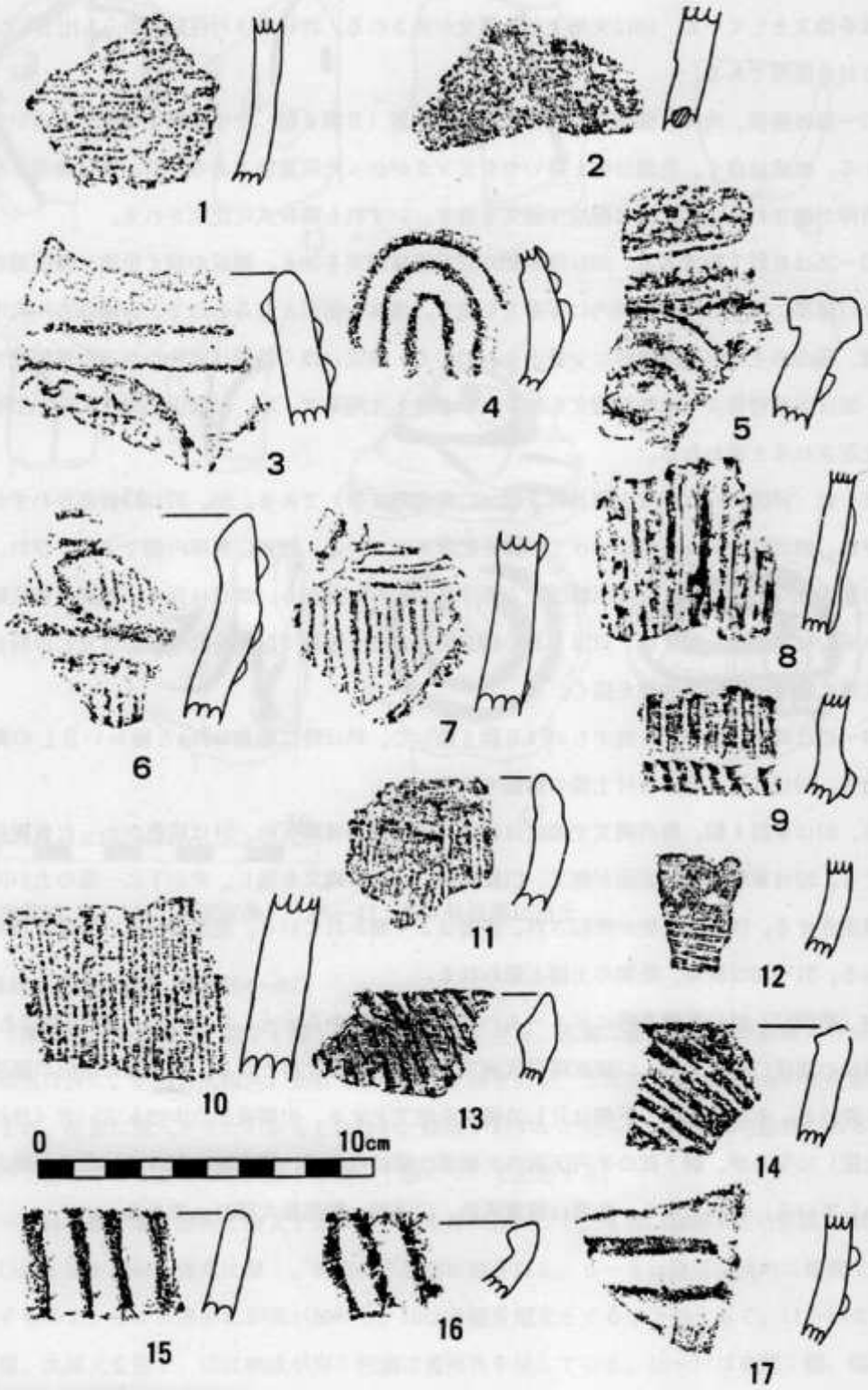
33～35はⅡ群７類である。33は隆帯間に貝殻腹縁刺突を加え、焼成が良く色調は黄灰褐色、34は口縁部に渦巻と隆帯区画内に擬縄文を施す。浅鉢の器形となるもので、吉城郡古川町中野山越、高山市上野町垣内遺跡に少量出土している。焼成は良く色調は肌色がかった黄褐色である。35は半截竹管文で半隆起線文を施す。いずれも北陸系で、34、35は上山田式（35は古府式）に比定されると思われる。

36～41（挿図56）は無文土器Ⅱ群３類（口縁部無文帯）である。36、37は口唇部がわずかにくびれ、38は粘土ヒモを押しつけて口縁を肥厚させている。39は口唇部内側で少しくびれ、浅鉢の器形となろう。40、41は口縁部でくの字に強く折れ曲がる。焼成は良く、色調は黄灰褐色である。42、43はⅡ群４類、42はＬＲの縄文を地文とし隆帯で区画を設け、43はＲＬの細かい縄文地に隆帯と沈線で曲線を描く。

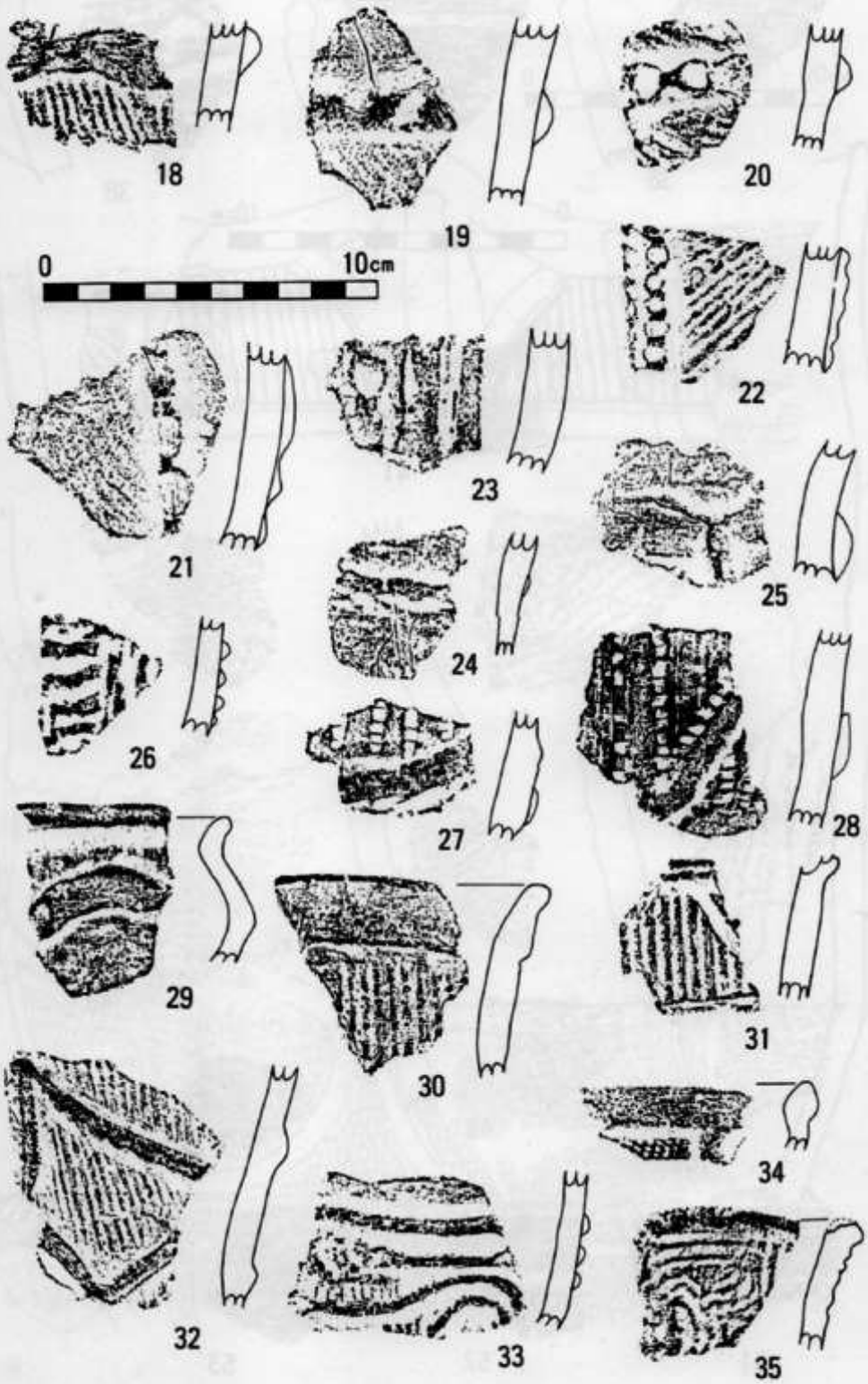
44～48は縄文、撚糸文を施すもの（Ⅱ群４類）で、48は特に幅約1.5㎜と細かいＲＬの縄文を施す。49はⅡ群８類、台付土器の脚部である。

51、52はⅢ群１類、磨消縄文で焼成は良い。52の色調は黒灰色、51は肌色がかった黄褐色を呈する。53はⅢ群２類、表面が無文、口縁裏面にＲＬの縄文を施し、その下に一条の太い凹線を横走させる。50は赤色物が塗彩され、表裏はよく磨かれている。焼成は良く、色調は黒褐色である。51～53は後期、晩期の土器と思われる。

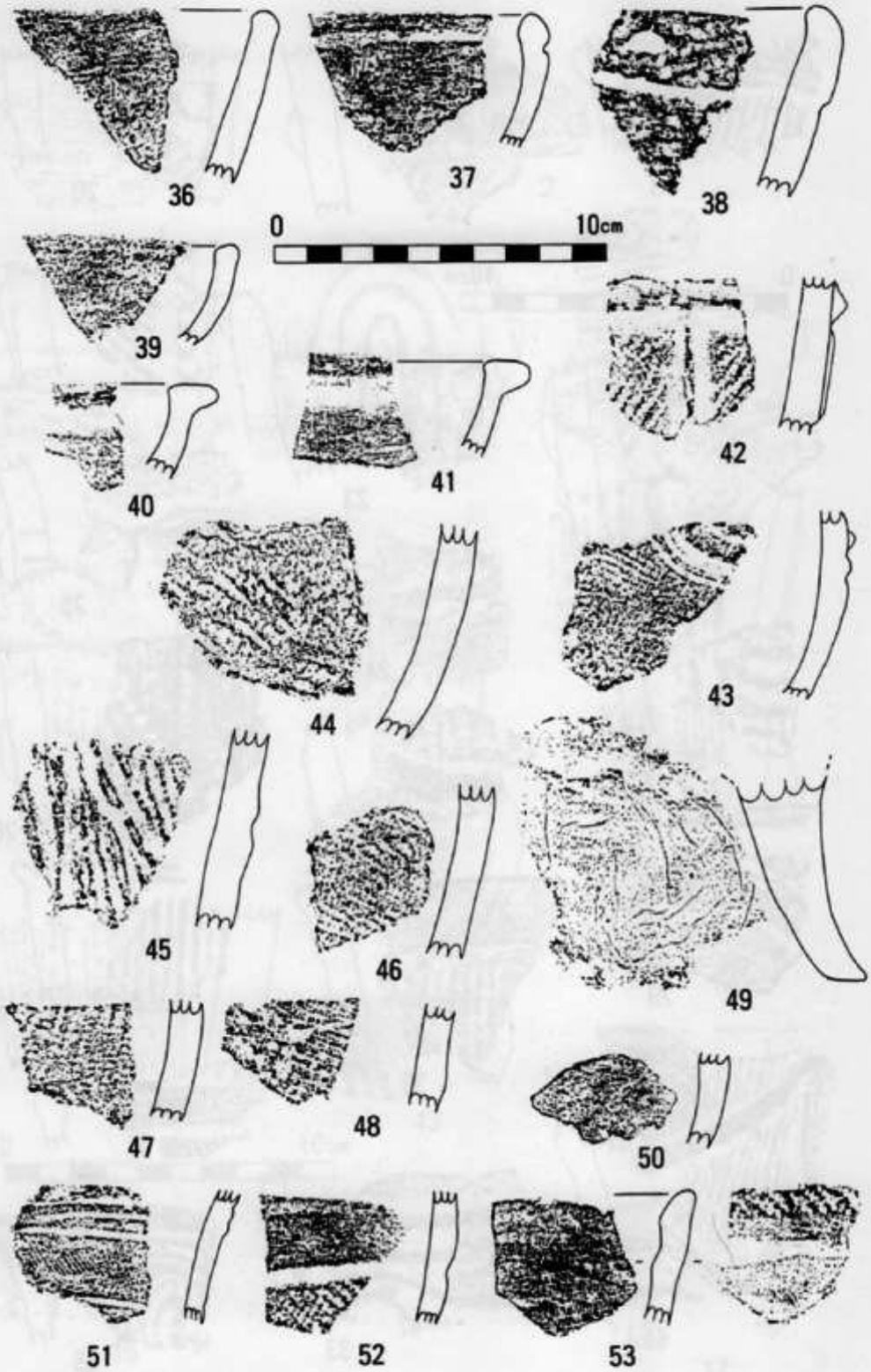
54（挿図57）は分布調査時にビニールハウス間の通路から出土したもので、Ⅱ群６類である。４単位の波状口縁をもち、口縁部隆帯区画文様帯の下は無文帯となり、胴下部に半円の隆帯区画を設ける。その区画内、下部はＲＬの縄文を地文とする。中期後半の中でも古い方（井戸尻式比定）になるが、胴下部の半円区画内が櫛描沈線にならず、縄文地となっているのが地方性を示している。焼成は良く、色調は暗黄灰色、口径30、胴部最大径31㎝である。



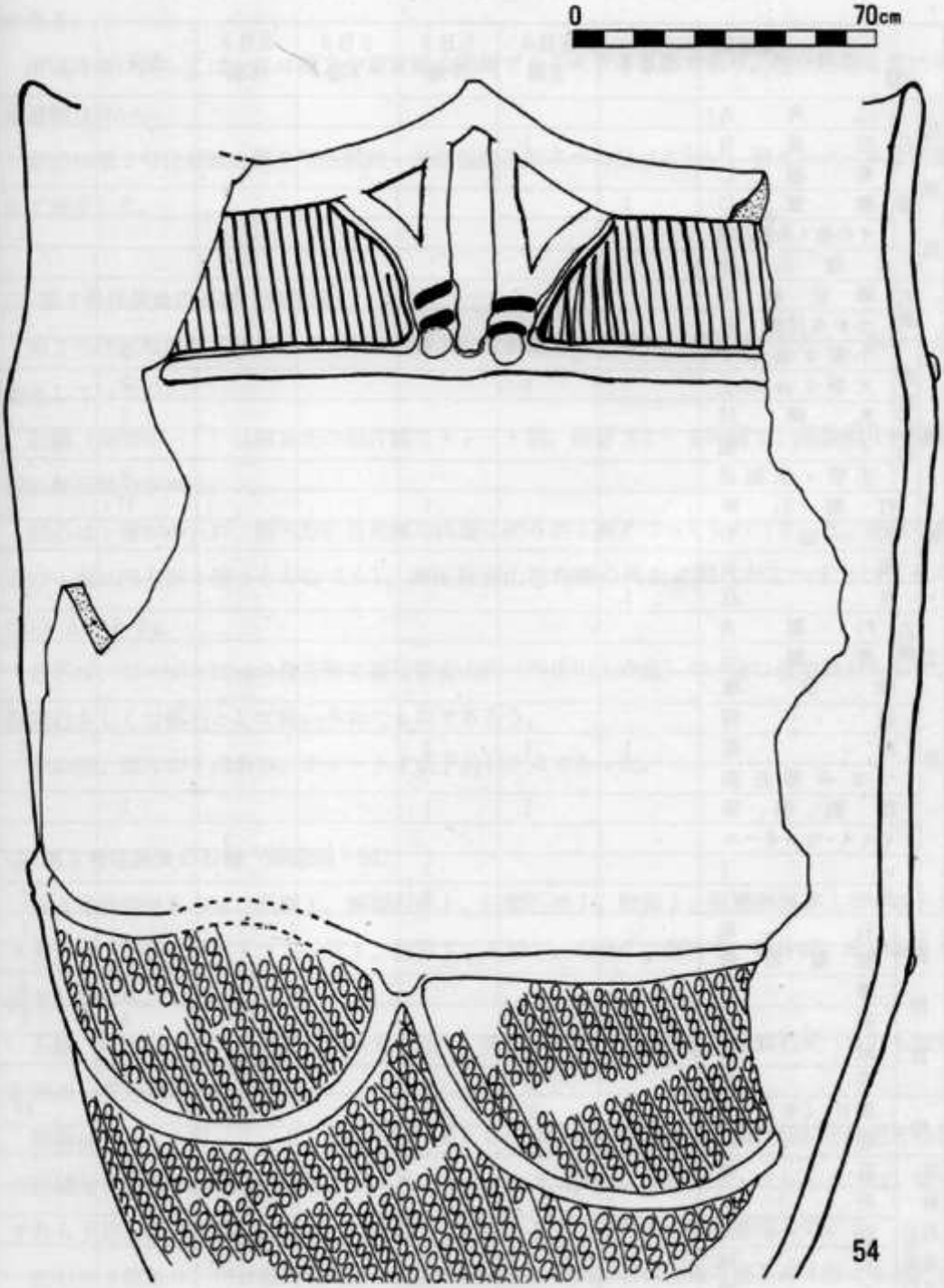
挿図54　遺構外出土の土器　1



挿図55　遺構外出土の土器　2



挿図56　遺構外出土の土器　3



挿図57　遺構外出土の土器　4

第2節 石　器

第4表　無手無冠農場遺跡出土石器一覧表

分類		出土区	SB2	SB3 上層	SB3 中層	SB3 下層	SB3 床面	表採	〃
狩猟具	石鏃	三角 A							
		凹基 B		1					7
		有柄 C							
		柳葉 D	1						
		その他・未製品等							2
	尖頭石器								
農具・工具	石錐	棒状錐 A							
		つまみ付錐 B							3
	磨製石斧	小型6cm以下						2	
		大型6cm以上		1				2	
		乳棒状						2	
		ノミ型							
		不明・未製品						4	
	打製石斧				1			17	
	石包丁								
	砥石								
	台石		1						6
	石錘	打製 A							
		磨製 B							
	棒状礫								
	掻器								
	削器		1	1	1				8
	つまみ形石器								
	粗製削器			1	1			1	
	ピエス・エスキーユ						1		
	u・f				1				1
	剥片（フレーク）			1	1				7
調理具	石匙								1
	粗製石匙								
	磨石							5	3
	凹石		3	1		1		4	2
	敲石								
	石皿			1					
他	削片（チップ）		7	10	9		4		47
	石核					1			
宗教的道具（呪術的）	石棒								
	石剣								
	石刀								
	石冠								
	玉類								
その他					凝灰岩質剥片18	石斧状礫1 焼円礫1	凝灰岩質剥片213		特殊スリ石 2

本遺跡において得られた石器類は、発掘品・表採品を含めて総数176点である。遺構内より出土した石器類は、土器類に比して意外と少なく、住居址の廃棄に関連する状況を考える必要がある。

所属時期に関しては、ほぼ縄文中期後葉の範疇でとらえうるものであり、特に時期を異にする遺物はない。

記述は第2号住居址・第3号住居址・表面採集品の3つに分けて行い、個々のデータは別表にて提示した。

(1) 第2号住居址の石器（挿図58）

第2号住居址のわずかに遺存する包含層より、石鏃1、削器1、凹石3、台石1、削片7が出土している。

石鏃（挿図58—1）は柳葉形の剥片鏃でチャート製。削器（2）も同質で、縦長剥片の両側縁に使用部分がある。

凹石は3種がみられ、楕円形の自然礫の両面に凹みが2個ずつつくもの（3）と、面取り磨石の1面に凹みが2個つくもの（4）、凝灰質安山岩角礫の両面に凹みが1つずつつくもの（5）とがある。

台石は、42×23×12cmの長方形の凝灰質安山岩（丹生川火砕流）の一面に使用痕がみられ、作業台もしくは砥石として用いられたものであろう。

その他、削片が7点あり、チャート4点下呂石3点であった。

(2) 第3号住居址の石器（挿図59・60）

第3号住居址からは、石鏃1、磨製石斧1、打製石斧1、削器2、粗製削器3、ピエス・エスキーユ1、ユーズド・フレーク1、凹石2、石皿1、石核1、剥片2、削片23、その他2が出土している。

石鏃（挿図59—6）は黒曜石製の大形品で、先端と片脚を欠失する。磨製石斧（9）も定角石斧の一部分である。

削器はチャート製（7）と、下呂石製（8）各1点。粗製削器は砂岩製（10）と緑色片岩製の粗雑なもの各1点がみられる。ピエス・エスキーユ（12）、ユーズド・フレーク（15）はいずれも下呂石製、打製石斧（14）は撥形で、角閃石を多く含む安山岩を使用している。

凹石は2種あり、16は流紋岩角礫の両面に凹みがみられ、17は面取り磨石の4面にそれぞれ2個ずつの凹みがつく。特に17は火熱を受けてススや赤色付着物がみられる。

石皿（20）は4分の1破片で安山岩製。石核（18）は、漆黒良質の黒曜石で飛騨地方では最

大級のものと言えよう。剥片（19）が接合し、13の剥片も同一母岩からのものである。剥片剥離はアトランダムであり、まだかなりの剥取が可能である。

このほか、石斧状をした長大な凝灰岩自然礫（21）と円礫が、火熱を受けた状態で床面近くに遺存し、同質の剥片状石片が231片集積していた。うち1片は石斧状礫に接合し、これらの石片が凝灰岩質の礫が加熱されて作出されたらしい事を示している。軟質の石材のため、石器としての使用は不適であり、これらの石片が何のために作出され、また集積されていたかは不明である。

第3号住居址の石器類は、日常生活道具のセットとみるには余りに貧弱な内容であり、破損品も多い。従って主要な道具類を除いた不要品が遺存していた可能性が強い。しかし大形の黒曜石石核の様な貴重な素材がそのまま放置してあった状態は、説明し難い部分でもある。

(3) 表面採集の石器（挿図61～64）

地表面において得られた遺物は、石鏃9、石錐3、磨製石斧10、打製石斧17、石匙1、削器8、粗製削器1、磨石8、凹石6、特殊スリ石2、台石6、剥片7、削片47である。

主に開墾の際に採集されたもので、かなりの遺構が破壊されたものと思われる。

石鏃（挿図61—22～30）は、凹基鏃7点、不明2点で、石質は下呂石5、黒曜石3、チャート1である。27は片脚鏃と思われる。

石錐は3点あり、いずれも錐部とつまみ部との境が明瞭でない。（31～33）

石匙（34）は縦形で、つまみ部を除く全周に刃を備える。下呂石製。削器類は、方形・直線刃・外弯刃等様々であるが、大形品が多い。37のみ片刃で他は両面から刃がつけられている。35は黒曜石、36は玉随、38は硬質頁岩、他は下呂石と石材も様々であるが、大形品は下呂石製で占められる。図示した他に下呂石製削器2がある。

41は緑色片岩製の粗製削器で、2縁に刃部がある。

磨製石斧は定角式の小形2、大形2、乳棒状2、不明4で、蛇紋岩、角閃石安山岩、閃緑岩が使用されている。完形は2点である。（42～46）

打製石斧は全て短冊形で、ほぼ完形の個体は10点を数える。凝灰質安山岩と緑色片岩が大半を占め、砂岩製が2点ある（47～53）

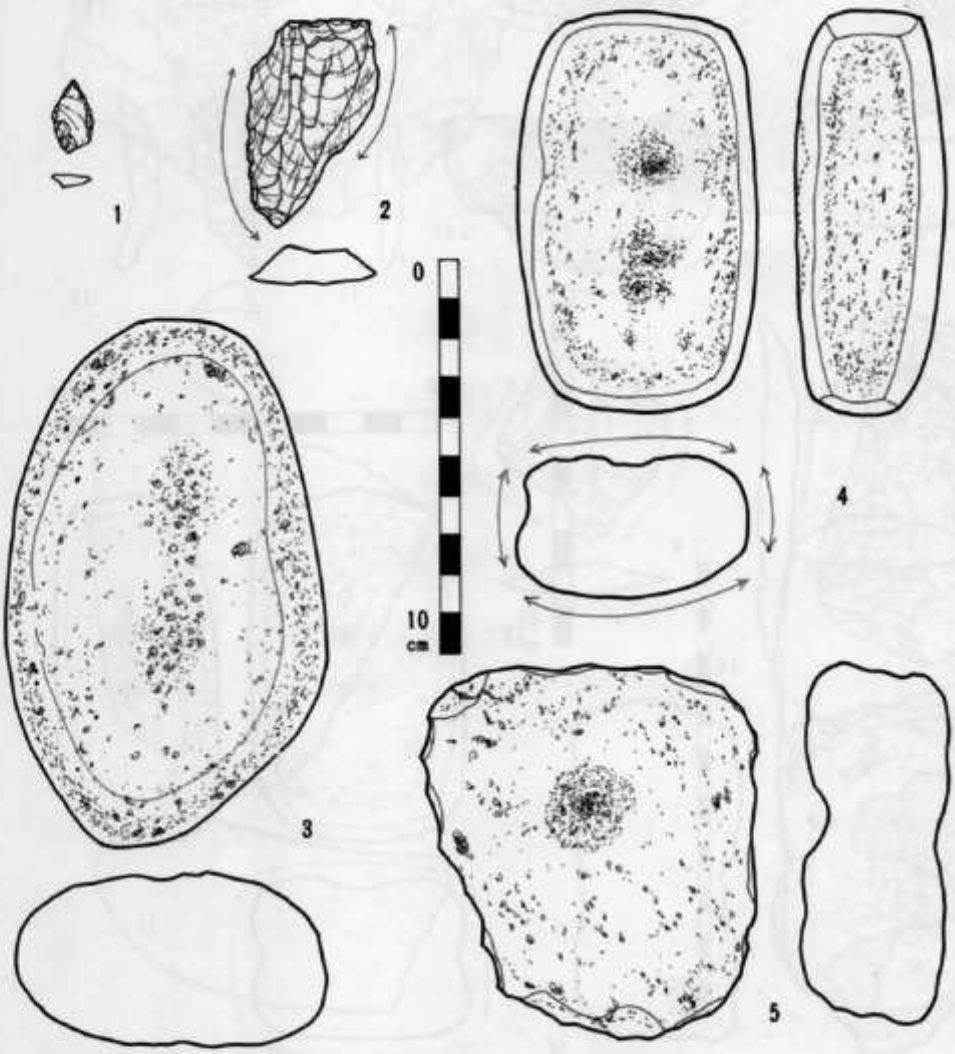
凹石は6点あるが、スリ石兼用が1点（54）、特殊スリ石兼用のもの1点（59）、いわゆる雨垂れ石（蜂の巣石）が2点あり（60）、それぞれ異なった使用法を考える必要がある。特に雨垂れ石は凹みが円錐形をなしており、少なくとも先端の尖った工具での敲打による形成が考えられる。

特殊スリ石（58）は、棒状の流紋岩礫の長軸の一面に使用痕の残るもので、縦位・横位のど

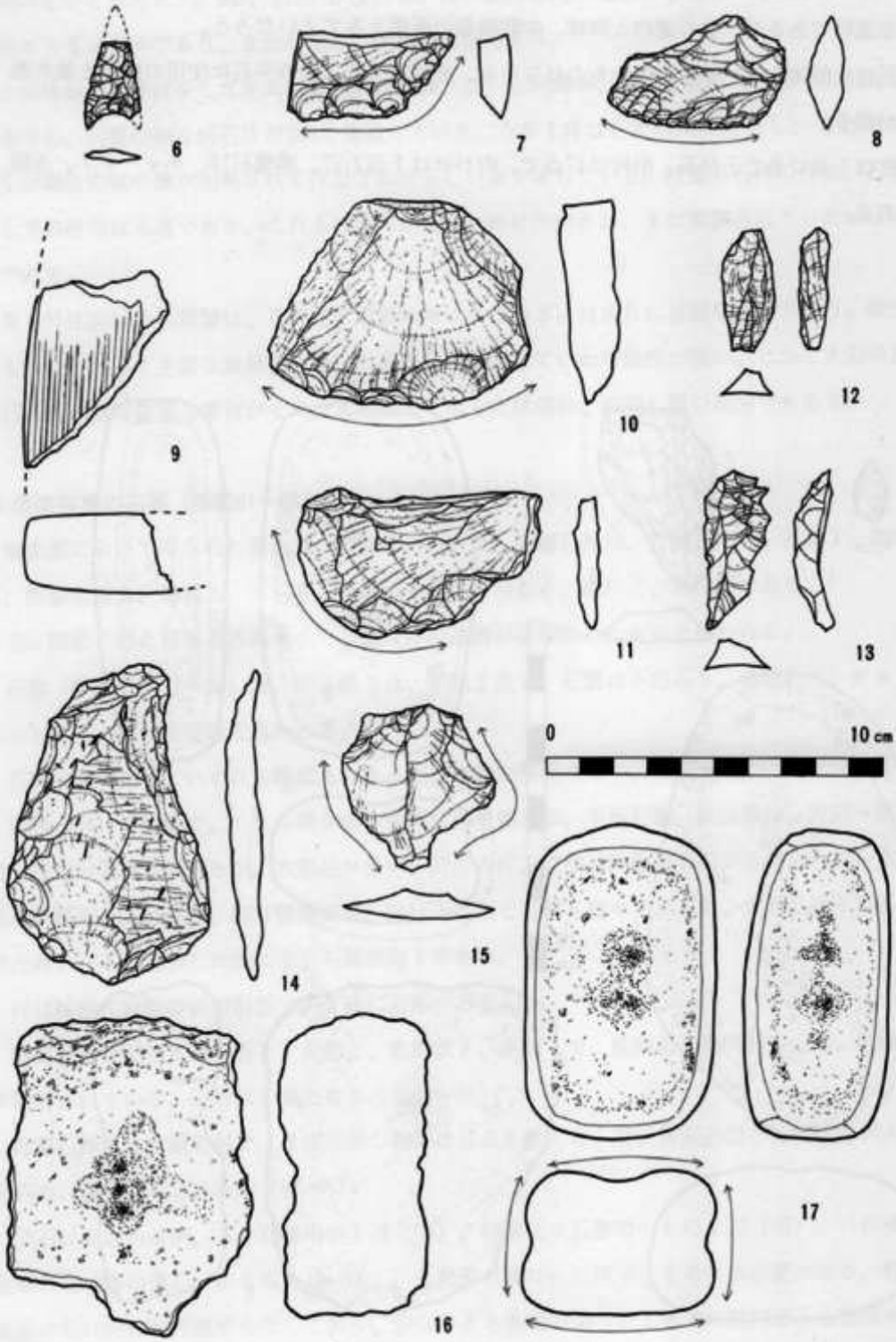
ちらの方向に使用したかは不明であるが、かなり滑らかとなっている。一般に早期に特徴的とされる遺物であるが、他の遺物と同様、中期後葉の所産とみてよいだろう。

台石は6個体あり、原形を保つものはないが、流紋岩・安山岩の平石に使用の痕跡と被火熱の痕が残る。

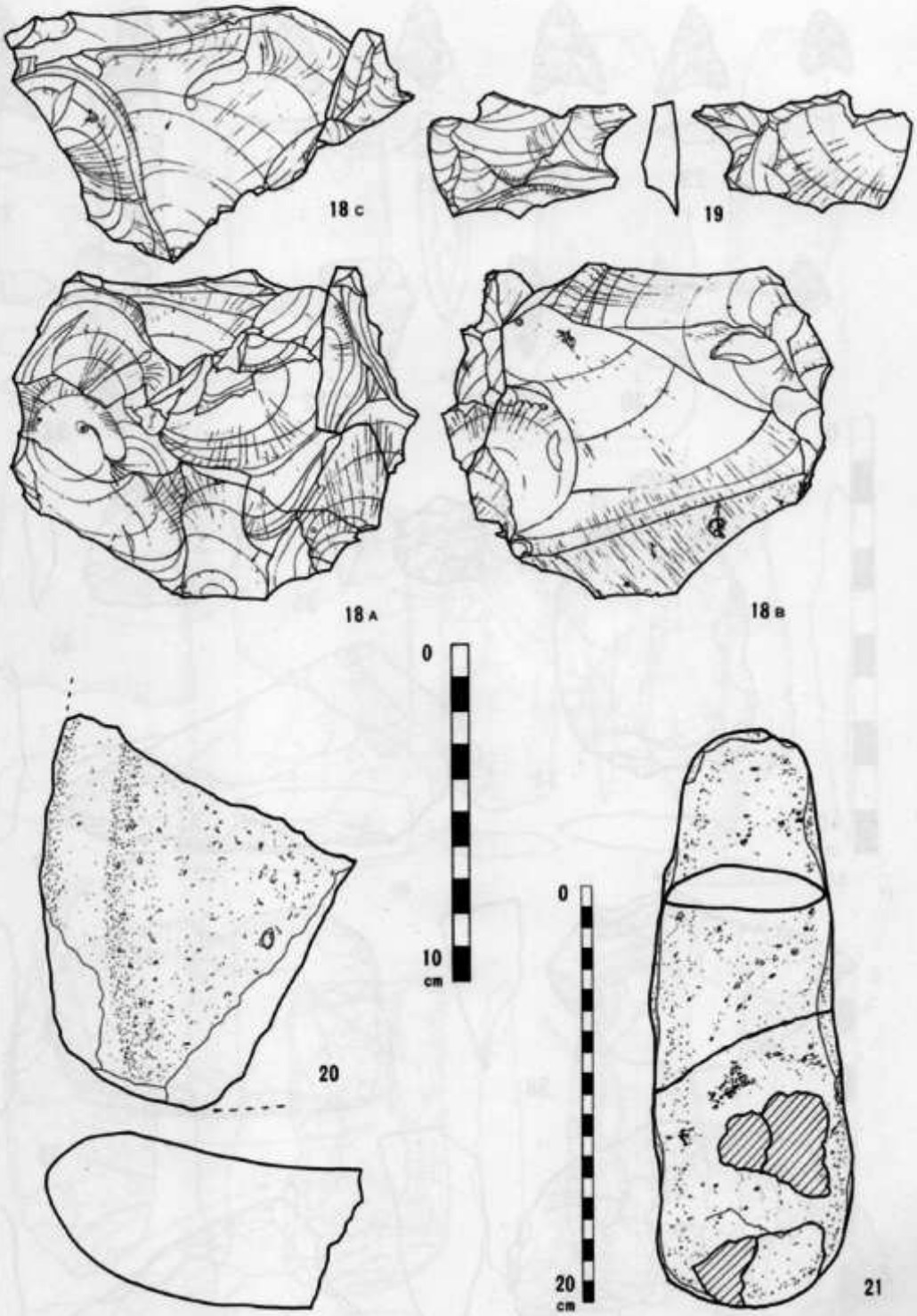
剥片は7点で全て下呂石、削片は47点で、内わけは下呂石27、黒曜石12、チャート7、玉随1である。



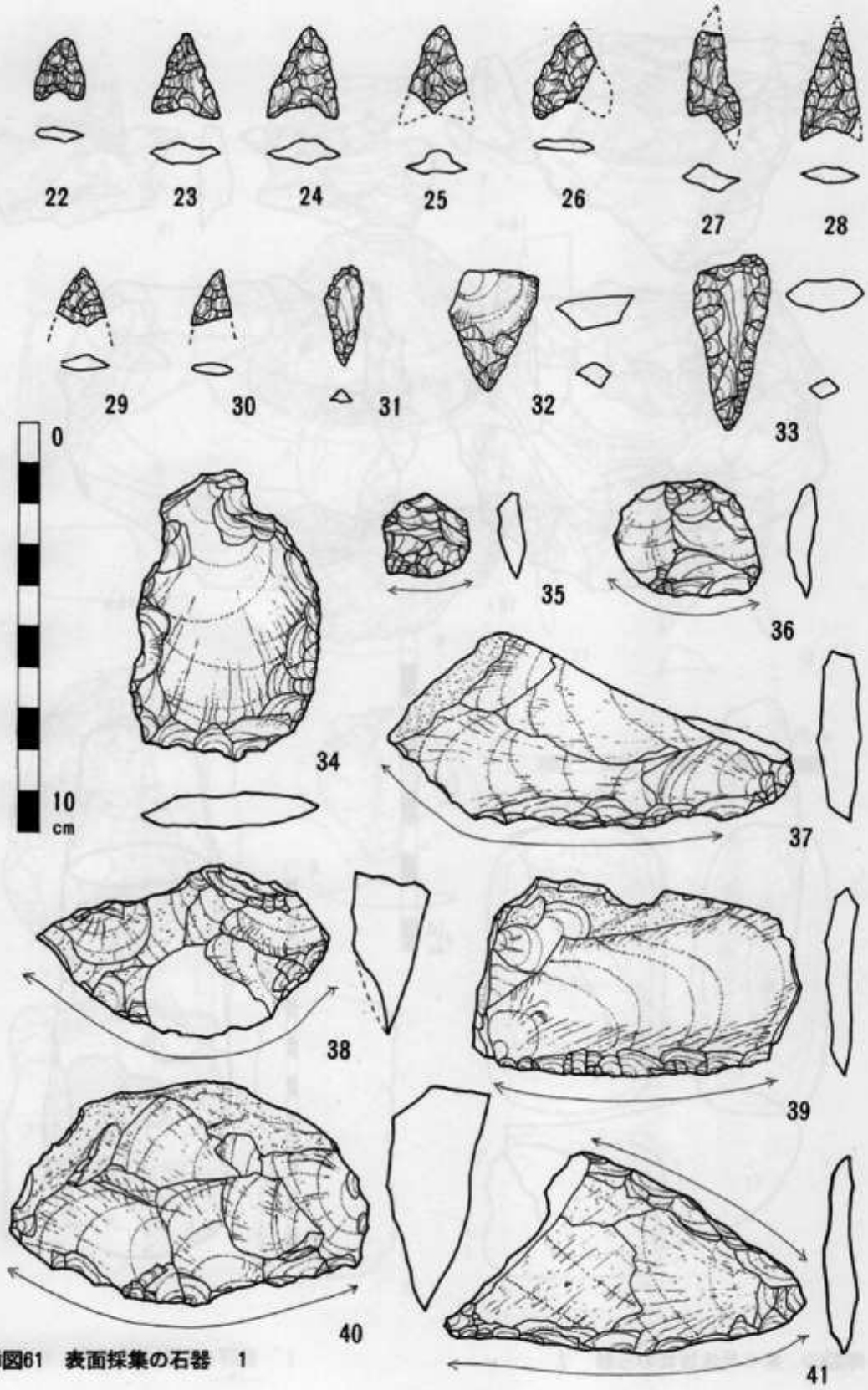
挿図58　第2号住居址の石器



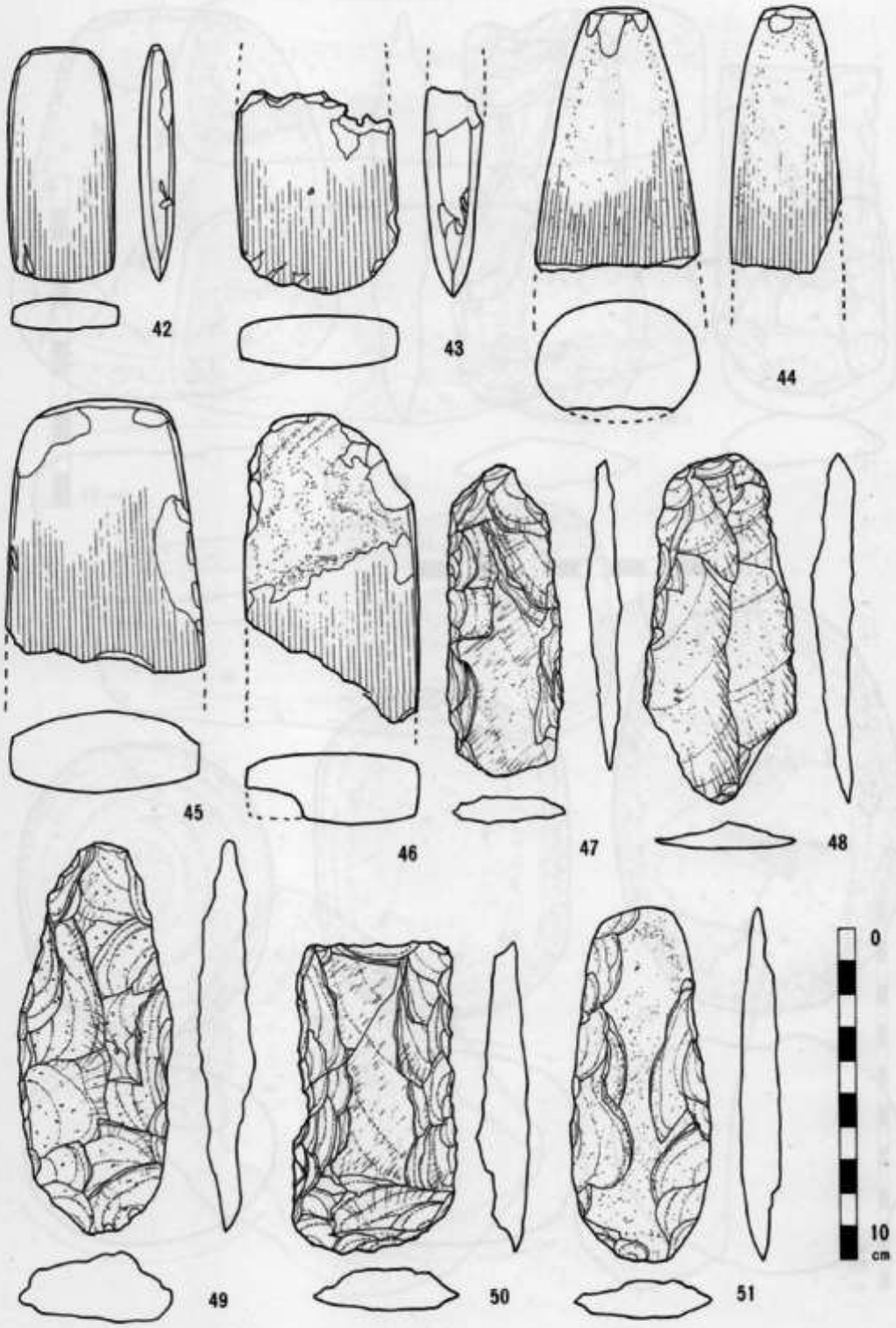
挿図59　第３号住居址の石器　1



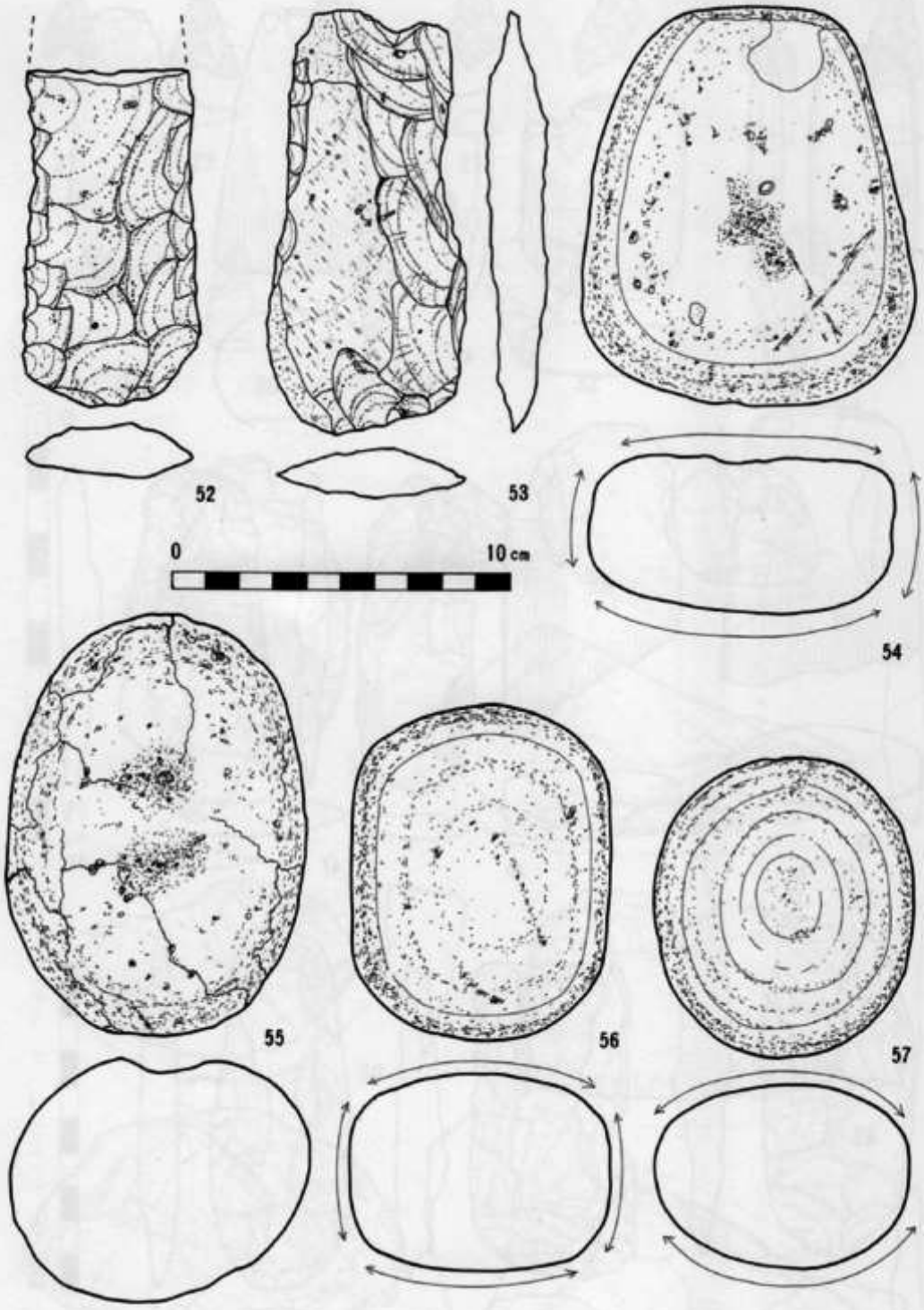
挿図60　第３号住居址の石器　２



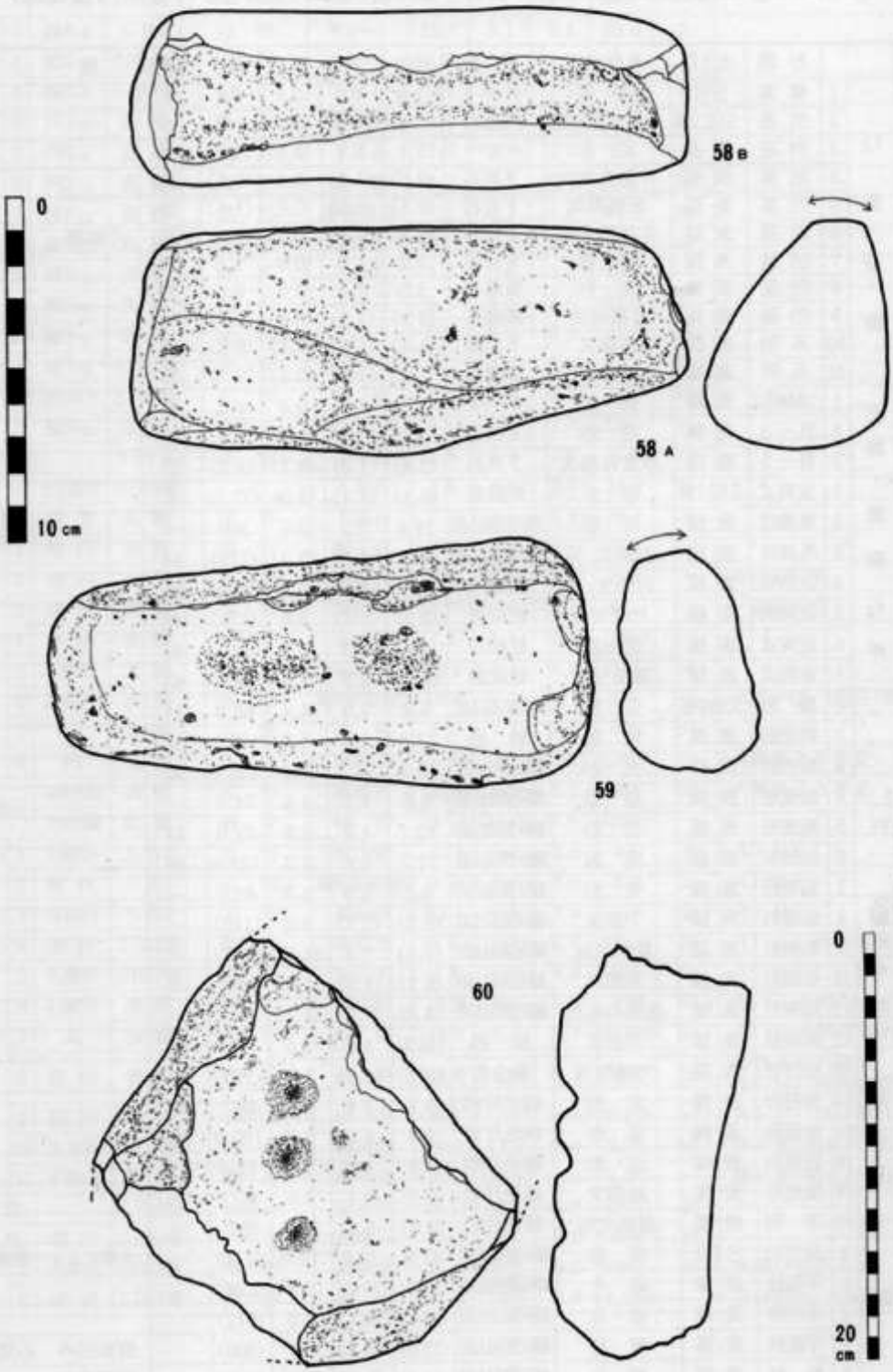
挿図61　表面採集の石器　1



挿図62　表面採集の石器　2



挿図63　表面採集の石器　3


58 B
0
10 cm
58 A
59
60
0
20
cm

第5表　無手無冠農場遺跡　石器一覧表（単位：cm，g　カッコ内現存値）

		形態	出土区	遺存状態	石質	長さ	巾	厚さ	重さ	挿図No.	備考
打製石鏃	1	柳葉	SB2	完形	チャート	1.8	1.0	0.4	0.7	1	
	2	凹基	SB3上層	先端片脚先欠	黒曜石	(2.5)	(1.7)	0.4	(1.3)	6	
	3	凹基	表採	完形	チャート	2.1	1.7	0.5	1.4	23	
	4	凹基	表採	片脚先端欠	下呂石	(2.8)	(1.4)	0.4	(1.2)	28	
	5	凹基	表採	両脚部欠	下呂石	(2.1)	(1.5)	0.6	(1.1)	25	
	6	凹基	表採	先端脚先欠	下呂石	(2.4)	(1.4)	0.5	(1.5)	27	片脚鏃
	7	凹基	表採	完形	下呂石	2.2	1.8	0.5	1.5	24	
	8	凹基	表採	完形	黒曜石	1.5	1.2	0.3	0.4	22	
	9	凹基	表採	片脚部欠	黒曜石	(2.2)	(1.5)	0.2	(0.7)	26	
	10	不明	表採	基部欠	下呂石	(1.4)	(1.0)	(0.4)	(0.5)	30	
	11	不明	表採	基部欠	黒曜石	(1.4)	(1.2)	(0.4)	(0.3)	29	
石錐	1	つまみ形3	表採	完形	チャート	4.2	2.9	0.8	6.2	33	
	2	B－3	表採	完形	下呂石	3.0	1.9	0.8	4.5	32	
	3	B－3	表採	つまみ部欠	下呂石	(2.4)	(1.0)	(0.7)	(1.3)	31	
磨製石斧	1	定角式	SB3上層	破片	蛇紋岩	(5.1)	(4.1)	(2.3)	(77.5)	9	
	2	乳棒状	表採	完形	角閃石安山岩	11.8	5.2	3.5	300	—	
	3	乳棒状	表採	刃部欠 ½	角閃石安山岩	(8.0)	(4.8)	(3.2)	(170)	44	
	4	定角式	表採	刃部欠 ½	閃緑岩	(8.5)	(6.0)	2.5	(200g)	45	
	5	定角式	表採	刃部欠½	蛇紋岩	(9.2)	(5.2)	2.3	(170)	46	
	6	定角式	表採	完形	蛇紋岩	7.1	3.3	1.2	55.5	42	
	7	定角式	表採	基部⅔欠	蛇紋岩	(6.0)	4.9	1.8	(88.0)	43	
打製石斧	1	撥形	SB3中層	完形	角閃石安山岩	9.4	5.9	1.1	65.0	14	
	2	短冊形	表採	完形	砂岩	12.5	5.8	1.9	190.0	53	
	3	短冊形	表採	完形	凝灰質安山岩	10.0	15.2	1.9	135.0	52	
	4	短冊形	表採	完形	凝灰質安山岩	9.6	4.1	1.5	74.0	—	
	5	短冊形	表採	完形	凝灰質安山岩	10.7	4.2	1.5	77.0	51	
	6	短冊形	表採	完形	凝灰質安山岩	11.7	4.6	2.3	125.0	49	
	7	短冊形	表採	完形	凝灰質安山岩	9.2	3.9	1.7	65.0	—	
	8	短冊形	表採	刃部欠	凝灰質安山岩	(9.2)	(5.7)	2.0	(110)	—	
	9	短冊形	表採	基部欠½	凝灰質安山岩	(7.1)	7.4	(1.9)	(145)	—	
	10	短冊形	表採	刃部欠	凝灰質安山岩	(6.1)	(4.5)	(1.5)	(48)	—	
	11	短冊形	表採	基部のみ⅓	凝灰質安山岩	(4.8)	(4.8)	(1.3)	(49)	—	
	12	短冊形	表採	刃部欠	砂岩	(10.2)	4.6	1.5	(62)	48	
	13	短冊形	表採	刃部欠½	安山岩	(10.2)	(4.7)	1.8	(100)	—	
	14	短冊形	表採	完形	緑色片岩	9.1	3.4	1.1	43.7	47	
	15	短冊形	表採	完形	緑色片岩	9.4	4.9	1.8	120.0	50	
	16	短冊形	表採	完形	緑色片岩	7.9	4.7	1.4	74.0	—	
	17	短冊形	表採	基部欠	緑色片岩	(6.2)	5.4	1.6	(67)	—	
	18	不明	表採	基部欠⅔	緑色片岩	(6.0)	5.5	1.5	(83)	—	
台石	1	長方形	SB2	完形	凝灰質安山岩	41.9	23.8	12.0	(14,500)	—	火熱により一部赤変
	2	平板状	表採	破片	凝灰質安山岩	(17.3)	(17.4)	7.8	(2,300)		
	3	平円礫	表採	破片	凝灰質安山岩	(13.1)	(10.1)	5.0	(972)		
	4	平板状	表採	破片	凝灰質安山岩	(12.0)	(8.7)	5.7	(400)		磨痕凹み　石皿？
	5	板状	表採	破片	凝灰質安山岩	(11.8)	(7.7)	(4.6)	(450)		両面磨痕
	6	板状	表採	破片	凝灰質安山岩	(12.3)	(10.1)	3.3	(650)		一面磨痕
	7	平円礫	表採	破片	砂質凝灰岩	(14.5)	(11.1)	6.3	(1,240)		火熱によるひび割れ

		形態	出土区	遺存状態	石質	長さ	巾	厚さ	重さ	挿図No.	備考
削器	1	縦4-a	SB2	完形	チャート	15.7	3.1	1.1	20.0	2	
	2	縦6-a	SB3上層	完形	チャート	4.6	2.6	1.0	15.8	7	
	3	横8-b	SB3中層	完形	下呂石	3.4	5.4	1.1	18.3	8	
	4	円1-c	表採	完形	黒曜石	2.1	2.2	0.7	2.8	35	
	5	円2-c	表採	完形	下呂石	2.8	2.7	0.8	6.5	—	
	6	円2-c	表採	完形	玉髄	3.7	3.0	0.7	8.6	36	
	7	縦7-a	表採	完形	硬質頁岩	7.1	4.3	1.8	44.9	38	
	8	縦9-a	表採	完形	下呂石	8.7	5.4	2.2	98.0	40	
	9	縦2-a	表採	完形	下呂石	4.8	3.6	1.2	18.3	—	
	10	縦9-a	表採	完形	下呂石	8.2	4.4	1.5	61.0	37	
	11	縦9-a	表採	完形	下呂石	7.9	4.8	0.8	47.9	39	
粗製削器	1	縦7-a	SB3上層	完形	緑色片岩	7.1	4.3	0.8	32.9	11	
	2	横10-b	SB3中層	完形	砂岩	6.0	7.8	1.8	105	10	
	3	縦2-a	表採	基部欠	緑色片岩	(8.7)	4.7	1.0	(39)	41	
ピエス・エスキーユ			SB3床	完形	下呂石	5.6	1.4	1.0	3.9	12	
u・f		方形板状	SB3中層	—	下呂石	4.8	4.6	0.9	14.9	15	
石匙		縦型	表採	完形	下呂石	7.1	4.5	0.9	38.1	34	
磨石	1	楕円	表採	完形	凝灰岩	9.0	6.0	4.7	355	—	
	2	楕円	表採	完形	流紋岩	9.9	9.2	5.9	625	—	両端敲打痕
	3	棒状	表採	½欠	流紋岩	(8.6)	(6.6)	(5.1)	(362)	—	一端敲打痕
	4	不明	表採	小破片	安山岩	(7.3)	(4.1)	(3.8)	(135)	—	
	5	石鹸形	表採	完形	安山岩	10.2	7.7	5.8	712	56	
	6	長楕円	表採	完形	凝灰質安山岩	12.8	7.4	4.1	557	—	火熱ひび一端敲打痕
	7	円	表採	完形	砂岩	9.0	7.7	5.6	546	57	
	8	円	表採	¾欠	流紋岩	(9.9)	(6.7)	(5.1)	(340)	—	火熱による赤変
特殊磨石		三角台形	表採	完形	流紋岩	16.1	6.9	5.2	854	58	火熱による赤変
		三角円礫	表採	破片	砂岩	(9.6)	(10.0)	(4.8)	(528)	—	
凹石	1	石鹸形	SB2	完形	安山岩	10.3	6.1	3.8	400	4	A0 B2 C1
	2	板状	SB2	完形	凝灰質安山岩	9.2	8.6	4.0	370	5	A1 B1
	3	長楕円	SB2	完形	凝灰岩	13.4	7.9	4.5	715	3	A2 B2
	4	板状	SB3上層	破片	流紋岩	(9.3)	(7.1)	4.4	(355)	16	A1 B2 両面磨痕
	5	石鹸形	SB3下層	完形	安山岩	9.4	5.9	4.4	375	17	A2 B2 C2 D2
	6	石鹸形	表採	完形	安山岩	11.8	9.9	5.0	910	54	A1 B1 火熱による赤
	7	丸	表採	完形	砂岩	12.8	8.9	7.7	1,160	55	A2 B2 火熱ひび割れ
	8	柱状	表採	完形	砂岩	15.6	6.8	5.1	612	59	特殊スリ石兼用 A2 B2 両端敲痕
	9	楕円	表採	一部小欠	砂岩	8.8	7.3	(5.4)	(512)	—	A2 B1 ひび割れ
	10	長方形	表採	½欠	凝灰岩	(18.4)	14.6	8.8	(2,870)	60	蜂の巣(雨だれ)石
	11	不整円	表採	破片	凝灰岩	(10.7)	(10.9)	(8.4)	(1,190)	—	蜂の巣(雨だれ)石
石皿			SB3上層	¼破片	安山岩	(9.7)	(9.0)	4.7	(505)	20	
石核		塊状	SB3下層	—	黒曜石	11.2	9.7	6.5	560	18	
自然礫	1	石斧状	SB3下層	完形	凝灰岩	27.5	9.5	3.0	960	21	火熱ひび割れ
	2	球状	SB3下層	完形	砂岩	11.6	10.7	8.0	1,260		ひび割れ、両面磨痕

第10章　無手無冠農場遺跡の総括

本遺跡は標高843m、東西90×南北130、約12,000㎡の台地で表土は20～50cm、その下は数メートルの火山灰堆積がある。竪穴住居はその火山灰層を深く（第3号住居址では50cm、第2号住居址では20cm）掘り込んでいる。

今回分布調査により確認された住居址は5基で、そのうち第2号住居址の西半分、第3号住居址の周壁部を除いて床面まで発掘をした。第3号住居址は5.50×5.35m、5角形を呈し、主柱穴は6本で入口に埋甕1基を設け、入口柱2本がみられる。特筆すべきは炉が大きいこと(1.5×1.6m)、火災にあっていて、おびただしい量の焼土が床面上に堆積していることである。また、13×9cmの黒曜石石核や、土偶頭部、ミニチュア土器など特色のある遺物が出土している。

51頁に早期～後期にかけての土器細分類を掲載しているが、この中で高山市上野町垣内遺跡にみられたような咲畑、里木Ⅱ式比定のものが出土していない。発掘調査範囲が広がれば、伴出するのかもしれない。中期前半のもの、あるいは前期の遺物は、今回確認されていないが、早期条痕文系の土器（繊維入り）が出土した。

石器は総数176点出土し、時期はほぼ縄文時代中期後半に所属するものばかりである。第3号住居址から大型の黒曜石製石核が出土している。

本遺跡から眺望する乗鞍岳はすばらしいものである。縄文時代の集落はかなり大規模なものであったことが予想され、100軒に及ぶのではないかと思われる。幸い、本遺跡は遺跡の遺存状況、遺跡範囲の確認調査であったため遺構は保存されることになった。土地所有者の中屋栄一郎氏の埋蔵文化財に対する熱意に感謝し、これからの遺跡保存に期待がもたれる。

PL7　全　　景

PL8　第1号住居址・北から

江名子糠塚遺跡

図　　版

PL 9　第1号住居址埋甕

PL10　埋甕断面

PL11　石組炉

PL12　第1号住居址と土壙

PL13　土　　壙

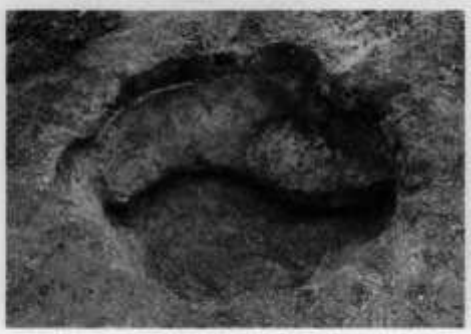
PL14　第1号土壙　土器

PL15　第1号土壙

PL16　第2号土壙

PL17　第3号土壙

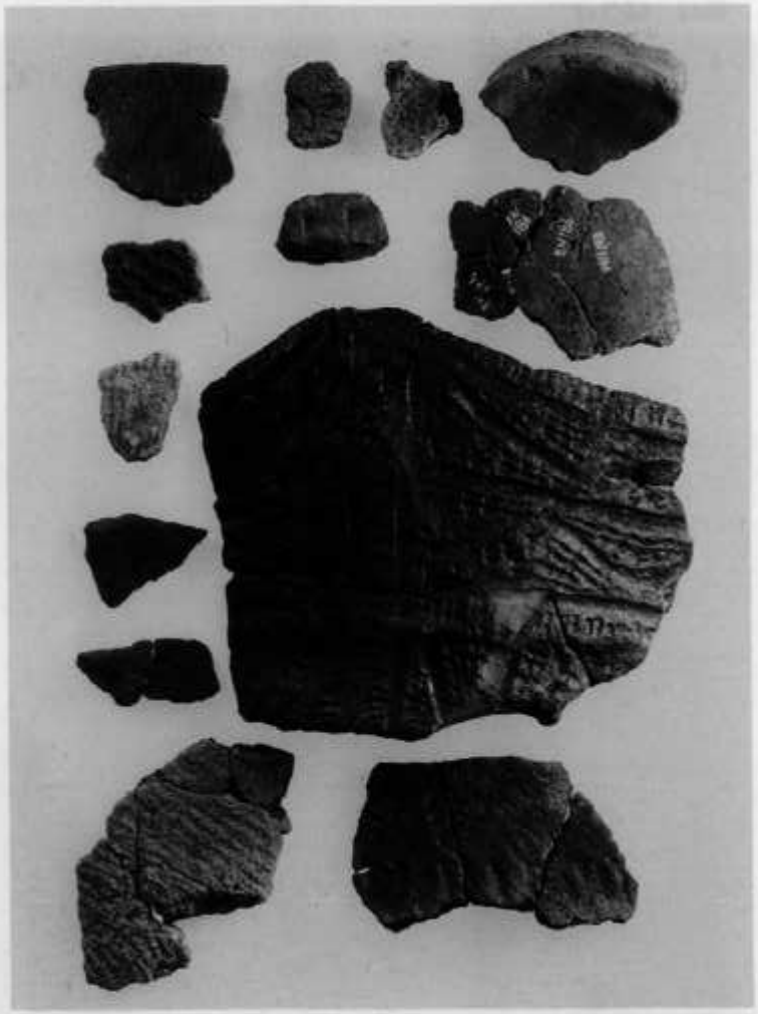
PL18　第4号土壙



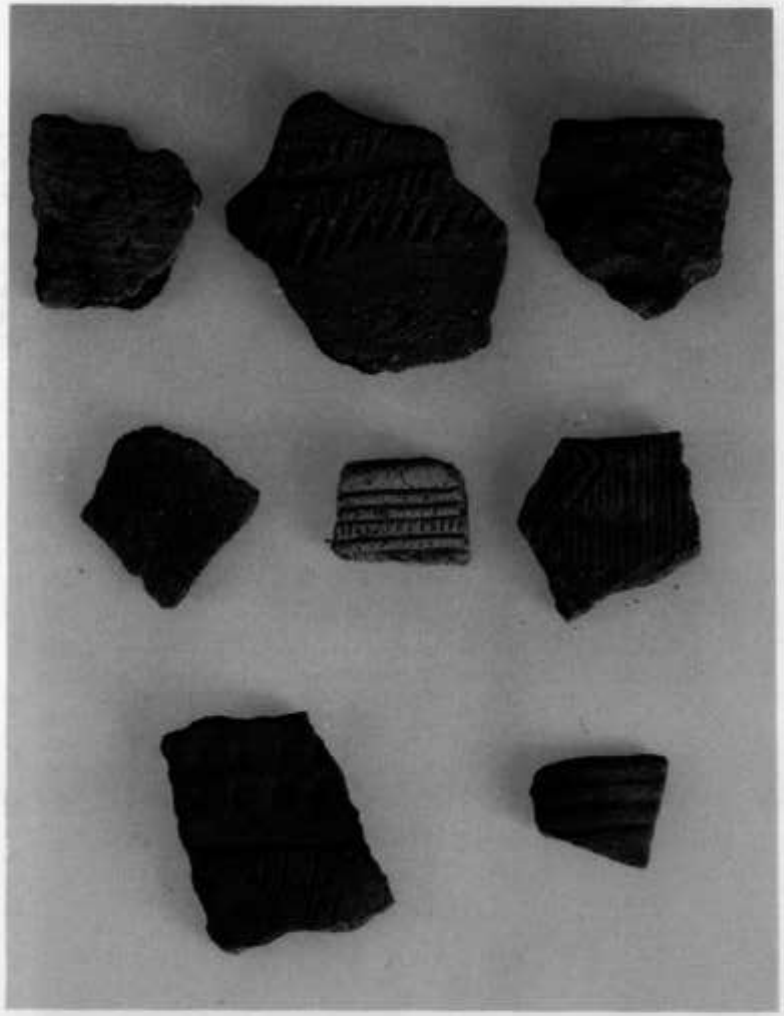
PL19　第5号土壙

PL20　第6号土壙

PL22　26図



PL21　23図

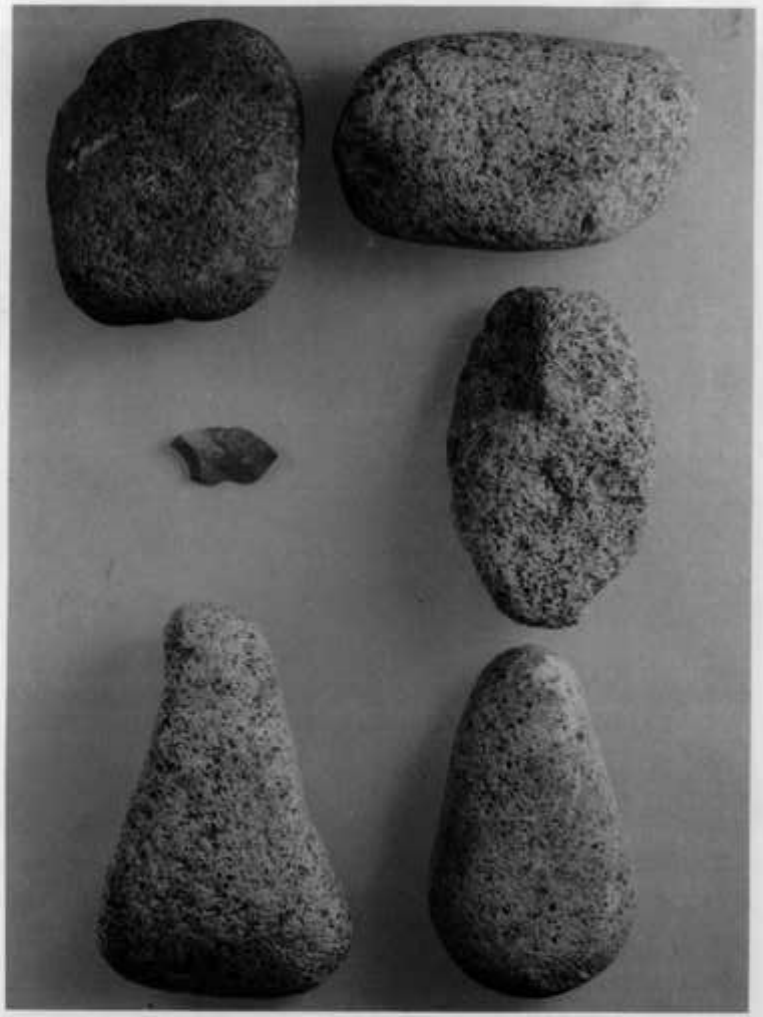


PL24　29図

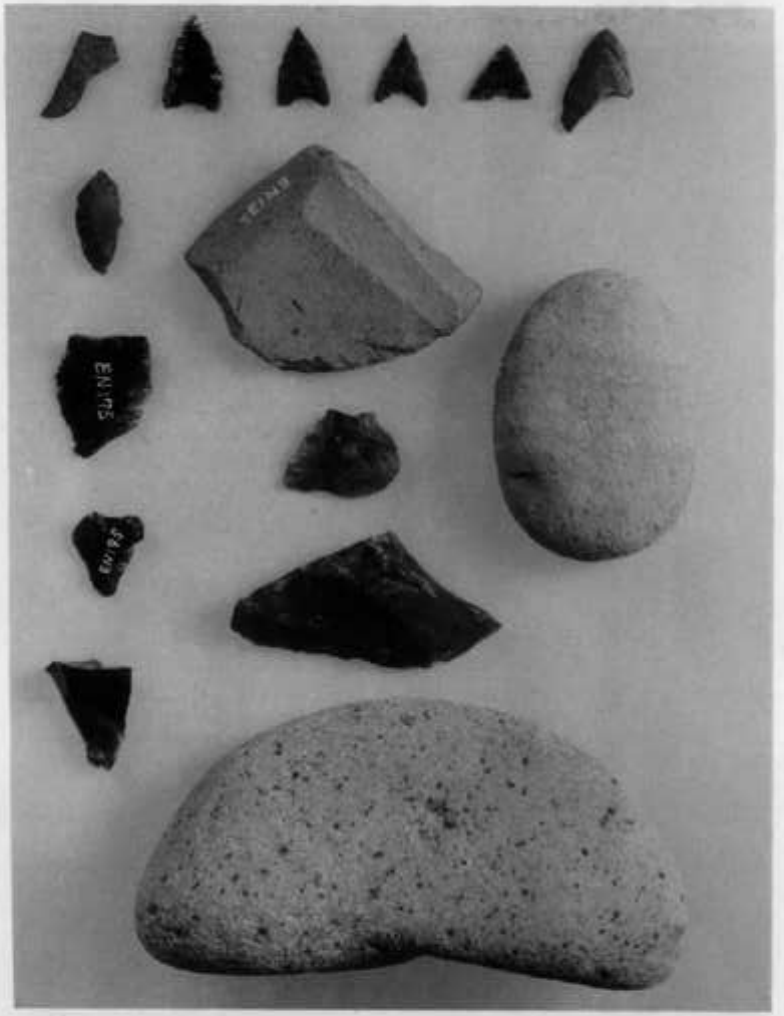
PL23　27図

PL26　28図

PL25　25図



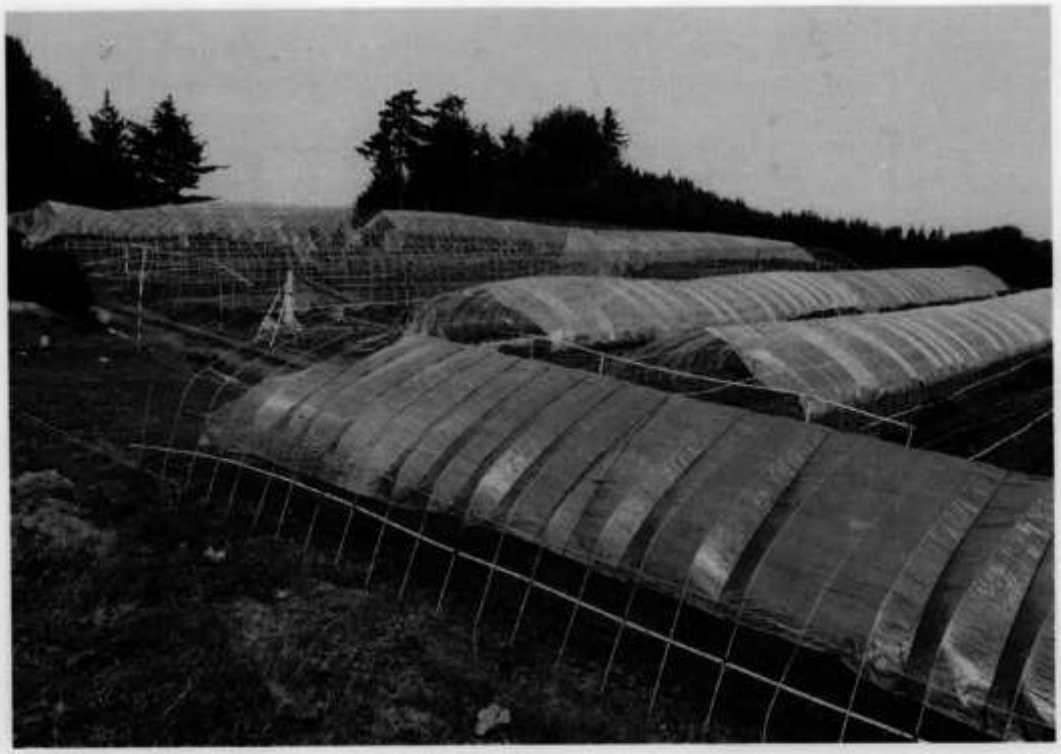
PL28　32図



PL27　30図

無手無冠農場遺跡

図　　版



PL29　現　　況

PL30　遺跡からみる乗鞍岳

PL31　第3号住居址プラン（北から）

PL32　第 3 号 住 居 址（西から）

PL33　第3号住居址埋甕

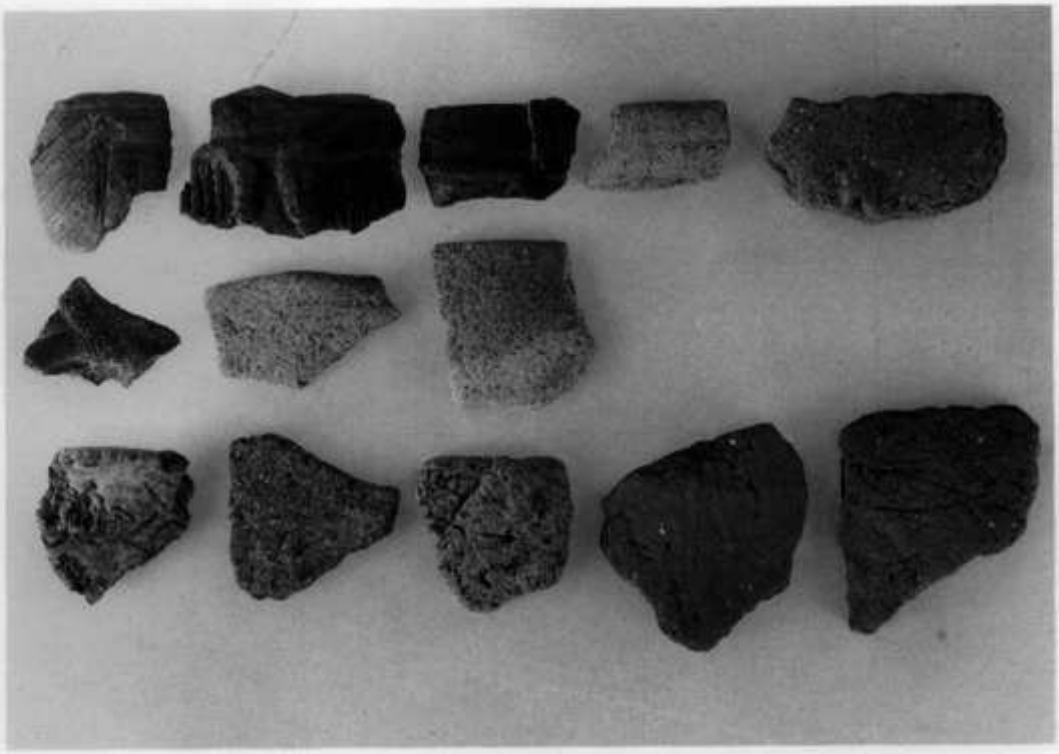
PL34　遺　跡・南　端

PL35　第4号住居址の一部

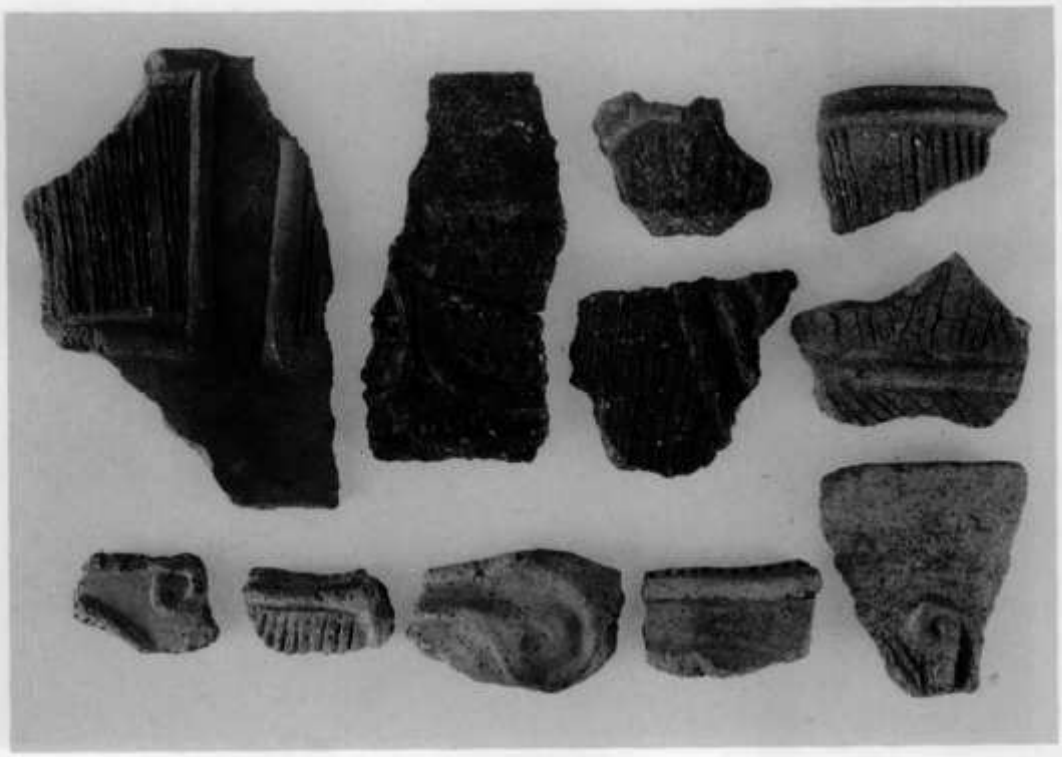
PL36　第5号住居址の一部

PL37　52図

PL38　57図

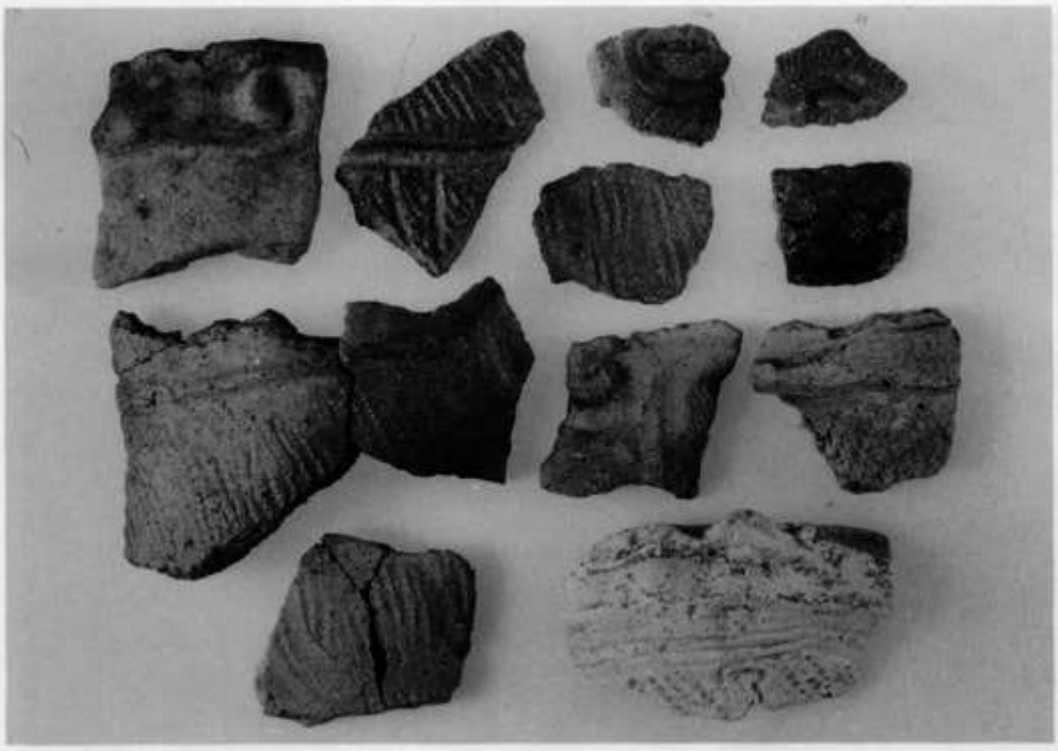


PL39　47、48図

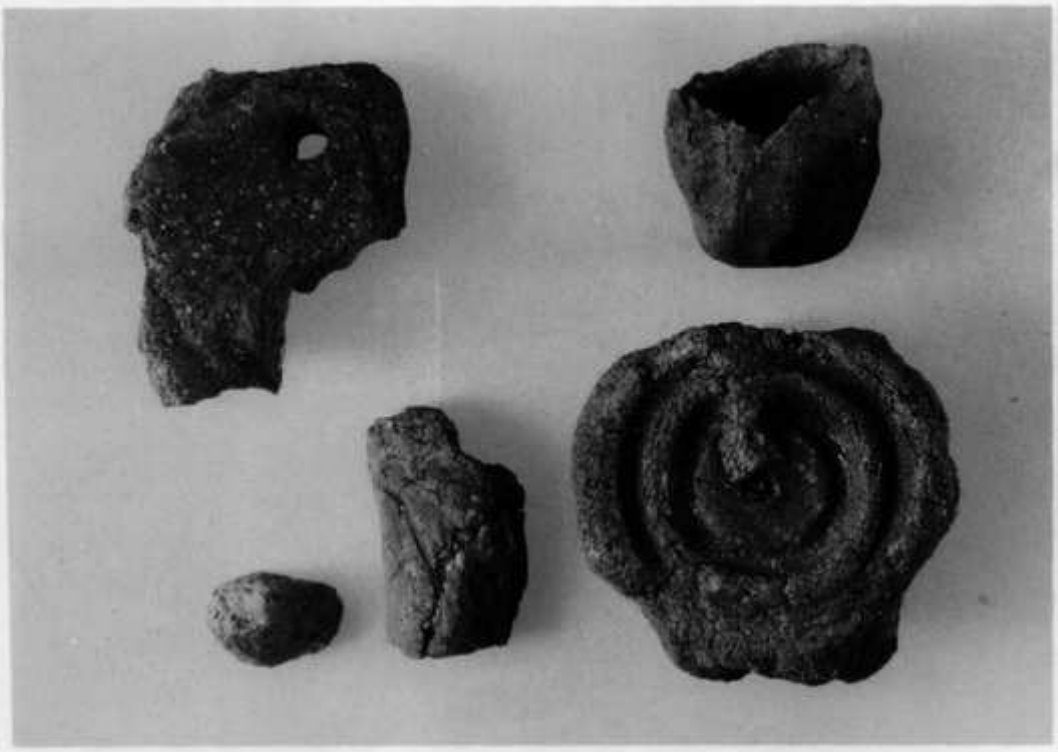


PL40　49図

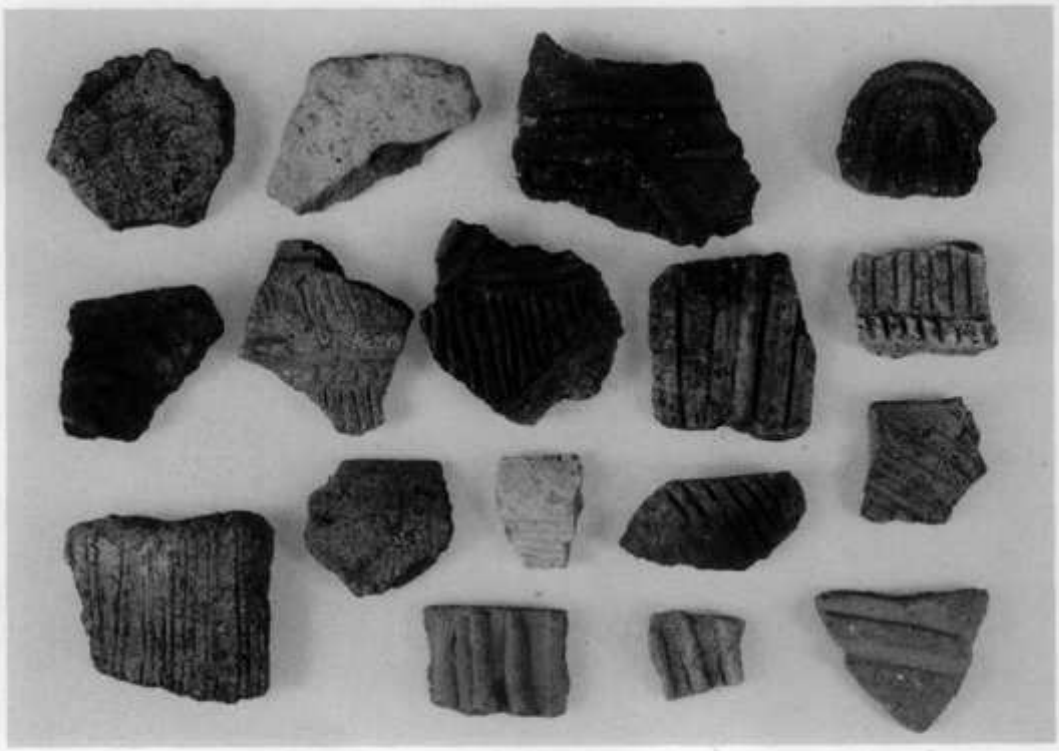
PL41　50図



PL42　51図

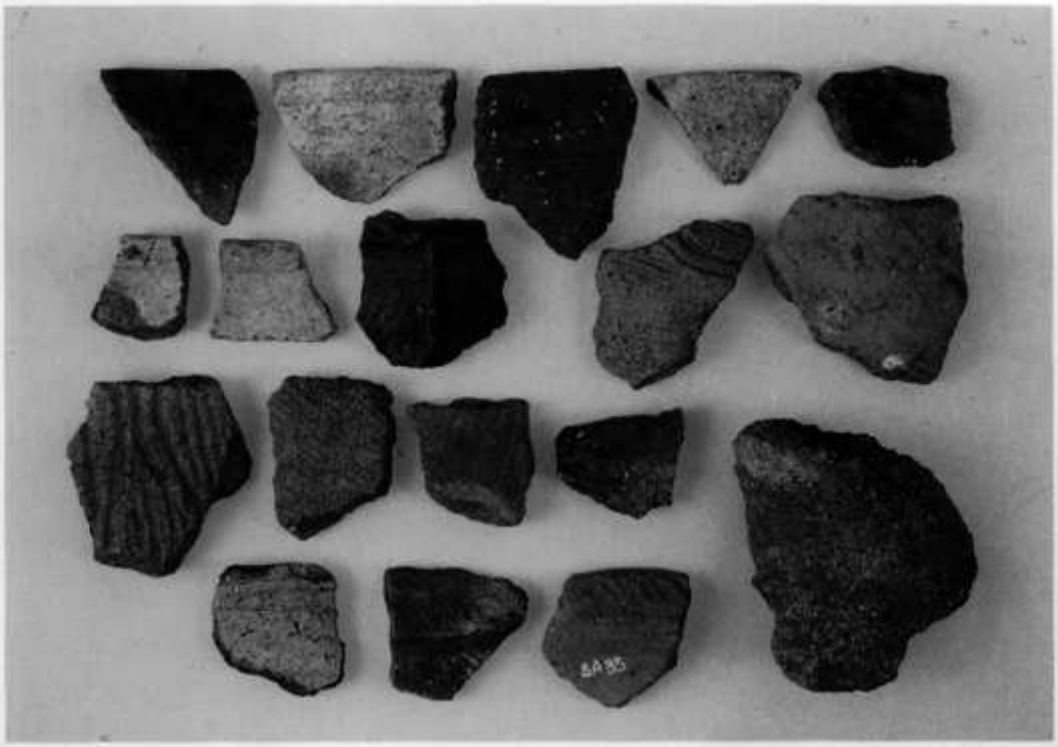


PL43　53図

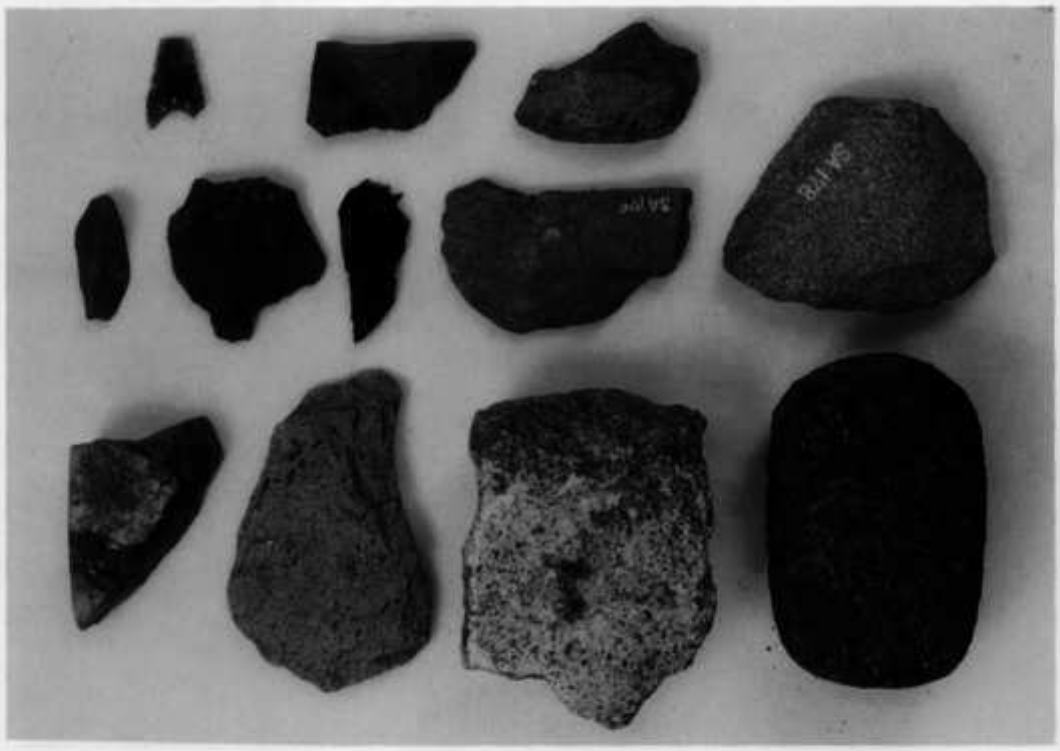


PL44　54図

PL45　55図

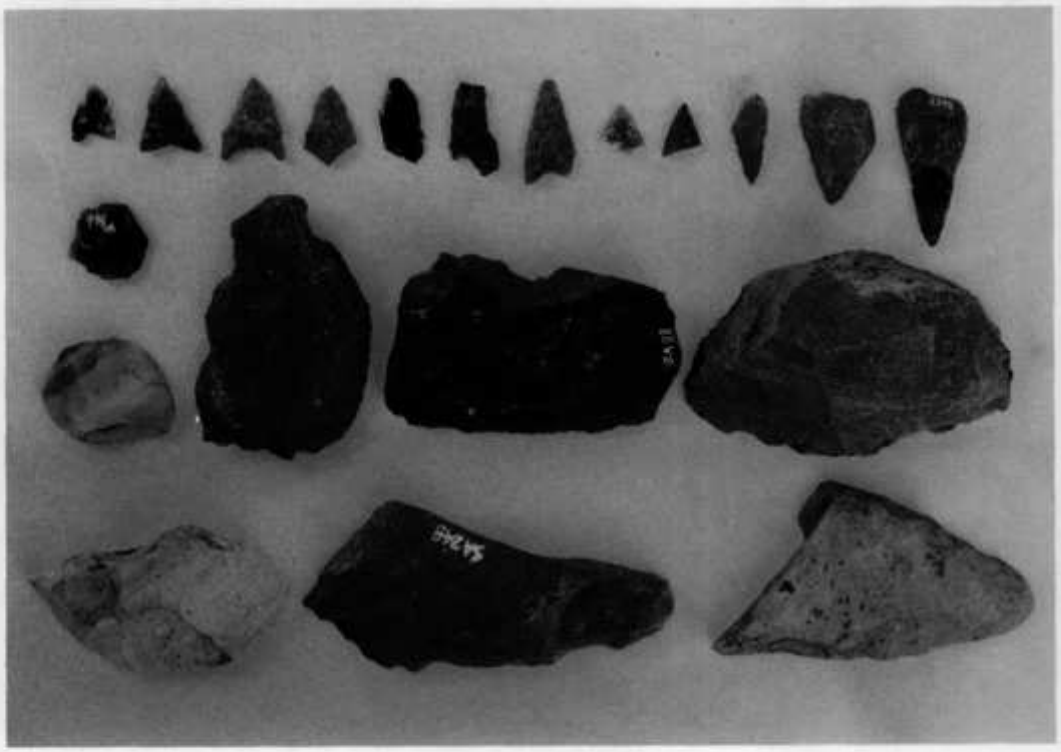


PL46　56図



PL47　59図

PL48 60図



PL49 61図

江名子棟塚遺跡・無手無冠農場遺跡
発掘調査報告書

平成4年3月　発行

編集　高山市教育委員会
印刷　斐太中央印刷株式会社
　　高山市下三之町14